

長門の視線 一過去編開始一

電動ガン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

長門に転生した。

深海棲艦との戦い、人間との確執、仲間との関係。

もう元の自分がどうだったか忘れてしまった。忙しすぎて。戦いすぎて。

気がついたらどの艦娘ともあんまり仲良くなれてなかった。ぼっちになってた。陸奥とさえも会話はあまりない。

これはいかん。ちよつと忘れていたがやっぱり転生はいちやいちやしてなんぼだろう。

なので少し戦いはおやすみだ。

2022/11/08 過去編開始しました

目次

一章 私とおやすみ

page 1 私と中華鍋 | 1

page 2 私と親子丼 | 5

page 3 私と万年筆 | 9

page 4 A 私とイタリアン | 13

page 4 B 私とイタリアン | 18

page 5 A 私の妹 | 23

page 5 B 私と妹 | 27

page 6 私と左遷 | 34

page 7 私と軽巡 | 40

page 8 私とまんまみーや | 45

page 9 私と魚雷 | 54

page 10 私と大湊 | 59

page 11 私と新任務 | 63

page 12 私と駆逐艦 | 66

page 13 私と超訓練 | 72

page 14 私と超変身 | 77

page 15 私と超爆発 | 82

page 16 私と安心の日々 | 90

二章 私と大戦艦

page 17 私と監査 | 96

file 1 洗脳艦娘 | 102

page 18 私と大改装 | 107

page 19 私と再戦 | 113

| | | |
|--------------|------------|-----|
| page 20 | 私と旅立ち | 119 |
| page 21 | 私と新しい親子丼 | 125 |
| page 22 | 私とスパナ | 132 |
| page 23 A | 私と私 | 138 |
| file 2 | 扶桑のお見舞い | 145 |
| page 23 B | 私と私 | 149 |
| file 3 | 避難訓練 | 155 |
| page 24 | 私と飛行甲板 | 161 |
| 三章 私と作戦 | | |
| page 25 | 私と開戦 | 168 |
| page 26 | 私と留守番 | 175 |
| page 27 | 私と夜襲 | 180 |
| page 28 | 私と戦線拡大 | 187 |
| page 29 | 私と次女 | 194 |
| page 30 | 私と荒神 | 199 |
| page 31 | 私と大脱出 | 206 |
| page 32 | 私と告白 | 214 |
| last page 33 | 私と時代 | 219 |
| epilog | 私と艦隊これくしょん | 229 |
| 外章 艦隊これくしょん | | |
| file 4 | ビス子 | 233 |
| file 5 | 長門 | 237 |
| 特別章 過去編 | | |
| page 34 | 私と誕生 | 241 |
| page 35 | 私と初陣 | 248 |

p
a
g
e
3
7

私と空母艦娘

259

p
a
g
e
3
6

私と改造艦

254

一章 私とおやすみ

page 1 私と中華鍋

「長門さん？私はどうしてこんなことになったのか聞いています。す。」

「むう……」

「やあ諸君。長門型戦艦一番艦の長門だ。いわゆる転生者というやつだ。気がついたらドックから出て来るところだった。最初の頃は前世というものの記憶もあったが、艦娘として深海棲艦と戦ううちに忘れてしまった。確か男だった。しかし前世は前世。過ぎたことだ。それより現状、今起こってることをなんとかしなければならぬ。」

「長門さん。……自分の過失を隠蔽しようとするなんて貴方らしくありませんよ?」

「ああ……」

傘を差し、鎮守府のはずれの林で向かい合う彼女は鳳翔。私は傘をささずズブ濡れ。私の目の前には掘った穴。悲哀の視線を送る彼女はとも雨が似合う……。いや今はそんなことは置いておこう。どうする。よりにもよって鳳翔に見られてしまった。誰もいない深夜を狙っていたというのに。

「長門さんっ……!」

「……っ」

穴の中の物は鳳翔にすっかり見られている。仮に鳳翔を口封じしたとしてもこれが見つかったら私がやったとすぐにバレる。

「大丈夫です……提督にお話ししましょう?正直に話せば、みんなわかってくれます。」

「なにを……わかるというのだ?」

私はぎらりと鋭い視線を鳳翔に向ける。びくりと肩をすくめる鳳翔はちよつと可愛くてなにかに目覚めそう……。ええいすぐ話が脱線する。これだから男というのは。恨むぞ私。怯える鳳翔にゆつくり

近づいて。頭二つ分ほどある身長差のある鳳翔に言葉を刺す。

「私は・・・英雄になった。敵泊地を強襲して占領したこともある。南方で深海棲艦旅団を撃滅もした。アイアンボトムサウンドでは孤立して戦艦棲姫と一対一で撃破した。ミッドウエー奪還でも揮作戦で呼ばれるようになった！一度、たった一度の過ちでしかしたこれを皆が見て、どう思う？軽蔑の視線を送るだろう。哀れみの視線かもしれない。」

「そんなこと・・・ッ！」

「ないと言いつけるか？」

「・・・ありません！ここにいるみんなはそんなことしません！」

「・・・そうか。私はそうは思わない。私は怖い。戦艦棲姫に20inch砲を向けられた時の方がまだマシだ・・・こんなに恐怖を感じたのは初めてだ。」

「長門さん・・・」

「・・・。」

転生者だとしても長門として長い間生きていたから誇りもある。数々の作戦に参加し武勲を手にしてきたその誇りを簡単に手放すこと等許されない。それは私もそうだし元の長門も許さないだろう。その上でのこの失敗・・・幸い鳳翔をどこかに飛ばすことは容易い。力も立場もあるからだ。しかしそれは選択肢には入らない、ありえない。鳳翔もその数々の作戦を生き抜いてきた親友だ。そんなこと出来る筈が無い。

「長門さん・・・大丈夫ですよ。みんなわかってくれます。だから泣かないでください。」

「ば、ばかな・・・この長門が涙など・・・」

「朝になったら提督のところに行きましょう？長門さんだったらきっと許してくれますよ。」

「本当かな。」

「ええ・・・それに、私も一緒に行きます。なので・・・」

「壊した中華鍋のこと謝りに行きましょう?」

「はい……」

やはり正直に言うしか道はないのか……なんて恥ずかしい……初めての始末書が中華鍋を壊したからだなんて……

「でも……キレイにふたつに割れてますねーどんな使い方したらこうなるんですか……」

「もうお腹が空いて、ついテンションが上がってな……夜だし……」
「それを埋めて隠蔽するって……どのみちこんな大きな中華鍋がなくなったらすぐわかりますよ?」

「うぐ……」

「はあ……これが現代ソロモンの英雄……」

「ああー!!ほら!鳳翔哀れみの視線した!だから隠そうとしたんだ!!ビッグセブン泣くぞ!ビッグセブン泣かせたらやばいんだからな!ドックが三つ吹き飛ぶんだからな!右手で!利き腕じゃあないんだぞー!」

「はいはい……でも中華鍋がなくてどうやって人数分のお料理しましょう……」

「ああ……ご飯ないってわかったら赤城と加賀ぶちギレるだろうな……」

ああ……夜食は食べられないし。鍋がなかったらご飯食べられないから一航戦の二人はすごく怒るぞ……食べ物に関してはいつまでも怒ってるからなあ。二人は。まあ力尽くで抑えるけども。

「長門さんはまずお風呂に入ってきてください。ズブ濡れですと英雄でも風邪ひきますよ?それとお夜食に親子丼作っておきますから。」

あがったら食堂にきてくださいね。」

「わかった。ありがとう鳳翔。はあー……」

「ため息ばかりついても仕方ないですよ？壊してしまったんですから。中華鍋をまっふたつってどんなことしたら割れるんですか……」
「ノーコメントだ。」

私は鳳翔の傘を持ち、なんとか二人濡れないように鎮守府に戻った。やはり私が作るより鳳翔が作ったほうが安全で、親子丼は美味かった。提督に報告したら笑いながら「長門さんも以外とお茶目なところがあるんですね」なんて言われて恥ずかしかった。その日のお昼、鍋が壊れたのでオカワリ制限が付き、一航戦の悲痛な叫びが聞えた気がした。私は風邪をひいた。

やあ、諸君。長門だ。もう風邪はすっかり治ったぞ。これで好物の親子丼をいっぱい食べられる。いつもの様に機嫌よく食堂へ向かっていたんだが…

「な、長門さん！おおおおはようございますー！」

「おはようございますしゅー！」

「ああ。おはよう。」

私の目の前でぶるぶると震えながら敬礼をしてる二人、駆逐艦の朝潮と大潮だ。この二人が何故だか立ち塞がり私の楽しみの邪魔をしている。あ、決して怒っているわけではない。恐らく二人は緊張しているのだろう。その証拠に私は敬礼を治しているのにいつまでも治していない。

「直って良いぞ?」

「は、はいー！」

「はいいーっ！」

この、やり取りを、すでに五回やった。ちよつと楽しくなつてしまった私の落ち度もある。しかし二人をいつまでもここに拘束しておくわけにはいかない。

「(どうしようか…力尽くでもいいが、私がやると入濠ドックヘルト固定される。)」

「…。」

「あわわわ…」

「(朝潮なんかはもう体が緊張で動かないのをわかっているのか血の気が引いて顔色が悪い。大潮に至ってはもう目を回している。いかな。こんなところを他の誰かに見られたら私が駆逐艦をいじめているように…)」

「あ、長門さん。」

「あ。」

なんとタイミングの悪い…よりもよつて提督か…顔色が悪い朝潮、目を回している大潮そこに変な格好(艦娘艦装束)した目付きの

鋭い大女がいたら間違ひなく通報待ったなしだ。提督の顔もわなわなと震えている。ああいかな。本当にいかな。

「あ…司令官…うう…」

「(なんで泣いた!?)」

「朝潮…!?長門さん!!!」

「…」

「長門さん！あなたがそんな人だとは思いませんでした！」

「(いかな…また変な方向に話が…)」

「彼女達の最近の遠征の成功率が悪くなっているのは彼女達だけが原因ではありません!!南方での深海棲艦が活発化していたり、気象の不安定さだったり！様々な偶然が重なったことです!!」

「(そうだったのか。最近は出撃艦に申告してないから全然知らなかった…)」

「それらの不確定要素を考慮せず、大型艦の補給が滞っているのは私の責任になる!!彼女達を責めるのは筋違いだ!!」

「(この提督、有能だがどうにも先走るアホの気がある。有能故に全て対処しているが立ち回りするこちらはたまったもんじゃない。)」

「…」

「長門さん！」

熱血な提督は一度こうなったらの止まらない。提督の中では完全に駆逐艦に八つ当たりをする戦艦の図が出来上がっているのか。いかな。というか私はそんなゲスに見えるのか。

「てい…」

「司令官…、違うんです！」

「あ、朝潮…?」

おや？

「あ、あの、長門さんは、具合が悪くなつた大潮を介抱しようとしてくれたんです…私も、パニックになつちやつて…」

「なに…?」

「えと…だから！決して長門さんは決してそんな八つ当たりとかする人じゃありません！」

なんだか朝潮の中では私は高評価なんだな。なんだかうるつときたぞ。しかし小さな駆逐艦にフオローされるビッグセブンは…いかな。

「す、すまない…長門さん…また早とちりを…」

「…気にしてない。」

「(めっちゃ落ち込んでる!)」

「提督、大潮を医務室に連れていく。最近の不調のこともあるのでドックを使う許可をもらいに行くかもしれない…」

「わ、わかった…すまん長門…」

「…気にしてないんだからな。」

「(めっちゃ気にしてる!!)」

私は戦いが全てのやつだと思われているのか。やはりもつとみんなとコミュニケーションを取らないと後々取り返しのつかないことになりそうだ。鳳翔にどうやったらみんなと仲良くなれるか聞いてみよう。

「朝潮、行こう。」

「あつ、はい!」

「長門さん、大潮を頼む。」

「…了解。」

「(やつちまったなあ)」

提督はもう別にいいや。本当に戦闘狂に思われてそうだし。知らん。もう提督なんて知らん。次の出撃は大型艦を狙うのは順番最後にしよう。それより朝潮と大潮だ。抱き上げたがすごく軽い。まるでマグカップ持つてるみたいだ。

「朝潮、すまなかったな。助かった。」

「いえ…長門さんは、いつも戦場で私達を庇ってくれますし。提督が言うような人には見えなくて…」

「…ありがとう。こんど親子丼をごちそうしよう。」

大潮は本当に私を見て目を回したらしい。医務室で目を覚ましてからすごく謝られた。確かに戦艦で体格は他の艦より大きいが…駆逐艦にそこまで怯えられているとは思わなかった。長門シヨック!

そのあと三人で食堂へ行き、親子丼を食べた。食べ初めてすぐ一航戦が現れたが一睨みで黙らせてやった。食べ終わる頃には朝潮と大潮はいつも見ていた笑顔になっていたので…少し仲良くなれたのかも
しれない

やあ諸君。長門だ。今日もみんなと仲良くなるため頑張るぞ。朝潮と大潮の件から二人とはよく食事を共にするようになった。周りからは鬼が猫を愛でているのを見るような視線で見られたがそんなものは関係無い。二人とも可愛らしいからな。

「な、長門さん！あの、これ。」

「どうした朝潮。これは。」

「ひ、日頃お世話になってるので、その、お礼です！」

夕げの前に私の部屋にやってきた朝潮の手にはピンクの袋に水色のリボンのついた女の子らしいプレゼント。いかな。鼻血が出そうだ。天使は鎮守府に有り。

「そんな気を使うことないぞ。我々は仲間だ。」

「で、でもその、長門さんとはおはなしすることも多くなって、それなのに助けてもらうことばかりだったのもっと仲良くなりたいなって。」

「ふむ。そうか。それならばありがたく受け取ろう。」

プレゼントを開けるとなかには桐箱。戦艦パワーで握り潰さないようにそつと開けると万年筆が入っていた。

「朝潮、こんな高そうな物を。」

「い、いえ！あの！これじゃなきゃ！これじゃなきゃダメなんです！」

「あ、ああ」

金の意匠がある万年筆。持った質感や材質、相当高級そうな物に見えるが艦娘に与えられる給料は、特に駆逐艦はそう多くないはずなのに。なんていい子なんだ朝潮。

「あの、物自体は私でも買えちゃうくらいのものですみません。」
「気にするな。こういうものは気持ちが大変なのだ。私は嬉しいぞ。」

「はい！あと、もう一つは。」

ん？。もじもじして。どうしたんだ？

「え、えへへ」

「！」

朝潮がポケットから出したのはプレゼントと同じ万年筆の銀の意匠が施されたものだった。対になるものなのだろう。

「お、お揃いですね！」

「!!」

気がついたら1日経って開けてベッドの上だった。横で看病してくれていた鳳翔に聞いたところ私が倒れたと朝潮が提督の部屋に飛び込んできたらしい。鳳翔が見に来たら血塗れの私がいて大層驚いたらしい。

「全く、長門さんは意外と弱点だらけなんですね。おつちよこちよいだったり子供に弱かったり。」

「鳳翔よしてくれ。」

「ふふ。お腹空いてませんか？親子丼作ってありますよ？」

「もらおう。」

ふと見たら輸血パックが打たれている。そんなに鼻血吹いたのか私は。朝潮にはカツコ悪いところを見せてしまったな。さて、早く晩御飯だ。

ふむ、しかし万年筆か。どうしたものだろうか。何か物書きをすることなど報告書以外には何もなかった。それに出撃申告していないから報告書も何もない。

「いかなんかこれではニートそのものだ。もらって使わぬというのも朝潮に申し訳ないし。」

考えながら廊下を歩くとひっ！と小さな悲鳴が聞こえてきた。何事かと振り向くと明石の道具屋。顔色を青くした明石がいた。

「あ、え、ぎげんよう長門さん。」

顔はひきつっている。人の顔見て怖がるなんて失礼な奴だ。まあそれはいい。

「明石。」

「はいっ!？」

「手帳は置いてあるか？」

「手帳、ですか？ちよつと待ってくださいね。」

ひらめいたんだ。何か物を書くというならば日記が定番だ。初めてのことなら定番から入るのがいいだろう。

「えつと・今あるのは軽巡や駆逐艦達ようの可愛らしいデザインのものなくて・長門さんがお気に召すような物は・」

「構わない。」

・明石が持ってきたものはピンクだったり水色だったり白だったり柄も入っっていていかにも子供向けなものが多い。うーん・

「これをもらおう。」

「え!？これ、ですか？」

ん？なんだ？これ可愛くないか？くじらのマークの水色の手帳。

明石め、私に似合わないなあとも思ってるな？それならちよつと困らせてやろう。

「やはり・私にはこんな可愛らしいのは似合わないか。」

「い、いえ!そんなこと、ないと思いますよ!？ほ、ほら長門さんも女の子ですしね!」

「しかし今、変な顔をしたぞ?」

「ふあつ!？そそそそんにやことありませんよ!!ほ、ほら!長門さんはあんまり道具屋にはいらつしやらないじゃないですか!」

「はあ・やつぱりこつちの黒一色のやつにするよ・はあー!」

「大丈夫!大丈夫ですよ!!ほ、ほら!えーつと・那智さん!那智さんもピンクの豚さんの可愛いの使ってるんですよ!だから長門さんも大丈夫!!」

なんだかすごいこと聞いちゃったぞ。それになにが大丈夫なのか。

「そうか！じゃあこれをもらおう！」

「ま、毎度ありー。」

ふふふふ、ちよつと遊びすぎた感じはあるが印象は変わってきたかな？おしゃべりな明石なら私の印象をどんだん言いふらしてくれるだろう。こうして私は親しみ安いキャラだと広まればもつとみんなと仲良くできるだろう。どれ、トドメだ。スキップして帰ってやろう。

「え、あ・あ、あれ長門さん・ほんとに・熱でもあるのかしら私・」

翌日、朝食の時、ひとつの夢であるみんなに囲まれて朝食を食べるというのを期待してドキドキしながら食堂に入ったら、皆がチュパカブラを見るような視線を投げて寄越して誰も近寄ってこなかった。居たたまれなくなったのか鳳翔と朝潮、大潮と一緒に食べてくれた。味噌汁がやけにしよっぱかった。

皆さんこんにちは。鳳翔でございます。私、非番の日はお洗濯、掃除、お食事等の大事なお仲間である艦娘のお手伝いをしております。本日もそのお手伝いをしている中、少し困ったことが起きてしまっています……

「えっぐ……えっぐ……」

「えーん！うええーん！」

「イタリアちゃん、ローマちゃんどうか泣き止んでくださいな……」
高速戦艦のイタリアちゃん、ローマちゃんのお二人がホームシック(?)にかかり、泣き出してしまいました。なんとか食堂にいた皆さんで宥めていますがどうにも泣き止んでくれません。

「イタリア！ローマ！そんな体たらくでは同盟国の日本に示しがつかないわ！しつかりなさい！」

「でも！でもおお！」

「ビスマルク……日本で第二次改装まで済ましたあなたにはこの苦痛がわからないでしょうね……！ひっぐ……ううええ……」

「ビスマルク御姉様の言う通りです！あまりに騒ぐと長門さんが場を納めに来ますよ!!」

「長門さん……!!」

「び、びっぐせぶん……」

む、親友の名前をそんな戒めに使われるとは心外です。しかし私はイタリア文化に精通してるわけでもありませんしイタリア料理もわかりません……この場をなんとかするには私では力不足です……
「へーい、イタリア？ローマ？寂しいのは二人だけじゃないデース。ビスマルク達も私も故郷が恋しいのは一緒デース……だから分かち合いまシヨウ？美味しい紅茶を淹れてあげるデース。」

ああ金剛さん……なんとという優しさ。慈愛に充ち溢れています。ただの紅茶ジャンキーかと思いましたがそんなことありませんでしたね。

「だ、だから長門が来る前に泣き止むです。長門が来たらきつと大

戦艦パンチで泣くこともできなくなりマス。長門のパンチはやばいデス。一回のパンチで三体の夕級を粉碎しマス。究極のカラテデス。」

「ひゃああく……ローマあ！」

「うぐ……うえええん……まだ死にたくない……」

前言撤回。金剛さんもなんとかできません。長門さんの手を煩わせるわけにも行きません。彼女はやつと戦線から離れ、平和を謳歌しているのです。その邪魔はさせません。

「こちらです。」

「……事情を説明しろ。」

……ああんてこと。

やあ諸君。長門だ。今日もみんなと仲良くなるために走り回るぞ。

今日はなんと大潮の誘いで駆逐艦のちびっこたちと鬼ごっこだ。まてー。いや、待って。お願い待って。追い付けない。戦艦じゃ。無理。低速。私低速だから。待って。マジ待って。捕まえさせて。

「長門さんおつそーい！」

「はあはあはあ……低速戦艦じゃ……無理……」

「長門さん！これ！お水です！」

「あ、ありがとう……」

鬼ごっこに集まったのは朝潮、大潮、島風、不知火、雷、電、暁、響だ。皆大潮が私を連れてきた時は硬直したが遊び始めたら態度も治ってきた。なんだ。仲良くなるなんて簡単じゃないか。

「まさか長門さんが一緒に遊んでくれるとは思いませんでした。」

「ふう……私はみんなが思ってるほど堅物ではないんだがな。」

「ええ。不知火もそう思います。」

「な、長門さん！」

「ん、どうした電。」

「あの・・・肩車、してほしいのです。」

「!・・・ああ、いいぞー！」

このように駆逐艦と戯れるのは実際楽しい。生前(?)ながもん等のロリコン長門をよくみたがあなるのも領ける。いかなまったく。平和だ。なんと平和なんだ。あの戦争があつた世界とは思えない。

「長門さああああん！」

・・・平和は無くなった。あの大声で私を呼ぶのは大淀だ。ああやつて呼ぶ時はだいたい面倒事がある時だ忌々しい。

「な、長門さん・・・」

「・・・なんだ？」

「ひい!?そんな睨まないでくださいよう・・・」

「今私は、平和を謳歌している。」

「えつと・・・すみません・・・」

「・・・それで、何の用だ。」

「はい。食堂で・・・何やら戦艦達が騒ぎを起こしています。」

「はあー・・・すまないお前達。少し行ってくる。戻ったら間宮でおやつにしよう。」

「はいなのです。」

「レディーを待たせるのは得策じゃないわよ？」

「すまんな暁。」

「おやつは、アイスがいいな。」

「わかった。響の願いはしかと聞き入れたぞ。」

しぶしぶと立ち上がって大淀を一睨みしておく。もう震え上がっているので面白かったコレで大淀は許してやろう。

「・・・私は、事情を説明しろ。と言ったが？」

「へ、ヘーイ！長門！とりあえずは座りましょー？まずは落ち着くのがベストだと思いきマースー！」

「私は可及的速やかにこの事案を解決したいんだが？」

「ソ、ソーリー」

「イタリア、ローマ泣いているがいったい何があった？ビス子がまた何か余計な事をしたのか？」

「ちよ、なんで私が何かした前提なのよ！」

「ビスマルクお姉様、日頃の行いかと・・・」

「プリンツ・・・！」

「・・・とりあえずみんな座れ。」

「(さつきなんで座らせてくれなかったデース・・・)」

ふむ。イタリア、ローマが泣いていてビス子とプリンツが慌てて金剛が疲労しているというところか。まったくわからないな。

「鳳翔。」

「はい。」

「いったい何があった。」

「こういうときは鳳翔に聞くのが一番だ。」

「イタリアちゃんとローマちゃんがどうやらホームシックにかかったみたいで・・・イタリア料理が食べたいと言って泣き出してしまったんです。ビスマルクさん達や金剛さんは偶々居合わせて・・・」

「ホームシックって・・・彼女達はここで建造されたはずだが？」

「ほら、海外の船の艦娘ですし、どこで建造されたかはあんまり関係ないんじゃないかしら？」

ちらりとイタリアとローマを見ると顔を青くして二人で抱き合い何やら祈りを捧げている。・・・そんなに故郷が恋しいのか。

「イタリア、ローマ・・・」

「びいー！」

「死にたくない・・・！」

・・・死に直結するようなことか？

「私に任せ「私を頼っていいのよ!!!」

んほお!!びつくりした!!雷!!どうしてここにいるんだ!?

「長門さんの背中にずーっとくつついてたわ!」

「へ、へイ雷ガール? いったいどうするんデース?」

「簡単よ! イタリアのご飯を食べましょう!」

「しかしイタリア料理なんて誰も出来ないぞ?」

「別に、なんでもかんでも自分たちで作る必要はないじゃない。私達が料理が出来る鳳翔さんにご飯を作ってもらってるみたいにするばいいのよ!」

「Ich sehe! つまり外食するのね! 雷!」

「そうよ! ビスマルクさんもみんなで行くわ! イタリア料理を食べに行くわ!!!」

「長門・・・いいわよね? 折檻して終了なんて今更言わないわよね? ね?」

「・・・そうだな。なら大潮達も呼んでこないとな。」

「イタリア! ローマ! 首は繋がったわ!」

「やったわローマ・・・!」

「生きた心地がしなかった・・・!」

なんだか知らんが外食で大丈夫らしい。あんなに安心仕切った顔をするなんてよつぽど食べたかったのか・・・

「それなら提督にも外出の許可をもらいにいかないといけませんねえ・・・急に大丈夫かしら。」

「なあに鳳翔、いざとなったら私がこの手で・・・」

「まあ・・・あんまり提督に乱暴してはダメですよ」

なんやかんやで外食に行くことに決まった。雷はいつの間にか高速戦艦達に胴上げされながら感謝されている・・・そういえばこちらの世界で外食するのは初めてだ。ちよつぴり楽しみにもなってきたぞ。

やあ諸君。長門だ。今日は艦隊のみんなと外食に出る。提督に外出許可をもらいに行つたときいくらなんでも当日は・・・等という空気の読めない事をぬかしたので右手を挙げたら二つ返事で全員分書いてくれた。提督というのは器がでかくないとな。

「ほ、ほんとにいいの・・・？その・・・長門・・・？」

「わーい！長門さんありがとうございます！」

「ああ、好きなものを食べる。」

そして雷の言うイタリア料理の食べられる場所というのは・・・白とエメラルドグリーンの装いが可愛いガルデーニアというファミレスだった。・・・なんか聞き覚えがあるんだよな。何故だろうか、というかこの世界にファミレスなんてものがあつたのだな。もつとこの世界について目を向けないといかん。戦い以外を知らなすぎる。

「長門さん・・・不知火達も呼んでいただきありがとうございます。」
「気にするな。おやつを用意すると約束したからな。」

「長門さん！ごちそうしていただきありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

「朝潮達も遠慮無く食べる。お金は心配しなくていい。全部私の奢りだ。」

「あーっ！暁！それは私のピザ！」

「い、一枚くらいいいじゃない！」

「はわわ島風ちゃんもお姉ちゃんも喧嘩しちやダメなのです。」

「うん・・・このチョコアイス・・・力を感じる・・・」

「喧嘩するくらいならまた新しく頼めばいい。響も、アイスおかわりするか？」

「へーい！ドリンクバーおまちどおさまネー！」

「長門・・・いくらやすいからってこの人数で好きなだけ食べたなら結構な額よ？大丈夫なの？」

「この長門を舐めてもらつては困る。お財布もビッグセブんだ。」

「わあー長門さんのお財布可愛いですね。」

「わかるかプリンツ。」

ファミレスの一角がわいわいと賑わう。これだ、みんなでご飯。こういうのがしたかったんだ。両隣には電と雷、膝には島風と響、向かいに暁、周りに朝潮、大潮、不知火。ここが天国か。

「うふふ・・・長門さん、良かったですね。」

「鳳翔・・・いや、これも雷の名案のおかげだ。」

「ふふーん！もーつと頼っていいのよ！」

「これからはそうすることにしよう。」

隣の雷を撫でたらどや顔した。なんて可愛らしいんだ。

「長門・・・チョコアイスをおかわりしたい。」

「わかった。金剛、すまないがベルをおしてくれ。」

「オツケー！長門の他に何か頼む人はいますかー？」

「金剛、私とプリンツにチョリソーとビールを頼むわ。」

「へーい・・・昼間からアルコールデースカー？」

「な、いいじゃない！」

「構わない。」

「金剛！わたしとローマにキャベツのペペロンチーノとマルゲリータピザを頼むわー！」

「えつと・・・不知火にムール貝のオイル焼きを・・・」

「おうっ！はーい島風！辛味チキン！」

「駆逐艦の皆さんは晩ご飯が食べられなくなるまで食べてはいけませんよ。」

「「「はーい」」」」

ああ・・・平和だ・・・あの戦争がまるで嘘のような気分になってくる・・・塩と血と肉が焼ける臭いが充満する戦場がほんとに・・・遠い過去のような・・・長門になる前もこうして友人とファミレスで団欒するようなことがあったのだろうか。今となっては友人がいたのかすらわからないが・・・この感覚を懐かしい、楽しいと思うならきっと良い友人に囲まれていたんだろう。なんだか薄ほんやりと思いきい出せそうな気がする。こんな感じのテーブルで、友人と、騒ぎなが

ら・・・ドリンクバーを取りに行つて・・・ポテトをかじりながら夢を語つた・・・そんな風景が・・・思い、出せそう、な・・・

「・・・と・・・がと・・・」

「・・・ん」

「長門！」

「ッ!?!・・・どうした!?!」

ちよつとぼんやりしてしまった。気がついて周りを見渡すと全員が私を見つめている。何か、こう、驚いているみたいだが、そんなに見つめられると照れる。

「長門・・・どうしたの?大丈夫?」

「ビス子・・・なんだそんな驚いた顔して、エスカルゴでも食べたか?」

「違うわよ!長門、貴方具合でも悪いの?」

「いや、そんなことないが・・・」

「じゃあ、どうして泣いてるの?」

泣いて・・・?ふと手を顔にやると暖かいものを感じた、以外と洒落にならないくらい涙を流していて私も驚いてしまった。

「あ、あああ、あの・・・やっぱり、迷惑だった・・・かしら・・・」

「ご、ごめんなさい長門さん・・・私達わがまま言っちゃつて・・・」

顔を青くしてイタリアはうつむいてしまい、申し訳なさそうにローマが謝罪した・・・いかな。これはいかな。せつかく楽しい食事なのにそれを求めた私が壊してしまつては・・・

「・・・なに、迷惑だなんて思っていない。ただ、平和だな・・・と思つてな。」

「長門さん・・・」

「平和・・・そうね長門、貴方戦い過ぎたのよ。平和を謳歌したつて全然許されるわ。そうでなければ戦つた意味がわからないわよね。」

「す、すまんなせつかくの楽しい食事を台無しにしてしまつて。ほら金剛、注文はしてくれたのか?プリンツもビールを早く飲まないとぬるくなつてしまうぞ。イタリアとローマもそんな顔をするな。故郷の味はそんな涙の味はしないだろう?鳳翔、すまないが私にアイスティーを持つて来てくれないか?」

「・・・はい、わかりました！」

「ありがとう、ビス子。」

「いいのよ。私も連合艦隊組んで鳳翔と一緒にあなたと戦った親友じゃない。」

ああ・・・嘘をついてしまった。鳳翔もビス子も自分は私の親友だと言ってくれている者などほとんど現れないと思っていた・・・だからこそ私が転生者などという奇々怪々な存在だと言うのが申し訳なくなる。

「ふふ・・・みんな、本当にありがとう。」

こうして私達はガルデーニアで夕方まで食べて鎮守府に帰ってからも鳳翔のご飯を同じ面子でたらふく食べた。その時駆逐艦の子供達がファミレスでいっぱい遊んできたと言ったのが聞こえたらしく一航戦の二人が泣きながら私にすがりついてきた。お前ら一航戦の誇りはどうした。しかし楽しい一日だった。出撃申請をしてドックと格納庫で一日を過ごす以前の日々とは大違いだ。こうしてみんなと仲良くなると決めてそこそこ経つが仲良くなれてきただろうか。いちやいちやできているだろうか。そんなことをぼんやりと考えながら自室の扉を開けた。

「さて、今日も楽しかった。明日は空母と重巡のみんなと飲みにも行くか。」

そうだ。お酒を飲む、というのは長門になってから試してなかったのだ。はたしてお酒は強いのか弱いのか・・・ともかくどういった誘い方をしようk

「姉さん!!」

「ほああっ!?!なんだ!?!だれだ!?!・・・陸奥!?!」

「これを見て姉さん!」

「・・・?」

陸奥は姉妹艦、私の妹だ。その、この陸奥とはあまり仲良く出来ている感じはしない。何故なら私が戦いに傾倒しすぎて構ってやれず寂しい思いをさせてしまったからだ・・・その結果。

「練度150認定書と、通算撃破艦4000隻突破勲章・・・か?」

「そうよ！これで姉さんも受けてくれるでしょう!? 私との単艦演習!!!」

私以上のバトルジャンキーになった。強くなれば、私に並べる、目を向けてもらえるところで強くなりつづけているらしい。つい先日私のマネをしてル級を殴りつけて腕を粉碎骨折して帰ってきたのを覚えてる。

「どうなの!?受けてくれるの!?!」

「ま、待て陸奥・・・」

すこしクレイジーになりすぎて・・・もうなんて接したらいいかわからないんだ。

「ケツコンカツコカリもして練度150!!これで姉さんに負けない!!!提督にはもう演習場を抑えてもらってる!あとは姉さんが受けるといえればそれでいいのよ!?!」

「陸奥、落ち着け!もう夜だから!騒ぐとうるさいやつ集まってくるから!」

「姉さん!これではつきりさせる!絶対に、絶対に私の方が強いんだから!!!」

・・・私のしってる陸奥はエロいお姉さんの陸奥で、こんな鬼のような女ではない。誰か助けて。

やあ・・・諸君・・・長門だ。昨晚陸奥が私の部屋に押し寄せてきて、帰ってもらうまで大分苦労した。夜戦忍者と二水戦の強い人、オマケに四水戦のヤバイ人まで来て大変だった。

「なるほどねえ・・・それで陸奥さんが演習場を一人で押さえたんだね。」

「そうよ。さあ姉さん、一晩待ったんだから答えを聞かせてくれる?」
「はあ・・・」

正直陸奥は異常だ。こんなになってしまったのも私に責任があるのだが・・・考えてみてほしい。当時、深海棲艦の太平洋大侵攻があったあの頃は姉妹で仲良しなどしてる場合では無かったのだ。それこそ鎮守府にいても一時間生き延びたら万歳出来る程攻められていたのだ。一隻建造してる間に連合艦隊が失われるなんてことが何度あったかわからない。それはそれは戦闘一辺倒にもなって愉快的な話もするなど出来なかつたのだ。

「長門さん、私からもお願いです。陸奥さんは努力を惜しまず練度を上げてきました。それもこれも貴方の為ですよ?どうか一戦だけでもやってもらえませんか?」

「むう・・・」

・・・やりたくない。だがこのままだと陸奥は無謀な事に手を出し始めるだろう。交友が無かったとはいえ可愛い妹だ。取り返しのつかない状況になってからでは遅い。しかし・・・

「陸奥、提督。正直私はこの申し出を受けたくない。」

「なっ・・・!」

「そうか・・・」

「考えてもみてくれ、ケツコンカツコカリも済ませた練度最高の戦艦とかたやケツコンカツコカリもしていない旧査定練度の、しかも戦闘から退いてしばらく経つ過去の戦艦。演習なんてしなくてもどちらが強いかなど一目瞭然じゃないか?」

私は、こう、仲良くなる方法など一緒にご飯を食べるくらいしか知

らない。ならばそれで私は攻めようと思う。戦闘とは相手を如何に自分に優位な状況に持ち込むかが肝だ。

「だからな陸奥、それよりも食堂でごっ」

「ふぎけないで!!」

「おうっ!」

「そんなの絶対認めないわ!!姉さんは太平洋の英雄でしょ!!絶対的な強者でなければいけないのになんなのそれは!」

「ま、待て陸奥、お前は私より強くなりたいのか私に強くあつて欲しいのかどつちなんだ・・・?」

「出撃申請もしないで鎮守府でだらだと遊んでばかり・・・不拔けた姉さんのままなら私があ頃の姉さんに戻してあげるわ!!」

わなわなと震え、陸奥は 右手を構えて 渾身の一発を 放とうと している !▼

待て待て待て私でも戦艦のパンチなんか食らったらすごい痛いしなにより上官の前でそんな暴力沙汰なんて独房じゃすまないっぐわああああああああ

「らあっ!!」

「ぐわああああああっ!」

「ああっ!?!長門さんが女性があげるべきではない悲鳴で転がった!」

「はあっ・・・はあっ・・・どう!?!これでも私の演習受ける気にならない!?!妹に吹き飛ばされて悔しくないの!」

「うぐ・・・ああ・・・だ、大丈夫さ、すまないな陸奥。少し頭が冷えた。やはり演習は受けない。私とお前に必要なのは、対話だよ。演習で殴り合うんじゃない。それに妹に殴られるんだったらいいさ。必要ならいくらでも殴れば良い。もつと穏やかに平和に話をしよう。」

「くっ・・・くっそおおお!!」

「陸奥!くそなんて言葉使うんじゃないやんぐわあああああああ!」

ぐっはああああ痛いいいいいむっちゃん流石!鍛えてるだけありますね!二代目大戦艦パンチを襲名していいですよ!!脳みそがゆさぶられて星が飛んでるよやばい。

「な、長門さあん!?!はっ!む、陸奥さんダメです!暴力はダメです!」

「離して提督！このふぬけ姉はわたしが更正してやるんだから!!!」

「アドミラル!!何ごと長門!？」

「提督ご無事ですか!？」

「ああ、ビスマルクに鳳翔さん・・・陸奥さんを止めてください!」

「わ、わかったわ!陸奥!少しお痛が過ぎるわよ!!ふんっ!」

「きかないわよ!」

立ち上がったなら陸奥とビス子が史上空前限界バトルだ!ってビス子がカウンターを喰らって・・・!?

「あああっ!？」

「きゃあっ!？」

「ビスマルク!?鳳翔さん!!」

ビス子と鳳翔がくんずほずれっ・・・ってそんな場合じゃないぞ大変だ!

「ふんっ!口ほどにもないわね。」

「ほ、鳳翔・・・?!大丈夫か!？」

「いたた・・・ええ、すみませんちよつとすりむいただけです。」

鳳翔:すりむいただけって結構な怪我だぞ!?!ああ、痣から血が・・・!

「ちよつと長門!私の心配はしないのって鳳翔!?!大変!?!」

「ビス子は頑丈だろ!?!それより鳳翔を医務室へ運ぶんだ!ビス子頼む!」

「わかったわ!!動かないでね鳳翔!」

「え、ちよ・・・抱っこなんて・・・はわわ!？」

「・・・ちっ、また姉さんは・・・」

「陸奥さん!やりすぎです!!独房で頭を・・・」

「待て提督。なあ陸奥・・・」

「なに、姉さん?」

陸奥・・・演習場、行こうぜ・・・久々にキレちまったよ・・・

「今のが、お前の手に入れた強さか?」

「ええ?そうね。もう高速戦艦程度の攻撃じゃびくともしないわ。どう?以前の私より大分強くなったと思わない?」

「さあな。確かに努力して得るものはあったように見える。だがそれは強さなんかじゃあないな。」

「へえ・・・」

「お前の演習、相手になってやろう。」

「あら？あらあら、急にどういう心変わりをしたのかしら。さつきまで乗り気じゃなかったのに。」

「姉妹だからな。姉の強さが欲しいならくれてやろうと思つてな。」

「な、長門さん！陸奥さんは・・・」

「提督、演習場を空けてくれ。あと私と陸奥の艦装に補給を。実弾で頼む。」

「なっ!!何を考えているんですか!?!そんなの許可できませんよ!」

「すまない、提督。これはこの長門の切実な願いだ。」

「・・・っ!」

やはり戦闘一辺倒でも出来ることがあつたかもしれないな。戦い方を教えてやるとか戦術指南とか出来ることはいくらでもあつたな。やはり私の怠慢が招いた結果か。・・・妹との仲が良くなってなにか皆と仲良くだ。笑われてしまうな。

「・・・危険だと判断したら止めますよ。」

「すまない。」

「ふふ・・・やつとね。良い勝負にしましょう姉さん。」

「ああ。」

・・・鳳翔があの子だと。昼食と夕食の親子丼は無理だな。覚悟しろよ陸奥、食い物の恨みは怖いぞ。お前もあの戦争でそれは充分知っているだろう？

やあ諸君、長門だ。久しぶりにキレちゃったよ。むっちゃんも仲良くなる（物理）んだ。

おかしいなあ・・・砲弾使っていちやいやするはずではなかったんだが・・・まあいい。

とにかくまずは陸奥の要望、私より強くなりたいたいというのをどうするかだな。正直叩きのめしても円満に解決するとは思ってないし。根本的な解決になるとも思えない。ちよつと強引だが戦いという信念をぶつかり合う場に出ていくしかなかった。でもなければ心優しい筈の陸奥があのような暴力的になるわけない・・・それだけ追い詰めてしまったのか、私は。そんなに悩んでいるなんて・・・まあ会話などなかったわけだからわかるわけがないな。そこでだ。私はひとつ策を考えてこの演習に応じた。

「ふふっ・・・さあ姉さん。はじめましょう?」

「いいだろう。」

それにしても・・・こええ!!!なんだあれ笑ってるけど笑ってないぞ! 深海棲艦よりこわい!!! どんどん至近弾が増えていく。やべえ今私の艦装にかすった。

「・・・。」

「くっ・・・さすがに動きながらは当たらないわね。」

実弾にしたのは策の為に一応意味はある。死なないギリギリでやるつもりだけど。

「姉さん? いつまでそこで睨んでるつもり? やる気があるわけ?」

「問題無い。そのまま続ける陸奥。」

「舐めてくれちゃって・・・私だって長門型よ!!!」

そうさつきから私は腕を組んで陸奥を睨んだまま動いていない。いや動いていない。予想以上に陸奥がこわかったから。いやホントは避けるくらいは動くつもりだった。だけでもう足がぐくぐくしてゐるんだ。アイアンボトムサウンドで一人取り残された時よりこわい。

「全砲門開け!!」

「……。」

「撃てえー!!」

爆音と共に鋼の砲身から鋼鉄の塊が吐き出されたのが見えた。艦娘の実弾は念の力の塊だ。深海棲艦も同じ、それがプラスの念かマイナスの念かというだけ……。これを直で受ければ陸奥の気持ちが多量なりともわかるのではないか……。そういう策なんだけどこれって超痛いよね。

「……。」

放たれた砲弾は見事私の周りに着弾。艦装にダメージを蓄積させていく……。微損といったところか。にしてもそろそろ当たらないもんか。流石に肝が冷える！一発でもあたってしまったえば感動のシーンに持って行く自身はあるのに!!ここは姉としてハツパかけるしかないのか……!

「当たらない……。!?どうして……。!?」

「陸奥。」

「な、なに？姉さん。」

「いつまで遊んでいるつもりだ？」

「なっ……。!」

『長門さん！不必要に煽ることはやめてください！これは実弾演習なんですよ!?!轟沈もあり得るんです!』

「陸奥、提督は無視しろ。」

「ね、姉さんも言うようになったじゃない。」

『な、長門さん!?!くっ……。金剛さん出撃して長門さんの周りに……。!?!』

うるさいな……。悪いが提督には黙っていてもらおう。

「ね、姉さん……。!?!無線を……。!」

「これで、ここで何が起きても誰も知る由も無い。思いの丈をぶつけてこい。陸奥。」

「……。どういうつもりか知らないけど、後悔してもしらないわよ?」
「……。これで命中率はあがってくれるかな?にしても、ギラついた目だなあ……。まるで餓えた獣……。私が欲しくてたまらないという

目だ。それでいて乳を求め赤ん坊のような渴きを満たさんとする目だ。なんだか目を見るだけでもうわかったような気がする。

「喰らいなさい！」斉射、撃てエー!!」

陸奥は主砲を放ちながらこっちに近づいて来ている。うーん大体陸奥の気持ちはわかった．．．あとは．．．そのひん曲がつた強さを姉として直してやるだけだ

「．．．!!!」

「やったわ!!!」

一発の砲弾が私の胸を撃つ．．．ふむ．．．予想通り陸奥のいままで寂しい気持ちと今こうして私と戦える嬉しい気持ちに溢れているな。

「うぐ．．．」

「まだ、膝を突きもしないのね．．．なら．．．!」

「っ!?!．．．ぐはっ．．．んぐうッ!?!．．．ぐわああ!!」

爆音が連続で響いて何度も何度も．．．やめ．．．やばいってこれはさすがにやばい。沈む。すごい近距離だから。やばい。艤装が吹き飛んだ．．．!?!あああああ待つて陸奥!お姉ちゃんはフラフラです!タイム!タイム!!タイムウウウウ!!!

「はあ．．．はあ．．．うそ．．．」

「うぐ．．．はあ．．．はあ．．．満足．．．か．．．!?!」

「くっ．．．照準．．．って弾薬が．．．!?!」

「どうした．．．陸奥．．．これが実戦なら．．．お前はこれから死ぬぞ．．．?」

「な、んのおおお!!」

陸奥が一気に肉薄して近づいてきて．．．あああれですかそうですね弾がなくなったらそうすればいいですね。私のマネしてたつきいてますしおすし。

「くら．．．」

「大戦艦パンチ!!!」

「ぶへっ!?!」

「ここはいつぱつクロスカウンターというところと思ったら私の方が出

が速かった。右頬に私の大戦艦パワーを受けた陸奥は砲塔を爆発させながら大きく吹っ飛んでいって・・・

「へーい！長門ーっ!?無事でsへぶううううっ!?」

「ひええええっ!?おねえさまーっ!?」

様子を見に来た金剛達に衝突した。哀れ金剛・・・お前の分の紅茶は飲んで置いてやる。

「そ、そんな・・・練度も・・・上げた私が・・・一撃なんて・・・」

「陸奥・・・教えてやる・・・お前が強さだとおもっているものが何なのか・・・」

「姉さん・・・」

金剛を下敷きにした陸奥というのは何とも不思議な絵面だが・・・どうにか感動のシーンに持って行けそうだ。陸奥も良い具合に落ちて着いているし・・・

「何が・・・何が悪かったの・・・?私は姉さんと仲良くしたかっただけなのに・・・強くなるだけじゃ姉さんの隣に立てないの・・・?」

「陸奥・・・聞け。」

「いや・・・いやよ・・・姉さん・・・また遠くにいってしまうの・・・?行かないで、行かないで姉さん、私を一人にしないで、私も連れてってよお・・・!」

「話を聞かんかあーっ!!!」

大戦艦パンチテイクツーです。話を聞かない子にはげんこつでオシオキです。すごいなげんこつで10メートルぐらい水柱があがったぞ・・・ん?

「ひえええええーっ!?おねえさまが沈みましたーっ!?」

「ま、まずい!陸奥!引っ張り上げるの手伝え!早く!」

「いったあーい・・・え、な、なに?」

「金剛が巻き添えくらって沈没した!早く!曳航用意!いそげーっ!!!」

「で？言い訳を聞いてあげようか？」

「大変申し訳ありませんでした。」

大破した陸奥と中破した私、そして比叡の三人で座礁した金剛を曳航し、ドックに戻ると顔を真っ赤にした提督が待ち構えていた。すぐさま執務室へ連行させられて立たせられた。入渠させてくださいあ。

「実弾演習という危険が伴う演習で本部と連絡を取る無線機が破損した時点で中止にするべきでした。で？なんですかこの妖精さんの報告書は？長門さんは？危険な実弾演習で？陸奥さんの砲弾を避けるもせずタダ立ち尽くして受け続けたと？」

「その通りです。」

「やめてくださいいよ!!41センチ砲被弾28発って!?!なんの冗談ですか!!!!心臓に悪いですよホント!!なのになんで中破で済んでるんですか!?!ほんとと規格外ですね長門さんは!!!!それよりほとんど被弾してないのに陸奥さんは何があつたの!?!」

「姉さんに二回殴られて金剛さんに衝突しました。」

「二回も殴られたのかなりしょうがないね。よく轟沈しなかったね。」

「ちよつと待て。」

私の扱いはなんだこれは。

「旧査定とは言え練度99だぞ。戦艦も大破くらいする!」

「知ってるかい長門さん。99以降の新査定練度審査の方がきつっつのさ。」

「・・・。」

「まあそんなことよりだね。」

提督は私、陸奥と視線を移して・・・なんだ？半裸の私達を眺めたかったならそう言えば良いのに。おつと何を察した、止めるな陸奥。「これだけ大暴れしたんだから、解決したんだろうね？長門さん？」
「・・・いや、これから王手をかけるのさ。だから入渠させてくれ。」
「・・・わかりました。もう、長門型に喧嘩はおこしてもらいたくありませんからね・・・でも、もう解決したと思いましたが？」

「？」

ちらと陸奥を見たら顔を赤くして目をそらした・・・なんだその反応、姉妹でする反応じゃないぞ。待て、コラ、提督、お前まさかそういう趣味か。

「高速修復材はいりませんか？目のやり場に困るのでいつてきてください。」

「・・・わかった。」

浴場に入ったらカポーンという音が響く・・・この音はいつたいなんだろうな。まあまずは体を洗って・・・なんだりかんだり・・・

「あの・・・姉さん？背中流すわ。」

「お、すまないな。大破しているのに。」

「今回大破したのは艦装だけよ。顔を殴られたのに痣もないのよ？どういう技なのかしら。」

「ふつうに・・・陸奥の顔を傷つけたくなかったから・・・力が他所に流れるように分散させたただけが・・・」

「・・・なにそれ・・・あーあつ！やっぱり姉さんにはなににしても敵わないのねっ！」

「それは当然だろう。姉より優秀な妹がいてたまるか。」

一回は言ってみたい台詞言えましたー！満足満足。それより自分で力を分散とか言ったけどまじでいみわかんないな。なんだよパンチの力を分散って。漫画じゃないんだぞ。いや艦これの世界は二次元だけど私にとってここは三次元でリアルで・・・ああもうややこしいな。

「ん、陸奥、もっと強くしていいぞ。」

「ダメよ！姉さん背中も胸も痣だらけなのよ!?!強くやったら悪化しちゃうじゃない！」

「ん？ああ本当だ。」

「ほんと・・・規格外ね、姉さんは。」

「・・・みんなを守る為に戦ってたら、いつのまにか、な。」

「そうだ。このわけのわからないタフさもあの戦争を乗り切って身に付いた物だからどうしたって今から教えようなんてのも無理だ。」

「・・・姉さんが言ってた私が強さだと思ってる物さ・・・それってただの暴力、だったね・・・姉さんに構ってもらえなくて寂しくて力尽くで見てもらおうとするための暴力・・・」

「・・・そうだな。」

「・・・いまさらだけど、私は姉さんと仲良くしたいわ。前みたいに見える向きもされないのはイヤ。私、ずーっとこんなだったからひとりぼっちになっちゃった・・・」

「・・・私も一緒さ。戦って戦って、また戦っているうちにひとりぼっちだった。だがな？意外なところに友人だと言ってくれるやつがいるさ。」

「・・・私にもいるかな？」

「ああ、きつとな。」

「・・・うん。」

「どうやらまだもやもやしているようだが・・・そのもやもやがなくなるのも時間の問題のようだ。うんうんまさか艦娘でも姉妹で大きく似るなんて思わなかったな。陸奥も私とどっこいの不器用なようだ。」

「・・・それにな陸奥。新しい友人も作るのも大切だ。」

「・・・そんな、どうしたら・・・」

「簡単だ。」

「そう簡単なのだ。教えてもらったものだが実戦したら簡単に友人になれた。」

「一緒にご飯を食べよう。」

「さて二人の処罰がきまりました。」

「・・・むう」

「しよ、処罰・・・」

「はい。実弾演習という危険な演習で無線を切り、長門型という強力な戦艦二人が私闘をしたこと・・・特に英雄とまで言われている長門さんは反逆罪に問われてもおかしくありません。」

「は、反逆罪!?ちよつと待つて!演習を挑んだのは私よ!」

「ですが事実は事実です、金剛さんも大破してここ横須賀だけではなく周辺地域まで危険に晒したんですよ。わかっていますか?」

「・・・。」

「そ、それなら提督も許可したじゃない!」

「・・・申し訳ないのですが、本営の判断では私を騙した、という結果になっています。」

「そんな・・・」

「ですが、まあ上もすごい戦績を残している二人を手放したくないんでしょう。私もなんとか二人が軍法会議に掛けられるようなことにはならないように回避しました。それでも英雄を率いた提督です。」

「・・・。」

「そ、それで私達はどうなるの・・・?」

「・・・二人が一緒の鎮守府にいることは危険と判断されました。」

「・・・!」

「そんな・・・」

「陸奥さんには残ってもらいますが、長門さんは大湊に行ってもらいます・・・自業自得とはいえ事情は察します。このような結果になってしまうとは・・・力量不足を感じます。すみません・・・」

「いや、提督のせいではない。我々の落ち度だ。解体されなかつただけでした。」

「うぐ・・・!」

~~~~~

「・・・というわけになった。」

「そんな・・・！」

「くっ・・・アドミラルはなにをしているの・・・！」

「長門さん・・・」

深夜の食堂でビス子、鳳翔、朝潮に集まってもらい提督からの処罰の内容を話した。三人は驚愕を隠しきれず、ビス子はグラスを握りつぶし、鳳翔にひっぱたかれている。いたそう

「そこでお前達に頼みがある。」

「・・・わかりました。なんでもいつてくださいね長門さん。」

「朝潮も！尽力致します！」

「まっかせなさい！」

「ありがとうございます・・・頼みというのは陸奥のことだ。」

「陸奥さん・・・ですか？」

陸奥はここにきてからうつむいたまんまだった名前を呼ばれてびっくりしてる。演習の時とは大違いだな。

「ああ、そうだ。陸奥は私に似てあまりコミュニケーションは得意ではない。それをお前達に助けて欲しい・・・」

「ね、姉さん・・・！せつかくこれから変われると思ったのに・・・離ればなれなのに・・・」

「陸奥・・・これが生涯の別れというわけではない・・・」

「姉さん・・・」

「長門さん・・・」

「いいなあ・・・」

「良い姉妹愛ね長門・・・！」

「それに長門型なら力尽くで会いに来られるぞ。私達が組めば敵はない。」

「それは冗談抜きでやめてくださいね？」



諸君、長門だ。というわけで大湊警備府に所属することになった。せつかく陸奥と仲良くなれるかと思ったが・・・まあ実弾を持って本部の監視から抜けければどうなるかなんて明白だな・・・落ち着いた様子だったのが心配だ・・・まあビス子と鳳翔、朝潮に頼んだから平気だろう。だがコミュ症の私があたらしい鎮守府でやっていけるか・・・いかな。こんな弱気では長門の名が廃る。気合いを入れていこう。そしてむつ市にはついたんだが・・・警備府はどこだ。  
「すみませーん！」

「む・・・君は大湊の大淀か。」

「はい！お迎えにあがりました！太平洋の英雄さん？」

「長門でいい。」

「あら、そうですか？英雄さんに失礼がないようにと思ったんですけど・・・あ、お荷物お持ちしますよ。」

「ああ、すまない。」

ふむ・・・大湊の大淀は横須賀のうちの大淀とくらべて明るくてどこか少女臭がする。・・・なんだよ少女臭って。ちなみに横須賀の大淀はくたびれたOシミみたいだった。同じ艦娘でも根本的な性格は変わらずとも個体差で大きな差が出る。例えば同性愛に目覚める大井もいれば菩薩のような大井もいるのだ。

「うちではまだ戦艦が一人もいないので苦労をおかけするとは思いますが・・・」

「いや、大湊はそれを補うほど水雷戦隊の練度がたかいじゃないか。連合艦隊で一緒になった天龍から聞いたぞ。」

「うちの天龍さんが・・・あ、ここです。」

「すまんな。」

「天龍さん、よく連合艦隊に参加したって言ってたのでまかせじゃなかったんですね。」

「なんだ、知らなかったのか？」

「はい、私は最近建造されましたので。」

少女臭の原因はこれか。若々しいのではなく、本当に若かったんだ

な。それと比べると大侵攻時に建造された私はおばあちゃんくらいになるのか・・・？ぐぬぬなんだか悔しくなってきたぞ。

「ぴいつ!? な、長門さん・・・何かお気に召さないことがあったでしょうか・・・？」

「ん？ いや・・・なにも・・・」

「え、えと・・・あの、お片付けがすみましたら提督が執務室に顔を出して欲しいそうです〜! じゃ、じゃあこれで私は失礼します〜!」

「ああ。」

急に行ってしまったな・・・何か急用でも思い出したか？ 荷物も大した物・・・ないし小さく小さくと片付けてしまおう。まずはみんなからもらった餞別を大事にしまおう。えーっとこれは島風からもらったカチューシャ・・・これは鳳翔からの中華鍋・・・これは金剛からのティーカップ・・・これは響からのアイヌスプーン・・・これ、は・・・新しい財布。これは不知火がくれたんだっけ、なぜだか一番泣いていたのは不知火だったなあ。ぐしゃぐしゃの顔で大潮と一緒にやってきた時は驚いた。

「・・・こんなものか。」

さっそく執務室へ向かおう。ここの提督はどんなやつだろうか・・・

「やばいだろ! 大淀! なんてことしてくれたんだよ!」

「だ、だって提督! 天龍さんが大侵攻阻止の連合艦隊に参加していたなんて嘘だと思ってたんですよお!」

「ばっか! 天龍は現存する艦娘の中でも大侵攻を生き抜いた相当な古株の第一期艦娘なんだぞ!! よくきくただの遠征番長とはわけが違うんだぞ!!」

「そ、そんなこと言われてもお!」

「ほら! もう長門さん来たから落ち着け!」

『・・・取り込み中だろうか？』

「そ、そんなことないぞ！入ってくれ！」

「失礼する。」

ふむ・・・若そうな提督だ。横須賀のとは大違いだな・・・大丈夫だろうか。しかし上官は上官だ。それに北方から未だ続く深海棲艦の侵攻を防いでる提督だ。信頼は出来るだろう。

「本日付で着任しました。長門型戦艦一番艦の長門です。」

「よく来てくれた。横須賀のバアちゃんから話は聞いている。」

「バアちゃん・・・？」

「あの人の教え子なんだ俺は。無事あの人の訓練過程を終えたやつらはみんなバアちゃんって呼んでる。」

そんなことしてたのか、全然気づかなかった。横須賀の提督・・・熱血で人が良くて有能なのは一緒に戦ったから知ってるけど・・・バカだから誰かに教えられたのかなあ・・・？

「苦労したな。」

「やはりわかりますか。」

「ああ。私も、提督の艦娘だったからな。」

頭を下げた大湊の提督を見るに予想通りだった模様。まあ良しとしてここ大湊でやることを教えてもらわねば・・・また・・・戦いの日々に戻るのも・・・悪くは・・・いや悪い悪い。せつかくみんなと仲良くなるって決めたのに左遷なのだから。少しくらいふてくされてもいいだろう？

「私は、何をすればいい？聞けば戦艦はほとんどいないと聞く。そして水雷戦隊の練度が他と比べ高いのも。私は必要か？」

「ええ、ちゃんと説明しますよ。その前に一息つきませ。」

「おおい！提督ー！！第二遠征艦隊帰投したぜ・・・！？」

「お前は・・・」

「全身の火傷痕・・・錨のチョーカー・・・頭の電探・・・そおかあ！今度来るって言った戦艦はあんただったのかあ！」

他の天龍と違いカッコ付けではない眼帯、特徴的な電探、頼もしい声・・・変わらない、あの頃と一緒の姿だ。彼女も私の友人だと胸を

張って言ってくれる人物の一人だ。

やはりいると聞いていたからいつかは会えると思っていたがこんな急に来るとは

「久しいな・・・天龍。」

「へへっ！よく来たな長門！歓迎するぜ！」

「コラーツ！天龍！今は応接中だろうが！ノックして入ってこないか!!!」

「へいへい・・・」

執務室に乗り込んできたのは遠征の報告書を出すためだったらしい。こういう不遜なところも変わらないな。新しい場所で不安だらけだったが彼女がいれば安心出来そうだ。大湊でも新しい友達を作り、艦娘といちやいちやする。この目標を忘れずに頑張って行こう。一番の懸念される問題はここの食堂の親子丼の味が、目下の不安対象だ・・・それは今日中に調査せねばな。

「やあ諸君、長門だ。横須賀から左遷されて大湊警備府に来たら昔連合艦隊を組んでいた天龍と再開した。昔と変わらず距離の詰め方が上手で気さくでいいやつだ。少々不遜なところもあるがな。」

「じゃあ長門さん。自己紹介をさせてもらおう。俺はここ大湊警備府で提督をしている渡辺だ。以後よろしく。」

「ああ、よろしく。」

「お、大湊です・・・先ほどは・・・長門さんの御戦友に対して、大変な失礼を・・・！」

「・・・気にするな。」

「(めっちゃ気にしてるー!?)」

「俺は自己紹介するまでもねーけど、天龍だ。今はここで遠征艦隊と教導の総括をしてる。長門が来てくれて嬉しいぜ。」

「私も知り合いがいて心強い。改めてよろしく天龍。」

「でも本当に天龍さんは太平洋の英雄の連合艦隊に参加してたんですねー」

「ははは！そこにおいても大したことはしてねーよ。」

「何を言う天龍。お前のおかげで何度助けられたかわからんぞ。」

「やめろよ長門、くすぐったい。」

「そうだ。俺も数々の大規模作戦のあったあの大侵攻のことは記録で見えてなくてあまり知らないんだ。天龍もあまり話してくれないしな。」

「ふむ、そうなのか・・・ならば私が話してやろう。あのいくつもある作戦で天龍は幾度も活躍してくれたぞ。」

「提督！長門もやめろよ！恥ずかしいだろ！」

「あれは・・・まだ寒さの残る春だったよ。深海棲艦が活発化し、劣勢に陥って大侵攻が始まった時だった。敵泊地発見の報告があつてそこを強襲するために初めて艦娘での連合艦隊が組まれた作戦だ。日本中から練度の高い艦娘が集められて連合艦隊の為の訓練を受けていた・・・そこで初めて天龍に会った。」

「……今日はここまでだ。」

「ああああ……お疲れさん……」

私は連合艦隊旗艦、日本最高練度の艦娘として旗艦を勤めていた。高速戦艦、空母、軽空母、重巡二人の打撃艦隊、軽巡三人、駆逐艦三人の水雷戦隊で組まれた水上打撃艦隊だった。その水雷戦隊で天龍は旗艦を勤めていたんだ。

「くっそー……俺は……なんでこんなところに呼ばれたんだよ……」  
「……お前が優秀だからだ。」

「優秀？俺みたいな旧型艦船がか？冗談だろ？阿賀野型や川内型でも使えばいいのよ……」

「随分自己評価が低いな？天龍はもつと堂々としていると聞いたが。」  
「……艦娘にも個体差があんだよ。覚えておくといいぜ？旗艦サマ？俺には実戦より遠征で資材稼いだ方が性に合うし、役に立ってるんだ。」  
「……そうか。だが今は水雷戦隊の旗艦だ。作戦決行まで残り時間は少ない。気を引き締めろ。」

「へーへー」

天龍は初めてあった時は他の天龍より自分をどこか冷めた目で見てる感じでな？反抗こそしなかったが随分と扱いにくかったよ。そしていざ作戦決行。敵泊地目指して出発したはいいが……海は既に深海棲艦のものと言っているほど制圧されており途中の戦闘の数も尋常ではなく消耗も激しかった。そして遂には敵海域のど真ん中で連合艦隊は身動きが取れなくなった。

「もうっ！電探がやられた！レーダーも効いてない！索敵はどうでしょうか!?!」

「未帰還機多数！残りの艦載機も少なくなってきましたね……」  
「ちつくしよお！羅針盤もダメだ！現在地不明！」

「長門！引き返しましょう！作戦は続行不可能よ！」  
「却下だ。」

「ツ！何言ってるのよ！摩耶、高雄は中破、瑞鶴は大破して発艦不可！  
水雷戦隊の方も被害甚大！みんなあなたみたいに頑丈じゃないのよ  
!？」

「敵に背中を撃たれたら好きにしろ。」

「このっ！」

「やめてくださいビスマルクさん！味方で争っているは・・・」

「じゃあどうすんの上鳳翔！燃料ももうないじゃないの!!通信も途絶  
えてるし、野垂れ死ねっていわけ!？」

「帰れないならば進むしかないだろう。違うか？ビスマルク。」

「あんなねえ・・・！」

「現在地ならわかるぜ。」

「・・・天龍？」

「・・・どういうこと？貴方の艦装はボロボロで推進機しか機能してな  
いじゃないの。」

「ここは以前に遠征で何度も通った。深海棲艦に制圧されてからは見  
てないが・・・星の位置でだいたいわかる。方角はこっちが北、あつ  
ちが南、だとすると本部の方向は向こうだ。距離もだいたい1200  
キロくらいじゃねえかなあ？」

「ほんとなの、それ？でかしたわ天龍！」

「・・・。」

「なあ旗艦サマよお？ここはいったん退かねえか？補給も十分じゃ  
ねえ満身創痍の状況で敵につっこんでもそれはただのバカだろ？帰  
り道もわかった。ほぼ安全な航路もわかる。また・・・」

「また来ればいい・・・か。」

「そういうこつた。ま、でも連合艦隊の旗艦はあんだだ。最終的には  
あんたに任せるぜ。」

「・・・全艦撤退用意、動けぬ者は曳航してもらえ。」

「ほっ・・・。」

「はあ・・・生きた心地がしないぜ・・・くそっ・・・」

「長門さん……」

「……」

天龍は度重なる遠征であらゆる海域を知り尽くしていた。海図も頭にすっかり入っていたんだろう。撤退中の航路では一回も敵に遭遇することなく鎮守府に帰ることが出来た。そして何度も撤退を繰り返し、激闘の末に敵泊地を完全破壊。再び満身創痍で帰る時も天龍の知識で帰路を見いだしたなんとか撤退した。大侵攻最初の作戦は、天龍のおかげで無事成功し、生還出来たといっても過言ではない。あの時天龍がいなかったらと思うと今でも足が震えるよ。

「そ、そんなことがあったんですね……！」

「ああ。だから、大湊の天龍は私の命の恩人と言ってもいい。」

「や、やめろよお……」

「大侵攻を生き抜いた艦娘だとしか聞いていなかったが……まるで生ける伝説だな。俺も鼻が高いよ。」

「だから私だけが英雄と呼ばれているのは少々気に入らないのだ。」

「いいんだよお……バカスカ殴り合ったのはほとんど長門だったんだからよお……俺は道案内しかしてないじゃないか……」

電探まで真つ赤になってうつむく天龍はなかなかかわいいものだ。にしても……昔の大侵攻を生き抜いた艦娘はほんとに少ない。艦娘は建造された時期が大侵攻前か後かで第一期、第二期艦娘と別れている。おおまかな違いはないが戦闘に意欲的かどうか等の違いが生まれていると噂されている。格差が生まれている……などとは思いたくないが、第一期艦娘は練度査定などで計れない強さの差が出てきているのも確かだ。

「思いがけない話を聞けたよ。ありがとう長門さん。」

「こちらこそ。友人を自慢出来て良かった。」



「恥ずかしいよお・・・」

「よし、じゃあ大淀、長門さんに中を案内してやってくれ。それが終わったらちようど昼食の時間になるだろうし、間宮が用意してくれているだろう。長門さんの仕事についてはこの警備府に慣れたら、また後日ってことで。」

「わかりました。長門さん大丈夫ですか？」

「私はいいが・・・大丈夫か天龍？」

「もう昔の話をするのはやめてくれよう・・・」

「わ、わかった・・・後で食堂でな・・・」

「おう・・・」

湯気が出そうなくらい真っ赤だ。天龍は提督に任せて、案内してもらおうとしよう。それにどうやら食堂には間宮がいるらしい。これは・・・これは親子丼の味を期待してもいいかもしれない。昂ぶってきた。後でマイ箸を取りにもどろう。他の鎮守府の味というのは実に興味深い、それに食堂ならば他の艦娘もいるだろうし。仲良くなれたらいいなあ・・・あ、大淀が何もないとこでこけた。ドジっ娘属性を追加だ。

やあ・・・諸君・・・長門だ・・・その、警備府を案内されて食堂まで来たんだが・・・間宮にさっそく親子丼を注文したらびっくり・・・なんだこれは。大淀は食べた瞬間机に突っ伏した。

「うぐう・・・」

「ぐぐぐぐぐめんささいいいいい！わた、わたしまだお料理は練習中で・・・!!お菓子なら得意なんですけど・・・」

「そ、そのようだな・・・」

親子丼がまずい。やべえよこれ。見た目もやばいし味もやばい。それどころか注文した時も間宮はげつやばいって顔したし作ってる時も悲鳴が聞こえてきてやばい。

「ま、間宮・・・君も最近建造されたクチか・・・？」

「わかりますか・・・？」

「だろいな。そうでないならいかんよきみい。」

「大淀・・・平気か・・・」

「ふ、普段は・・・長良型の皆さんが作ってくれるんですよ・・・ぐふう・・・」

「間宮！特訓だ！私が教えてやる！」

「ひ、ひええええ・・・」

幸い中華鍋もある。大戦艦サイズだが親子丼も作れるだろう。そしてそうこうしてる間に提督と天龍がやってきた。

「長門さん、間宮の料理はどうだった？」

「・・・これから期待、だな。」

「やっぱりそうかー」

「ぐぬぬ・・・」

修行中ならそう言ってくれ。・・・天龍も元に戻ったみたいだな。

「それで提督、私はこの大湊で何をすればいい？」

「・・・向こうでの事情はある程度聞いてる。通常任務につかせてやりたいところなんだが・・・それじゃあ上は黙ってくれない。」

「そうだろうな。実弾もって本部の演習監視を逃れるような危険人物

を、そう簡単に戦線復帰させたなら本営を疑わなければならなくなるな。」

「そこでだ。俺と提督で話し合って長門には新造艦の教育、つまり俺の補佐だな。それをしてもらうことにした。退屈そうなことですまん。」

「いや構わない。少し戦線から離れていたしな・・・」

「教育なんていっても大層なことはいらない。建造されたばかりの艦娘が大湊で馴染めるように数日基礎訓練等の面倒を見てもらう、そんな感じだ。」

「わかった。それにしてもここはそんなに盛んに建造しているのか？」

「うちは大型艦が顕現しづらいらしくて・・・ならば軽巡や駆逐艦の強化にあてるべく建造で船魂を増やしているんだが。それでもそんなに建造はしない。」

「懸命だな。警備府ではそんなに資材も潤沢ではないだろうに。」

「まあ皆強化に頼らず訓練で練度を伸ばしているから建造はしなくても問題はない。」

なんと勤勉なやつだ。若いからと侮っていたが・・・撤回しよう。横須賀の提督も、バカながら努力家だった。バカも移っていないさそうだし・・・本当、有能なんだがどうしてあの突っ走る癖と勘違い癖は直らなかつたのか。仕事では見せないんだがな。

「・・・ん？ちよつと待て。建造はあまり行わないというなら私の仕事は・・・」

「・・・そうだな。まあ一応形は左遷になっているから・・・」

「ああ・・・」

決まりました。職業「艦娘ニート」でございます。

「長門さんがこの警備府で出来ないことは演習、遠征などの出撃申請だけだからそれ以外は自由にしてくれ。それと一応数日したら本営から中将が横須賀とここに様子を見に来るらしい。正確な日時は知らされていないが・・・」

「わかった。いわゆる大人しくしているところを見せればいいのか」

う?」

「そうだ。長い休暇だと思ってくれ。」

願ってもない……なんてこと長門のキャラ的には口が裂けても言っ  
てはダメだな。休暇なら、それこそ艦娘と仲良くなる算段を立てなが  
ら過ごせばいい。まずは間宮からだが。あれを親子丼と言うのはダ  
メだ。

「今日は仕事の話はこの辺にしておこう。ご苦労長門さん。」

「ありがとう提督。今日は……間宮と料理でもしようと思う。」

「お!じゃあ晩飯は期待しよう。」

「いいなあ長門、休暇三昧か。ま、でも実質引退でもいいんじゃないの  
か?」

「ほお、天龍、言うようになったじゃないか。」

「おー怖い怖い。そいじゃ俺も次の遠征計画書書かなきゃならねえか  
ら行くぜ。」

「大淀、起きろ。いつまで寝っ転がってるんだ。」

「はい……提督……」

食堂から出て行った三人を見送って、と。さあ間宮!私と話をしよ  
う!せめて食べても大丈夫なくらいの親子丼を作れるようにするん  
だ!

「間宮……給糧艦だからレシピなどは頭に入っているな?」

「ひう!はい!」

「ならば……数をこなして腕に覚えさせるしかないか……」

「はい……」

「いいか間宮、充分承知しているとは思いますが食事は士気に関わる。か  
の大侵攻で作戦成功の要となったのは美味しい食事であったとも言え  
る。」

「はい……!」

「ちようど良いからまずは私の好物の親子丼からだ。部屋に戻って準  
備をしてくる。それまでに台所の準備をしておくように!」

「りよ、了解!」

まずは中華鍋だ。鳳翔からもらった中華鍋、これはいつぞや私がまっぴたつにしてしまった物を直した物だそうだ。もうどこから割れたかなんてわからないくらいキレイに直っているな。あとは赤城からもらったエプロンと・・・加賀からもらった包丁、お玉などのお料理セットだ。ふむ四スロを満載にして、いざゆかん!!

「戦艦長門、出撃する・・・!」

すべては親子丼の為・・・親子丼さえあれば燃料がなくても出撃出来る。そして鳳翔から教えてもらったみんなでご飯を食べて仲良くなる方法を実践するためにも美味しい食事が無いとな。恐らく長良型は出撃や訓練の後に食事を作るのだろう。それは酷だ。長良型は努力家な艦娘で有名だし、少しでも負担を軽くしてやらねば。

「・・・食堂はどっちだったかな?・・・こっちか・・・」

「・・・!」

「ちよつと名取どうし・・・!」

んん? なにか視界の端にいたような気がするが・・・今はそれより親子ど・・・間宮だ。

「な、誰アレ!? 全身傷だらけ、でエプロンして・・・あの大きさ、戦艦!」

「て、提督が言ってた・・・あああ新しくきた艦娘じゃないかな・・・?」

「じゃあなんでその新しくきた艦娘がエプロン着てウロウロしてるのよー!」

「なんか・・・すごく怖い顔してたよお・・・! それに首元の、遠くで見えなかったけど銀色の錨のマーク・・・」

「ま、まさか、海軍国防勲章・・・!? 伊勢型は短髪だって聞いてるから

違うし・・・長髪であの威圧感・・・まさか長門型・・・太平洋の英雄!？」

「い、五十鈴ちゃん、み、みんな知らせた方がいいのかなあ・・・？」  
「と、とにかく大湊に長門型が来るなんてただ事ではないわ！名取、提督に聞きにいくわよ！」

「う、うん！」

—  
—  
—  
—

「準備はいいか間宮？」

「はい！」

「よし。ここ大湊は食べ盛りの軽巡、駆逐艦の艦娘が多いと聞く。ならばたくさん食べられる物がよい。鶏肉は何がどれくらいある？」

「えっと、もも肉は28キロ、ムネ肉が40キロ、ササミが50キロです。」

「すげえ」

「？」

「んんっ！卵はいくつある？」

「ええっと・・・紙には600個と・・・」

「えっと・・・それは何日分なんだ・・・？」

「この鎮守府の食事情はどうなってるんだ・・・？とりあえずいまの時間はヒトロクマルマルを過ぎたところ。晩飯までは間に合うか。恐らく一週間分では・・・ないかと。」

「実は空母が混ざってないか？」

「横須賀の様に艦娘多く、戦艦や空母がいるなら一週間分は納得はいく。」

「まあとりあえず40人分を目指して作る。」

「わかりました！」

「使うのはムネ肉だ。7・・・いや8キロにして持って来てくれ。私は

タマネギを切る。」

「8キロ・・・8キロ・・・わかりました！」

「中華鍋を温めて・・・」

「ここで簡単なメニューだ。私好みの親子丼。

卵・・・中玉二個

鳥ムネ肉・・・200g

片栗粉・・・適量

タマネギ・・・1/2個

油揚げ・・・一枚

薬味ネギ・・・適量（私は二本）

割り下の材料

水・・・200cc

みりん・・・160cc

濃い口醤油・・・40cc

昆布つゆ・・・40cc

砂糖・・・適量

これは一人分だ。

「うおおおお!!」

艦娘だからタマネギで涙は出ない。便利な体だなあ・・・

「よし、次はあぶらあげだ！」

「あ、あぶらあげですね！」

「この明石特性の包丁なら一辺に切るのも楽だ・・・よし。間宮、持ってきたムネ肉を一口大に切って麴で揉み込み、薄く片栗粉をまぶしておけ。」

「ムネ肉を一口大に・・・はい。」

「その間に割り下だ。豪快に材料を中華鍋にいれて温める。」

「卵もってきました！」

「よし、卵は黄身と白身に分けておけ。分け終わったら私がかき混ぜる。白身は・・・メレンゲでも作ろう。」

「は、はい・・・ひー！終わりが見えない・・・」

「麴を揉み込んだムネ肉、タマネギ、油揚げを割り下にどばあー。肉に火が通るまで煮込む。．．．この量を作るのは初めてだからよく見ておかないとな．．．」

「ひーっ．．．ひーっ．．．卵、分け終わりました．．．」

「流石給糧艦。仕事が早いな。」

「う、腕．．．ひいー．．．腕を換装したいです．．．」

「ここまですぐればもうすぐだ。米はどうなってる?」

「炊いて．．．あります．．．ふう。釜二つです。」

「わかった。」

大分早足で進んだが大丈夫だろう。そういえばこの作り方は鳳翔の言うところ京風、らしい。そういうのにはさっぱりだ。美味ければいいではないか。

「間宮は作ったのは肉に味が染みていなくて、さらに割り下は濃すぎ、卵もしっかり混ぜていないなど問題点がある。覚えておけ。」

「はいっ!」

「お腹空いたっぽいー?」

晩飯の時間まではまだまだあるが、早速二オイに釣られた子がいるらしい。

「すまんなまだ出来ていな．．．」

「あら夕立ちちゃん。お腹空いちやったの?」

「お腹空いたっぽいー」

．．．!?ゆ、夕立．．．?え?小さい?横須賀にいた夕立は14才ぐらいの姿だったぞ?え?どうみてもこの夕立の姿は五歳くらいだ。嘘だろ。戦えるのかこれ。

「お姉さんみたことないっぽいー」

「あ、ああ私は今日着いたばかりなんだ。戦艦長門だ。よろしく頼む。ゆ、夕立．．．?」

「よろしくっぽいー。でもお姉さんいっばい怪我してるっぽいー?痛い痛いのとんでけーっぽい。」

「あ、ありがとう夕立。」

いかな。これはいかな。いかなよ。いかな。いかないかない



かん・・・はっ！しまった今は料理中だ。鍋から目を離してはいかん。  
「危ない危ない・・・間宮、夕立を頼む。」

「はい。」

良いにおいだ。親子丼は完成で良いな。味も・・・うむ。鳳翔の作った物には劣るが美味しい。

「後は薬味ネギを切って・・・うむ。」

「夕立、ねぎはいやつぽい。」

「わかった。夕立のからは避けといてやろう。」

「ありがとうっぽい。」

米が炊けるまではまだ時間はある。ならば焦げないように親子丼を煮るというのもいいな。私の好みだが。

「長門さんは・・・いつお料理を習ったんですか？」

「ん？これは・・・いつだったかな？覚えていないな。それに作れるのは親子丼だけだ。」

「あれーっ!?!間宮さんがご飯当番なのにすごい良いにおいするー!?!」

「ああー阿賀野お腹空いたー!」

「ちよつと阿賀野姉、だらしないったら!」

「ぴゃー!おさないでえ!」

「酒匂!まったく・・・」

「睦月型とうちやーく!みんなお茶碗もって着席!」

「「「「「はい」「」」「」」「」」「」」

「綾波型も全員いまーす!」

おおおそろそろ晩飯の時間だからか。みんなやってきたな。ほんとに軽巡と駆逐艦しかいない艦隊なんだな。

「長良型、上二人以外はいます。どこにいったのかしら・・・」

「まあー報告じゃない?訓練で正面海域つかってたしー。」

「もう鬼怒・・・少しは心配してあげたらどうなの?」

「姉さん達ならそんな簡単にやられないっしょ!」

ふむ、長良型がいると聞いたが全員いるとはな。夜戦に対潜なんでもござれの強力な水雷戦隊だ。しかし夕立のような幼い姿になっっているのは・・・いないな。いや睦月型は大体幼い外見だけでも。

「・・・あれ？間宮さーん？なんでカウンターに座って・・・」  
「あー長良ー。今日は間宮さんじゃなくってお姉さんがご飯作ってくれたっばい。」

「ん??お姉さん??いつの間に白露型が・・・?」

「白露ちゃんじゃなくってお姉さんっばいー」

「んんん??」

そうこうしていたら米が炊けた。釜を空けるとふんわりと米が輝くように炊けている。腹が減った。

「間宮！米が炊けた！飯にするぞ・・・?」

私が台所から出ると全員の視線が一気に集まった。その視線は様々な感情を含んでいる。そんなに見つめられると照れるなあ。それよりもみんなご飯にしないのか？

「せ・・・」

「ん?どうした。まずはご飯にしよ・・・」

「戦艦だーっ!!!」

第一印象はインパクトが大事。長門覚えた。

や、やあ諸君。長門だ。親子丼を作ってたら大湊の皆に驚かれたでござる。そんな台所にいるのが似合わないのだろうか・・・しかしここで退いたら長門の名が廃る。突き進む以外の道はない。

「せ、戦艦長門だ！よろしく頼むぞ」

「け、敬礼ーっ!!」

先を越された。丁字不利だ。長良の鶴の一声で食堂に集まった皆が立ち上がって敬礼・・・うむ。よく統率が取れている。じゃないそんな堅苦しくなくていい。

「直れ。」

「先程は失礼致しました！ここ、大湊で水雷戦隊旗艦を任されている長良型一番艦の長良です！」

「並べ。」

「は？」

「今は飯の時間だ。そういうのは後でも出来る。訓練や遠征で疲労が溜まっているやつもいるだろう。仲間のことも考えてやるのが旗艦の努めだ。」

「はっ！ありがとうございます！みんな並べーっ！」

一糸乱れぬ動きで皆が並んだ・・・素晴らしい士気の高さだ。じゃない、いかなんどうしてもこう、敬礼されるとスイッチが入ってしまう。

「今日付けでここ、大湊の所属になった。元横須賀連合艦隊旗艦の長門型戦艦一番艦の長門だ。僭越ながら今日の夕げは私が拵えた。皆ゆっくり食べてくれ。」

「！！ありがとうございます！！！！」

「よ、横須賀連合艦隊旗艦・・・!?た、太平洋の英雄戦艦長門!?あわわわわ、わ、私は何て人に・・・」

「間宮、顔が真っ青っぽい。具合悪いっぽいー？」

うーんこういうピリツとした空気も嫌いではないんだが・・・そんなの戦闘中だけで充分なんだ。みんなわかってくれ。

「・・・戦艦、しかも長門型が配備されるなんて・・・大規模作戦があるかもにやしい・・・!?」

「睦月ちゃん!すっかりして!お箸を持つ手とお茶碗持つ手がいつもと逆よ!」

「ふわあ・・・戦艦つておつきい・・・!」

「漣!敷波!長門さんに失礼があつてはいけませんよ!大戦艦カラテで水平線の先まで吹き飛ばされてしまいます・・・長門さんにカラテ習おうかしら・・・」

「あーあー綾波ちゃんの戦闘狂がまたでたー」

「(A、) 私の扱いがヒデエ」

「また、おつきな戦闘が・・・!」

「だだだ大丈夫よ阿賀野姉!こんどは阿賀野型が全員いるもの!」

「能代、震えすぎてコップから水が溢れている!」

「ぴゃー!長門さん・・・やっと会えた・・・!」

あああ阿鼻叫喚だ。第一印象はインパクトが大事だと言ったがインパクト強すぎてみんなブロークンハートだわこりゃ。

「みんな行き渡ったな!合掌!」

「!」

「いただきます!!」

「お姉さん、まだ夕立はひとりじや食べられないっぽいー」

「ん?そうか。一人で食べる練習をしないとだめだぞ。夕立の席はどこだ?」

「あそこっぽいーいつもは間宮が食べさせてくれるっぽい?」

これはもう提督と天龍になんとかしてもらうしかないな。それより夕立だ。間宮は目を回しているし、仕方ない。仕方ないのだ。

「よし、夕立こっちに來なさい。」

「ねぎはいやつぽいー」

「大丈夫だ。ちゃんと避けておいたぞ。よっ・・・と。」

夕立を子供用の背の高い椅子に座らせたが・・・これは、なるほど、娘が出來たみたいだ。

「あーん」

「はい、あーん。」

うむ、いい。だがそのぽむしゃぽむしゃという咀嚼音はどうやって出してるんだ。

「こ、こら夕立！長門さんになんてことを・・・」

「大丈夫だ長良。構わないさ。」

「すみません長門さん・・・！」

「もっと欲しいっぽいー」

「こ、こら!!」

「気にするな。ほれ。」

「んぐんぐ・・・もやごどん美味しいっぽいー」

「それは良かった。あと親子丼だ。」

近くに座った長良がそわそわしっぽなしだ。それじゃ落ち着いて食べられないだろう。

「・・・！！」

「どうした長良？そわそわして。落ち着いて食べなさい。」

「す、すみません！えつと・・・」

「ん、そうか！長良もして欲しかったか。ほら、あーん。」

「!!?いい、いや、そうでは、なくて!」

「美味しくなかったか・・・？」

「そ、そそそ!!」

はっはっは！思い付きでやってみたが長良の可愛い面が見れたな。これ以上やると可愛そうだな。

「い、いただきますっ！」

引っ込めようと思っただ矢先、れんげに食いついた長良はもう顔を真っ赤にして今にも倒れそうだ。はっはっは。

「長良も夕立と一緒にっぽいー」

「・・・!!」

「な、長良ちゃんが・・・！」

「ぴゃく!?さ、酒匂いきます!!」

「ちよ!!酒匂!!」

うんうん。仲良く食べるのが一番だ。長良も顔は真っ赤だが満更

でも無さそうだ。夕立ももう半分たいらげている。よく食べて大きくなれよ。

「な、長門しゃんっ!」

「お!おお!酒匂か!艦娘の姿で会うのは初めてだな!」

「ぴゃ!?は、はい!お久し、ぶりです!」

「それでどうした酒匂。」

「わたしもわたしも!わたしも長門さんに!食べさせて欲しいです!」

「そうか!酒匂は甘えん坊だなあ姉達が嫉妬しないか?」

「ぴゃ!?え、えつと・・・」

「酒匂も夕立と一緒にぽい?」

ふむふむ、なんだみんな可愛いやつだな。そうか。みんな軽巡より上のお姉さんは初めてなんだな。だから緊張していたのか。なるほどなるほど。

「冗談だ酒匂。ほら、お椀を貸して・・・あーん。」

「あ、あーん」

大きな口を開けて待つ酒匂はさながらえさを待つ雛鳥のようだ。可愛いやつだなーはっはっはっはっはちよつとイタズラしてやろう

「よっ」

「ぴゃ!?」

口に近づけたれんげを手前ですつと退いたらかつんと歯が鳴る音がして・・・あ、泣きそうだ。

「う〜」

「ぶふっ・・・すまん酒匂、ちよつと・・・イタズラしてみたくなった。」

「長門しゃん・・・」

「ほら今度はイタズラしないから。あーん。」

「あむっ・・・にへへ、美味しいですー」

「良かった。おかわりもあるからな。遠慮なく食べなさい。」

「はーい!」

酒匂が席に戻ったのを見ると姉妹達が心底安堵した表情をしているな・・・可愛い妹だとあとで誉めてやろう。

結局40人分用意した親子丼はものの見事30分で無くなった。

自分の用意したご飯がこのように食べてもらえるのはとても気分がいいな。給糧艦に機種変換しようか。戦艦ボデイなら出来ることも多いだろうしな。夕立も結局二杯もおかわりした。あの小さいからだのどこに入ったのか、艦娘の不思議が増えた。

やあ諸君、長門だ。食事は無事終わった。が、それと同時に再び彼女達は整列し、敬礼している。これは何かもう仰々しいことを言わねばならないかと立ち上がった瞬間提督達が入室してきた。助かった。……っ！提督に敬礼！」

「あー、いいよ長良、直れ。」

「はっ！」

「て、提督、素晴らしい士気の高さだが……こう、止めてくれ。」

「おおなるほどすまんな長門さん。だ、そうだお前ら！もつと楽しんでいいぞー！」

ざわざわとする食堂で提督と天龍、大淀後ろの二人は五十鈴と名取かな？

「どれ、長門さん、夕食はなにかな？」

「腹へつちまつたぜー……もうしばらく書類は見たくないな……」

「そんなこと言つてほとんど私が書いてたじゃないですか。」

「いいじゃねえか。大淀そういうの得意だろう？」

「あー……すまん、夕食は親子丼なんだが、もう無くなってしまった。すぐ作るよ。」

「おー！いいねえ長門！長門は昔から親子丼好きだなあ！」

どっかりと座った天龍だが、五十鈴と名取は小さくなったままだ。何か、問題があるのだろうか……

「五十鈴、名取、親子丼は嫌いだったか？」

「ひうう！ご、ごめんなさい！」

「い、いえ！そんなことありません！親子丼は好きです！」

「そうか！すぐ作るからな！待っててくれ。」

材料はたつぷりあるはずだ。間宮は……間宮！起きてくれー

「はわっ！な、長門さん!？」

「起きたか。すまんがあと五人分追加で作りたい。手伝ってくれるか？」

「りよ、了解！」



うーん・・・なんだか間宮まで堅苦しくなってしまったなあ・・・  
こう、英雄だからなんだとこう態度が変わってしまったのは寂しい  
なあ・・・海軍のように厳格な階級社会は仕方がないのか。

「提督！な、何故大湊に戦艦が・・・北方で大規模な作戦が計画されて  
いるのですか・・・!?!」

「落ちて長良、その辺は五十鈴と名取にも話したが長門さんは作戦  
の為に来たわけではない。」

「それでは何故・・・!」

「あー・・・新人育成のためだ。うちの天龍は大侵攻の時、長門と同期  
でな？教練のノウハウを学びに来たというわけだ。」

「天龍さんが・・・!?!」

「おいこら長良。」

「ご、ごめんなさい・・・」

「だからそんなに緊張しなくても良い。長門さんのこともちよつと長  
生きな艦娘くらいに思っほしい。」

「え、でも、太平洋の英雄ですよ!?!緊張するなど言う方が無理が・・・」

「提督！長門さんが教練の為にきたというの！本当ですか!?!」

「うおう!?!綾波、今は長良と話していただろう?」

「すみません、あの！綾波は是非長門さんに教わりたいです!」

「それは長門さんに聞いてみないとわからないな。」

「はい!」

「まあそんな感じで、長門さんも穏やかな人だからあんまり緊張しな  
いでやってくれ。」

「・・・わかりました!」

「待たせたな。出来たぞ。」

「提督!」

「おお夕立、どうした?」

「お姉さんのもやこどん美味しいっばい!」

「親子丼、だな。良かったな夕立。」

「夕立も長門さんにすぐなついていたんですよ。」

「そうか・・・そうだな。いいこと思い付いた。」

「待たせたな。長門特製の親子丼だ。」

何か相談中だったみたいだが……まずは飯だろう。腹が減っては良い意見も出ないだろうしな。特盛にしてやった。

「す、すごい山盛りです……い、五十鈴ちゃん！」

「名取！残してはダメよ……水雷魂を見せるのよ！」

「長良はたくさん食べてくれたからな！おかわりも一応用意したぞ！」

「ん〜！やっぱ長門の親子丼は美味いなあ〜！」

「だがこれは……なるほど戦艦サイズというわけか……！」

「ひええ……食べきれないよう……」

「艦娘も提督も体が資本だ。しつかり食べて備えるんだ。」

みんなしつかり食べるんだぞ……ん？

「ぼい……ぼい……！」

「どうした夕立。」

夕立が私の形をよじ登って肩まできた。目を擦りながら大きなあくびをして……なるほど。

「お姉さんもう眠いつぼい〜……」

「おお、そうか……長良、すまんが夕立の部屋を教えてくださいか。」

「はい！」

随分なつかれたものだ。だが悪い気分はしない。夕立はだっこするとあったかいな〜！

「あ、長門さん！」

「どうした提督。」

「長門さんの仕事を決めました。明日のヒトマルサンマルに執務室へ来るように。それと今日はこのまま夕立の面倒を見てくれないか。今までは長良が面倒を見ていたから何かあったら長良に聞いてくれ。」

「わかった。すまんが長良、頼む。」

「わかりました。まずは夕立を部屋に連れていきましよう。」

いつの間にか夕立は寝てしまった。可愛い寝顔だ。しかし艦娘が

建造でこんな状態になるなんて聞いたことがない。まあ大侵攻前と後では大なり小なり艦娘にも変化があった。それに含まれることなのだろう。にしても夕立あつたかい。自然と顔が緩んでしまうな。

「・・・どうだ天龍？」

「さあな、まだわからねえ。」

「五十鈴、名取は？」

「コメントしかねるわ。」

「もぐもぐもぐ！むぐむぐもぐもぐもぐ！」

「わ、悪い！そうだな！残したら申し訳ないな！お前ら気合い入れろ！この大戦艦を攻略するぞ！」

「」「お、おー・・・！」「」

やあ諸君、長門だ。部屋について夕立を寝かせようと思ったのだが布団に寝かせた瞬間ぐずりだしてしまつて大変だった。世の母とはこんな苦勞を毎日しているのか・・・大変だなあ。そして再び寝かしつけた後の天使の寝顔を毎日見ているのか羨ましい。というか夕立は自分でご飯が食べられなかつたり見た目よりもさらに幼い感じがする。これはなぜだ。

「ふう、一息付けたな。」

「ありがとうございます長門さん。」

「今まで面倒は長良が見ていたと言つていたな・・・大変だったろう。」  
「いえ、それほどでも。それに長門さんにすごくなつているみたいで私も嬉しいです。それに、教練の為に来ていただけたんですよね？お暇があれば是非とも新人だけではなく私達にも御指導御鞭撻お願いしたいです。」

「全然構わんよ。しかし、夕立はどうしてこんな幼い姿なんだ？」

「それが、よくわかつてないんです。」

「うん、だろうな。私も長いこと艦娘やってるがこんな状態は初めてみた。」

「そもそもこの夕立の生い立ちも不思議なことばかりなんです。大湊の湾内に入り込んできた口級深海棲艦を撃破したらなんと、残骸の中に浮かんでいたんです・・・！」

「なるほど、ドロップ艦か・・・！」

艦娘は通常建造で顕現する。この建造は船魂という艦娘の魂が関係しており、この船魂をドックで呼び出すか海域で発見したものを持つて帰り建造する。艦娘が体を得るにはドックで建造してもらはかない。しかし極稀に、深海棲艦を撃破したときに艦娘が建造された状態で現れることがある。これをドロップ艦という。

「ど、どろっぶかん、ですか？」

「そうだ。たまに深海棲艦を倒した時に船魂を見かけるだろうか？それが船魂ではなく、艦娘そのものが現れる場合があるんだ。」

「そんなことが・・・」

「最近報告されたことらしいがな。しかしそうか、夕立がドロップ艦・・・それでこのような異常が起きているのだな。」

「うっ・・・うっ・・・うええーん！」

「ど、どうした!?!」

「夕立ちちゃんは結構夜泣きしちゃうんです!」

「そうなのか・・・よっ、と。ほらほら夕立、私はここにいるぞービッグセブンだぞー」

「ひっぐ・・・えっぐ・・・」

「いつも何度も夜泣きしてしまって、私は夜戦で馴れてるからいいんですけど夕立が辛そうで・・・」

「よしよし、ふむ、そうか。夜泣きが・・・ならばここはこの長門に任せてもらおう。長良、お前はもう休め。」

「そ、そんな!長門さんに子守りみたいな真似をさせられませんよ!」  
「いいんだ。たまにはこういうのも、良い。」

長良だつて明日訓練があるだろう。予定を聞いていないからわからんが。夕立も早く寝かしつけてあげた方が苦しくないだろうし。それにビッグセブンがいれば不安要素などなくなるだろう。

「うう・・・お姉さん・・・?」

「ああ、そうだ。傍にいるぞ。ゆっくり眠るといい。」

「このままだっこ、して欲しいっばい・・・」

「ああ、わかった。よしよし。」

「な、長門さん、手慣れてますね。」

「は、初めてだったが、ビッグセブンに不可能はない。」

そうだビッグセブンに護衛されるなんてすごいぞーそれにしても夕立可愛いなー私にも娘が出来たらこんな感じなのか。いや、艦娘だから子供も何もあつたもんじゃないが。

「・・・すう・・・すう」

「ね、寝た・・・!」

「ふうー・・・」

「長良、私はこのまま夕立の様子を見ているから戻っていいぞ。」

「え、でも。」

「大丈夫だ。」

「・・・わかりました。長門さん、ありがとうございます。今日は、すみませんでした。みんな戦艦を見るの初めてでして、緊張してしまつて・・・これからよろしくお願いいたします。」

「長良・・・ああ！よろしくな！」

「ふううええーん・・・」

「あわわわご、ごめんな夕立声が大きかったな！よしよし・・・」  
「ご、ごめんなさい！私もう行きますね！」

ぐずる夕立をなだめながら長良を見送る。長良よ。これからはこの長門に任せろ。よしよし泣き止んでくれ夕立！よく寝ないと大きくなれないぞ〜！夕立〜！あ、そうだ。

「〜♪」

「ひっぐ・・・ひっぐ・・・ぽい？」

これは遠い、ホントに遠い記憶にある、母と思われる人物が歌ってくれた歌だ。艦娘に母はいない。すると間違いなく前世だ。・・・うむ。何故か私まで泣いてしまいそうになった。

「ぽい・・・すう・・・すう・・・」

「ふう・・・私も夜泣きが激しかったようだな。困りながらも嬉しそうな顔を思い出す。記憶の彼方にあるこの人が誰なのかはもうわからない。恐らく、恐らく母なのだろう。この慈愛に満ちた表情は、きつとそうなのだろう。」

「ぽい〜・・・むに〜・・・」

「お休み、夕立。また明日、だ。」

やあ諸君。長門だ。昨日は夕立を寝かshつけてそのまま一緒に寝てしまった。結構な回数夜泣きされてしまって大変だった。これを世の母は経験していると思うと頭が上がらない。しかし朝起きたらお腹の上に夕立がいた時、この上ない幸福感に満たされた。私の膨大な給金を母子の会に寄付してみようか。

「夕立、夕立。起きなさい。もう朝だ。」

「ぼいゝ．．．？」

「朝だ。朝食に遅れてしまうぞ？」

「ぼいゝ．．．」

「顔を洗って、歯を磨いてきなさい。」

「．．．。」

「ああ、そうか。わかった。少し待っていないなさい。」

なるほどやはり赤子同然というわけだな。やはり私が世話しないとダメか！そうだな！

「おはようございます長門さん、夕立。」

「長良か！夕立の歯ブラシやタオルはどこだ？」

「あ、やっぱりそうですか。長門さんは確か提督に呼ばれていますよね？お先に朝食を召し上がってください。夕立は私が。」

「わかった。すまん。」

「いえ！元々は私のお仕事でしたから。」

「それでも、だ。」

夕立は長良に任せて、先に朝食をとろう。そういえば食事は長良型の誰かが作ると言っていたな。間宮はお菓子以外全滅とのことだから．．．うむ。

「ふむ。米かパンか．．．今日はパンの気分だ。というか選べるのか．．．？．．．お、あの長い髪は。」

「あ、おはようございます長門さん！」

「おはよう綾波。」

ぴっと綺麗な敬礼をする綾波は朝から元気そうだ。なによりだ。

お日様のような笑顔も高得点だ。

「これから朝食か？」

「はい！長門さんもですか？」

「ああそうだ。どうだ？一緒に？」

「いいんですか！他の綾波型も一緒に構いませんか？」

「構わないさ。なによりまだ着任したてだからな。もっと、その、会話を増やしていきたい。」

「ふふっ綾波型はみんなおしゃべり大好きですからすぐ仲良くなれませよ。」

「それは良かった。じゃあ行こうか。」

食堂に向かう僅かな間だが綾波はいっぱいおしゃべりしてくれた。・・・しかし内容は戦いのことばかりだった。いかな・・・こんなにか愛いのに戦いのことばかりなのはいただけない。

「そういえば今日の朝食は誰が作ってるんだ？」

「確か・・・由良さんです。由良さんはパンケーキが多いですね。ジャムがお手製でとっても美味しいんです。」

「それはいいことを聞いた。」

「敷波が場所を取ってくれているはずなので、あ、いました。」

「あ、綾波、な、長門さんも！」

食堂に入ると敷波達綾波型達が立ち上がって敬礼しようとしたので手で控えるよう促す。

「すまんな、同席させてもらう。」

「いえ！」

「私！みんなの分取ってきます！潮もお願い。」

「は、はい！」

「————長門さん綾波が失礼なこと聞きませんでした？」

「ふむ、向上心があるのはいいが、四六時中考えてる必要はないな。」

「(、A、) ああやはり」

「ちよ、漣い！長門さんもお！」

「(、V、) 長門さん、綾波型駆逐艦の漣です。綾波は戦闘狂ですので、おきをつけて。」



「こら！漣！いい加減にしなさい！」

「(、A、(ほげわあー)」

「綾波型駆逐艦、敷波です。昨日はごちそうさまでした。」  
「うむ。口にあったようで良かった。」

敷波に右ストレートを食らった漣を撫でながら敷波の自己紹介を聞く。敷波はちよつと強気な駆逐艦だ。だが口元にジャムがついてる。

「長門さん！綾波型駆逐艦七番艦の隴です！長門さん教練いらつしやっただすよね！よろしくお願いいたします！」

「隴、長門さんは新人の教育の為に来たのよ？あ、綾波型駆逐艦の曙です。うちではまだ睦月型の数人が新人みたいなものなんです。教練、よろしくお願いいたします。」

「お待たせしました！」

「ジャムも皆さん牛乳で良かったでしょうか・・・！」

「ああありがとうございます。」

「長門さん、綾波型駆逐艦の潮です・・・あの、その、き、昨日の親子丼、とっても美味しかったです・・・緊張しちゃって、ごめんなさいー！」

「ああ。大丈夫だ。潮の話しやすい速度でいい。それより早速食べよう。」

・・・私は戦艦だからだろうか。綾波達よりパンケーキが四倍くらいあるのだが。ちらりと台所を見ると由良がにこにここと手を振っている。とりあえず反射的に手を振り返した。

「いただきます。」

「」「」「いただきます！」「」「」

「しかし、朝から、山盛りだな・・・」

「え・・・由良さんに長門さんの分だと言ったら・・・たくさん・・・」  
「由良め・・・まあいい。それより特製のジャムがあるらしいな。それはどれだ？」

「これです。」

「ありがとう敷波。みんなは今日は何をするんだ？」

「私と敷波と漣、潮が鬼怒さんと由良さんと一緒に遠征、朧と曙が午前中に遠征書類整理、午後から天龍さんの教練です。」

「ほうほう仕事熱心でいいことだ。頑張ってくれ。」

「はい！長門さんは確か昨日提督に呼ばれていましたよね？お時間は大丈夫ですか？」

「ああ。大丈夫だ。ゆっくり朝食を食べよう。君たちは？」

「あかし達も出発まではもう少しあります。」

「そうか。朝食くらいはゆっくり食べなさい。」

「(、▽、)はーい。」

「あのクソ提督・・・長門さんにセクハラでもしたら許さないんだから。」

「はっはっは！それはいらん心配だぞ曙。私にそんな不埒なことをする輩は全て私の前から水平線の彼方に消えた。」

「・・・冗談に聞こえないのがすごいわね。」

「いつの時代も上官の死因第一位は部下の誤射だ。」

「わお・・・」

それから綾波型達とおしゃべりできた。綾波の言う通りみんなおしゃべりが好きなんだな。潮と敷浪もオロオロしながらもたくさん話す事が出来た。そしてひとつわかった事がある。綾波型はどうも戦闘に傾倒しすぎている感じがある。ふとした拍子にやれ魚雷は砲はと・・・みんな武闘派だ。

「さて私はそろそろ行こう。」

「わかりました。ありがとうございます！」

「すまんな。失礼する。」

部屋に戻って歯を磨き、執務室の前まで来て扉をノック!!!ちよつとみしみしいってしまったが大丈夫だろう。返事があったので入る。

「おはよう、提督。」

「おはよう長門さん。」

「おう、おはよう長門。」

中には天龍もいた。秘書艦なのか？しかし旗艦は長良なのだろうか？

「じゃ、提督、演習場の準備に行くぜ。」

「わかった午前中は軽巡だったな。」

「おう！」

なるほど訓練か。

「さて長門さん、まずは座ってくれ。」

「失礼する。」

執務室のソファーに座るとどこからともなく大淀がお茶を入れてくれた。ちよつと待てマジでどこにいたんだ大淀。全然気づかなかつたぞ。この私から逃れる等・・・フツ・・・私もまだまだだ。お茶を飲んで・・・

「・・・ぶはっ!?紅茶じゃないかあ!?!」

「ひゃー!?ごめんなさいー!?!」

「げっほげほ・・・湯飲みに入ってるし完全に日本茶かほうじ茶かと思っていた・・・」

「えー・・・でも湯飲みに紅茶を入れちゃいけないなんてありませんよ?」

「確かにそうだが・・・」

絶対に勘違いするだろうこれは!てへぺろじゃない全く。

「おーおー大丈夫か長門さん・・・」

「ちよつと驚いたただけだ・・・それで私にして欲しい仕事とはなんだ。」  
「なんてことない。昨日夕立がよくなつているのを見て思いついたんだ。長門さんには夕立の面倒を見て欲しい。夕立は・・・」

「知っている。ドロップ艦だろう?」

「長良から聞いたか。」

「ああ。」

「なら話が早い。出来れば艦娘の訓練が出来るくらいまで見てもらいたいんだが・・・」

「あの小さな体で戦えると思っっているのか?見た目より全然幼いのだぞ?」

「もちろん出撃させるつもりはない。ただここは北方海域攻略の最前線。何かあったときに逃げるくらいは出来る様になつて欲しいん

だ。」

「……。」

「何かなんてないに越した事はないが……なにぶん数多のある一手先、二手先を読まなきゃならない仕事なのでな……。」

「わかつている……その仕事引き受けたぞ。」

「そうか！ありがとう。この大湊警備府では食事、洗濯など長良型に任せっきりになってしまっていて……少しでも負担を減らせたらと思っっていたんだ。」

「長良型頑張りすぎじゃないのか!？」

脳内にガンバリマス！ガンバリマス！と連呼する長良達の姿が浮かぶ……これ絶対いつかガンバレナイ……ってなるパターンだ。そうなったらこの警備府は機能停止するぞ。

「長門さん、夕立のこと頼む。」

「心得た。この長門に任せておけ。」

「長良たちには私から伝えておく。下がっていいぞ。」

「了解。失礼した。」

執務室のドアを静かに閉める……よしヒビなどはないな。それにしても正式に夕立のお世話か……なんだろう、この気持ちは。長良も言っていた。湾内にまで深海棲艦が入ってくるのがあったと。そういう危険から夕立を守らなければならぬ。今まで多くの命を守るために戦うことはあったが……何か一つ大事な物を守る為に戦うということはなかった。この胸にわき起こり心を揺さぶる感觸……そうだこれが。こういうときに使えば良い言葉だったんだな。

「胸が熱くなるな！」

やあ諸君。長門だ。提督から正式に夕立の面倒を見るよう任せられた。……艦娘としての基本訓練も。

「……夕立のことで気を付けることはこれくらいです。」

「わかった。それと……夕立の基本訓練も任されている。夕立の戦闘力の程はどれくらいか。」

「……戦闘力、ですか。」

「そうだ。艦装、身体能力、戦闘意欲なんでもいい。」

「……民間人以下です。」

「……赤子同然、だしな。」

「艦装に関しては存在すら確認されていません。船魂が確認されているので適合はすると思いますが……この夕立が装着出来る艦装を開発するとなると……。」

「資材が、いくらあっても足りないなあ……。」

「装着出来る艦装無し、身体能力は艦娘幼児、戦闘意欲は皆無。よって水雷戦隊旗艦長良は夕立の戦闘力無しと判断します。」

「提督も、無理をおっしゃる……。」

「ですが、今後のことを考えると……必要ですねえやっぱり。」

「……北方海域はそれほど切迫しているのか？横須賀にいた頃はそんな話聞いたこともないが……。」

「いえ、時折極小規模な威力偵察のような高速艦隊が来るだけでして……脅威とはなりえてはいませんが……。」

提督が用心深く見ているだけならいいが。どうにも……嫌なよか

「ぐうー」

「あちやー長門さん……。」

腹が減っていたのか……これじゃあまともな意見など出せないな。

「それじゃあ夕立を連れてお昼ご飯にしますか。五十鈴ーっ！」

「はーいー！」

—————  
—————

――

――

――

「ぼーいー!」

「ほら、あーん。」

お昼の当番は阿武隈だった。献立はトマトと卵の炒め物。トマトと卵は夕立の好物らしく。阿武隈は自分が当番の時にはいつも作るのだと言う。良いことを聞いた。

「不思議よねー。」

「どうしたの五十鈴。」

「私達があれば手を焼いた夕立を来たその日に手なづけちやうのよ? 覚えてる? 夕立が来た日のこと。大暴れだったじゃない!」

「たぶん・・・本能的に逆らわない方がいい人っていうのがわかってるんじゃないかなあ。」

「聞こえてるぞ長良。」

失礼だなあ私はそんな怖い艦娘ではないぞ。砲を向けるのはいつでも深海棲艦だけだ。

「ししししつれいしましたあー!」

「まったく・・・」

「おかわりっぽいー」

「よしよしわかった。いっぱい食べて大きくなれよー」

「夕立もいっぱい食べたなら戦艦になれるっぽい?」

「それは他所の子のだからなー」

「ぽいー?」

謎の咀嚼音と共にご飯を平らげる夕立、可愛いなあ・・・それにしても艦娘としての能力皆無ならばそれは人間として生きて行くことも出来ず、艦娘として生きて行くことも出来ない中途半端な存在になっってしまう。戦えない艦娘に待ち構えているものは、存在の消滅だけだ。大侵攻の時代に戦闘中、心が折れて戦意喪失したものは船魂が消えてなくなり、オイルとして海に溶けていった・・・これを知る艦娘は少ない。何故なら艦娘は心折れないからだ。そんな状況になど

二度と遭遇したくはないがな。夕立は可愛いが、心を鬼にしなくてはいけないか。

「夕立？ご飯をごちそうさましたら、私と訓練だ。」

「くんれん？」

「ちよ、長門さん!?!」

「天龍に頼んで鎮守府正面の波止場を使わせてもらう。」

「一緒に遊ぶつぽいー？」

「そうだ。」

「艦装もないのに・・・どうするんですか？」

「そういえば私の艦装もない。」

「え・・・」

「まあなんとかなるだろう。ほら夕立、おかわりだぞ。あーん。」

「あー、むっ。」

「・・・大丈夫ですかねえ・・・」

探か。夕立から目を離すなど言わんばかりの装備だな。

「それじゃあ天龍。頼んだよ。」

「おうよ。行くぜ長門、夕立。」

「夕立おいで。」

「ぽーい！」

「おーおー保母さんがお似合いなこつて。」

「最近、戦いよりこういう方が似合ってる気がしてきたんだ。」

「そりゃいーことで。その方が長門も休めるだろうしな。」

「てんりうー」

「ん？どうした夕立？」

「今日のおやつ何か知ってるっぽい？」

「んー間宮に聞いてみねーとわかんねーなあ」

「最中食べたっぽい。」

「だから聞いてみないとわかんねーよー」

まずはドツクだ。執務室からそんなに離れていなくて助かるな。

妖精さんいるかい？

「(´。´)(´。´)(´。´)(´。´)」

「やあはじめましてだな。」

「おーう。よろしく頼むぜ。」

「(\*、▽、)(\*、▽、)(\*、▽、)」

「おう！他のやつらはもう待機地点に出てるんだな？わかった。」

「(；；、、)(；；、、)(；；、、)」

「なに？戦艦の艦装は初めて整備するから大変だった？手間をかけたな・・・」

「ぽーい？」

「おつとすまんな夕立。もうちよつと待っていてくれ。妖精さん、これ提督の書類。基礎訓練だ。」

「(´。´)(´。´)(´。´)(´。´)」

「うむ。あとは装着か。」

クレーンから艦装が運ばれて装着位置に立つが・・・軽い!!!戦艦砲  
乗せないだけでこんなに軽いのか。



「ぽいー！お姉さんかつこいいぽいー！夕立もやるっぽい！」

ん？夕立もやる？ちよ、待て、夕立、夕立もやるってなんだ。

「ぽーい!!」

なんだ・・・!?夕立のまわりで焰のようなものが・・・ってうええええええええ!!?

「ちやつきーん！すてきなぱーちーしましよ！」

何も無い空間から夕立のミニサイズ艀装が現れて装着された。なにがどうなってるんだこいつぁ・・・

「( ; 。 □ ) ( ; ; 。 □ ) ( ; ; 。 □ )」

「よよよよ妖精さん!?なんだあれは!？」

「お姉さん行かないっぽい?」

「ちよっちよちよちよちよつと待ってる夕立！ほら、チョコやるぞ!!」  
「わーい！」

何がどうなってるんだ!?ワープとか超スピードだとか、私はオカルトは信じない派なんだ！いや、艦娘自体がオカルトみたいなものか・・・ドキドキ！夕立と秘密の特訓！始まります☆

やややややあ諸君な、長門だ。聞いてくれ。わたし、私のむす．．．  
 じゃない夕立が超変身した。こんなもの見たことも聞いたこともない。  
 とある鎮守府の明石が物質転送装置を開発したとか聞いたが実験に  
 参加した提督が紛れ込んだハエと混ざり合って合体してえらいことにな  
 ったとかならないとか。いや今はそんなのどうでもいい。  
 夕立だ夕立。

「あれー？お姉さん行かないっばいー？」

「んんん！もうチョコ食べたのか!?ほ、ほらあ飴とポテチのホタテ味  
 だぞー」

「んふふー！お姉さん今日はふとっぱらっばい。」

「あ、あはは．．．だから！提督！ほんと！ほんとなんだって！夕立の  
 機装が！なんにもない空間から出現したのかも！」

『長門さん！落ち着いて口調！口調が他所の子のになってる！』

「ぎゅーんって！ばばーっ！ぼっー！って機装が現れてがっきーんっ  
 て装着されて！」

『とにかく！今からそっちに大淀と行くから．．．』

「夕立！いつきまーす！」

「うわあああああ!!!まって!!!待つて夕立!!!」

ヅ。(。D、;≡; D。(ノ、ヅ。(。D、;≡; D。(ノ、ヅ。(。  
 D、;≡; D。(ノ、ヅ。」

「なにい!?!夕立の機装は独立していて．．．妖精が必要ない．．．!?!」  
 「わっははー！」

夕立がドックから飛び出して海上に出て．．．て速っ！そこの駆  
 逐艦より圧倒的に速いぞ!!!小さくて身軽だからか．．．!?!

「水偵！行け！夕立を追うんだ!!」

ヅ。(。V(。ノ」  
 「ぽいぽい!!」

「天龍！天龍聞こえるか!!!」

『．．．なんだよ長門！声がでつけえって!』

「夕立が！私の夕立があ!!!」

「長門さん！」

「夕立は！」

「提督・・・大淀・・・！夕立が海上に出た！」

「なんだって!?どうやって!!」

「さつき言ったかも！水偵で追っかけてるかも!？」

「長門さん！はいティツシユ！」

「うわああああん！大淀お！」

『提督！何があつたんだよ!』

「天龍！夕立を捕まえてくれ！」

『ああ!?夕立!?どこに行つたつてんだ、残ってるやつで・・・』

「海上だ！海上に出たんだ!!」

「ぽいぽーい！ぽっぽぽーい！」

「こらあー！夕立いー！」

「ぽいい!？」

「一人で行っちゃダメだろ！長門はどうしたんだ！」

「あ、てんりう。お姉さんはまだ来てないっぽい。」

「まだ来てないじゃないだろ・・・一人で行ったら迷子になるだろう？」

「迷子になつたらもうみんなとも長門とも会えなくなっちゃうんだぞ!？」

「ぽいい・・・」

「天龍ー！急にどこに・・・夕立!？」

「曙おー！待って・・・」

「あーすまんお前ら・・・今日は訓練中止だ。見ての通り、緊急事態だ。」

「夕立の艦装が・・・!？」

「あれ？なんで夕立ちゃんがいるの？」

見つけた。良かった・・・水偵君よくやったぞ!!! 天龍達と合流出来たか・・・くそおこんな時自分が低速戦艦なのが悔やまれる!!

「ん? ありやあ水偵・・・長門のか。」

『天龍! 聞こえるか!?』

「っだあー! 声がでけえつて! 聞こえてるよ!」

『今! 今行くから!!! 夕立を離さないでくれよ! お願いかも!!!』

「はいはい!・・・ほら夕立、お前が一人で出てきちゃったから長門がめちやくちや心配してるじゃねーか。キャラ崩壊してるぞ。」

「お姉さあん・・・ごめんなさいっばい・・・お姉さんと遊べると思ってた楽しくなっちゃったばい・・・」

『わかったよおおおお夕立いいいいそこで良い子にしてるんだぞおおお!!』

「わかったばい・・・」

「はあー・・・何事もなくてよかった・・・」

夕立が勝手に飛び出していった時は本当に肝が冷えた。もうあんな思いはしたくないね。夕立が傍にいるならミッドウエーに一人で行けと言われて喜んで飛び出してやる。いや、これでは夕立と一緒に入れないな。

「しかし・・・あの夕立は何者なんだ・・・明らかに人類が開発した艦娘用艤装とは違う・・・」

「不思議な感じですね・・・艦娘も妖精もほんの昔はオカルトの類이었다のに・・・オカルトは尽きませんねえ」

私はオカルトは苦手なのだ。エスパーとかUFOとかそんなの無理。夕立はエスパーだったのか・・・ロシアとかが作りそうだ。エスパー艦娘。

「にしてもどうしよう提督!! 夕立はロシアの艦娘だったのかあ・・・う

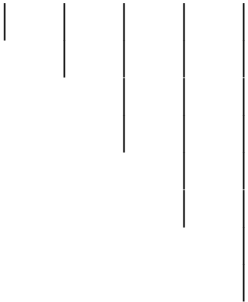
う〜」

「どうしてそうなったんだ・・・」

「とりあえずデータ収集の為に私も水偵飛ばすので長門さんもでもらえませんか？」

「わかったかも・・・」

「いい加減元に戻れ。」



「あ、何か飛んでるっぽいー」

「ん？んおお!?なんだあの数の水偵!？」

「曙!なんかいつぱい見られてるよ!」

「何かあったのかしら・・・」

「おおー！ー！ー！ーい!!」

「あ、お姉さんっぽー！ー！ーい!!!」

あああ!夕立!かわいい!じゃない。落ち着け。危ない。ロリやばい。あつというまにながもん化する。意識をしっかり保て。私は戦艦長門・・・私は戦艦長門・・・でもぎゅーつとしちゃえ。

「夕立!勝手に一人で行ってはいかん!海は怖いところなのだ!」

「ごめんなさいっぽい・・・」

「太平洋の英雄が言おうと重いねえ・・・」

「ほんとね・・・」

「まったく!保母やってんならちゃんと面倒みないとダメじゃねえか!いいか!こんぐらいちっちゃい奴だと目離してなくてもすぐどっか行つちまうんだからな!手つないでろ手!俺はいつも皐月と文月は捕まえたまんまなんだぞ!」

「は、はい・・・」

「卯月との訓練も大変だったが弥生も大変だった・・・あいつ無表情ですぐいなくなつちまうからな・・・泊地攻撃するときより緊張した

ぜ・・・」

「はい・・・」

「なんだか天龍のスイッチが押されてしまったらしい。何人ものちびっこを見てきた天龍は扱いを心得ているのか・・・んむむむ・・・」  
「おつととこんなことしてる場合じゃねえな。」

『こちら提督。聞こえるか?』

「ん?おうこちら天龍。聞こえるぜ。」

『今から大淀を加えて天龍を旗艦に長門、隴、曙、夕立で試験艦隊を編成し、夕立の戦闘力試験を行え。査定は大淀、長門の水偵で行う。』

「お、おう・・・?」

『夕立?聞こえるか?提督だ。』

「ぽいー?」

『いいか夕立?今からそこにいるみんなで遊ぶんだ。艦隊ごっこだ。全力全開だ。』

「みんなで遊ぶっぽいー?」

『そうだ。全力全開だ。』

「全力全開っぽい?」

『全力』

「全開?」

『そう』

「そう?ぽい?」

「なげえよ!!はじめっぞオラア!!」

「ごめんなさーい!遅れましたー!」

「よっしやあ!始めるぞ!模擬戦だ!俺、曙、大淀と長門、隴、夕立のチーム分けにするぞ!」

天龍のかけ声でチームごとに並んだ時夕立はやる気に満ちあふれ目を輝かせているように見えた・・・いや皆様はこの展開を予想出来ただろうか。私は第二の驚愕する出来事に遭遇をした。夕立の目は輝いているように見えんじゃない、実際に輝いていた。入渠ドックで見たこの模擬戦の映像。この並んだ瞬間みんなの驚いた顔は一生忘れないだろう。

やあ諸君。おはよう。何故おはようかと言うと今私は入渠ドックにいるからだ。今日が覚めた。確か私は天龍達と夕立の戦闘力試験を行っていたはずだ。それがどうして入渠ドックにいるんだ・・・？「ふむ・・・体に異常は・・・腕は二本ある。足も二本ある。両目も見える、声もでる・・・はて・・・？」

思い出せない・・・確かチーム分けをして提督の開始の合図を聞いた。夕立の目がやる気に溢れて焰の様に輝いていたのも覚えている。いったい何が・・・まさか、深海棲艦の急襲か？私が気を失ってしまふほどの戦いが？強力な深海棲艦が!!「こ、こうしてはおれん!!みんなは!!!」

「( ; 。 D ) ( ; ; 。 D ) ( ; ; 。 D )」  
「む！妖精さん！状況は!？」  
「( 。 。 D ) ( 。 。 D ) ( 。 。 D )」

「なに？無事でよかった？艦装が爆発？事故？」

「d || (^ o ^) || b d || (^ o ^) || b d || (^ o ^) || b」  
「提督を呼ぶ・・・わかった。危機的な状況ではないのだな？」  
「(^ o ^ ; ) (^ o ^ ; ) (^ o ^ ; )」

「なに・・・三日も意識が戻らなかった。そうか。」

ドックの妖精さんの話を聞く限り深海棲艦の攻撃ではないらしい。事故だったとか。艦装が爆発なんていう物騒なことが聞こえたが詳しくは提督に聞くことにしよう。

「ん・・・んう・・・」

「・・・朧?」

「ふあれ・・・長門さん?」

「朧!大丈夫か!?何があつたかわかるか?!」

「えつと・・・すみません、何がなんだか・・・」

「ああ・・・す、すまん起きたばかりなのに・・・」

「いえ・・・試験開始して、突然吹き飛ばされたまでは覚えているんですが・・・」

「妖精さんが言うには、私の艤装が爆発したらしい……」  
「え、どうして!」

「すまない……異常に気づかなかった私のミスだ……」  
「そ、そんな、長門さんのせいではありませんよ。きつと何か理由があるはずですよ……」

「すまない……本当に……」

ドックの外にばたばたと大勢集まってきたようだ。わーわーと何か揉めているような声も聞こえる。なんだ、何かトラブルか？

「おーい!提督だ!入っても大丈夫か?」

「大丈夫……」

「わわわ!待ってくださいーい!長門さん!タオルタオル!」

「ん?ああすまん。」

「ふう……大丈夫です!」

ドックの扉が開くと提督が滑り込みながら土下座をかましてきて私と隴の前にキレイに止まった。こやつ、慣れているな……

「ほんつとーに申し訳なーい!!」

「ま、待て提督!いきなり謝られてもわからない。妖精さんからは艤装が爆発したとしか聞いていなくてな……」

「それなんだが……」

「長門さん、隴ちゃん、御体に異常ないですか?」

「大淀、ああ問題ない。」

「私もなんともないです。」

「良かった……提督は私がきつとく叱っておいたので!」

「ああ……して、何があった?」

「まずはこれを見てください。」

んん?大淀の、たぶれつとというやつか。時代は変わったなあ。どれどれ

「これはあの戦闘力試験の映像です。長門さんのここに注目してください。」

「……第三スロット、第三砲塔から火が!?なんだこれは!」

映像にはちろちろと根元が燃える第三砲塔。その火を夕立が



じーっと見つめている。

「うわぁ・・・整備不良・・・？」

次にことが起きたのは開始の合図がされて動き出した瞬間だった。一気に火が吹き出し、第一砲塔に砲の代わりに積んだ電探、第四砲塔のカタパルトを燃やし、隴を巻き込んで私が大爆発を起こした。なるほど、夕立の目が輝いて見えたのは私の艤装から出る火を見ていたからなのだな。幼い夕立に報告やらなにやらしろというのは無理だろう。映像で固まっているのを見るとてんぱっているようだ。

「・・・妖精さんは整備不良なんて起こさない、原因はいつたい・・・？」

「私のミスだ・・・」

「どういうことだ？」

「私が、艤装の確認を書類でしかなかった。結論から言うと横須賀から送られてきた長門型の艤装は、長門さんのものではなく、横須賀の陸奥さんのものだった。」

「・・・はっ。」

「間違って送られてきたんだ。私が最終確認として妖精さんとの立ち会い確認をしていれば回避出来た事故だった・・・長門さん、隴、本当に申し訳ない・・・」

「・・・」

なんとも、間抜けなミスで声も出ない。一步間違えば私だけではなく、隴まで轟沈していた。

「あのクソババア・・・バカも過ぎるぞ・・・」

「もちろん抗議文を送つてある、横須賀から謝罪に挨拶も来ると連絡が来た。今日辺り来るそうだ。後は私が本営からの処罰を待てば・・・」

「ならん!!!提督!今回の事故、全て横須賀の老害が悪い!提督、私が取り次いでやる。貴様が罰を受ける必要などない。太平洋の英雄長門が保障する。あのバカを提督の座から引きずり降ろしてくれる・・・!」

「ま、待て長門さん!あまりことを荒げては・・・」

「何を言う！私だけなら老朽艦が沈むだけで済むもの！新進気鋭の水雷戦隊の一人が失われかけたのだ!!これを怒らず抑えろという方が無理だろう!!」

「お、落ち着いてくれ長門さん！」

「どけ提督！私が直接本営と掛け合う！なに！奴を叩きのめすだけの材料は既に揃っている！取り返しのつかないことが起こる前に・・・」

「貴女が動く必要はないわ、長門。」

「誰だ！」

ドツクの入り口で声が聞こえて振り向けば、大湊の艦娘に囲まれ、涙でぐずぐずになった夕立を抱いた旧友が立っているではないか。頭に登った血がどんどん収まっていく。

「び、ビス子!?!」

「久しぶり・・・っていうほどじゃないわね。グーテンターク長門。」

「何故ここに・・・」

「うちの提督が迷惑をかけたからね・・・代理で来たわ。」

「代理だ?!?直接来いと言ってやれ！」

「それは無理ね。なんてったつてもう本営に召喚されているもの。」

「なに・・・?」

—————

—————

—————

—————

—————

「はい、長門さん。お茶です。」

「ああありがとうございます。」

「ビスマルクさんにはコーヒーを。」

「 Danke、大淀。」

場所を執務室隣の客室に移し、提督、大淀、ビスマルク、私と会談だ。あ、夕立は私に引っ付いてずっとすんすん言っている。すごいちからだ。大戦艦パワーでも引き剥がせなかった。それにこの方が頭に血が上らなくて済む。熱くなると夕立が泣くからな。

「じゃあ改めて。横須賀、第一戦略艦隊旗艦ビスマルクです。本日は  
県三奈子准将の代理で来ました。」

「大湊警備府提督、渡辺博則だ。」

「この度は、こちらの不手際により多大なご迷惑をおかけして大変申し  
訳ありませんでした。損害はこちらより全て補填致します。」

「承知した。」

「・・・まったく、大侵攻の叩き上げはこれだから困るわ。優秀な作戦  
立てるだけで提督になれるくらいなら私がやってやるわよ。」

「教え子なだけに、なんとも複雑です。」

「ぶっちゃけ、どうだった？あいつの教練は？」

「はは、現場に出て学んだ物の方が多いです。」

「でしようね。バカだもの。あいつは。」

「夕立く泣き止んでくれー！ほら、ドーナツだぞー」

「いばばいっばいっいっく」

「夕立くー！」

全然泣き止んでくれない・・・話はビス子がつけているみたいだし、  
私はこっちに専念するでいいか。ドーナツがダメなら何がある・・・  
？

「お、大淀、他に御菓子はあるか・・・？夕立が好きそうなものを、」

「だめです！みんなに心配かけたんですから！しばらく引っ付かれて  
てくださいー！」

「お、大淀おー！」

「後でみんなも待ち構えていますからね。」

「・・・ビス子お」

「知らないわよ。私はその子の好みなんてわからないし。」

「しよ、しよんなあ・・・」

「ははは・・・ビスマルクさん、あなたの大切な御友人を傷つけてしま  
い、こちらこそ大変申し訳ない・・・」

「いいのよ。今回は全面的にこちらが悪い。陸奥なんかは卒倒して艀  
装もないのに爆発したわ。」

「なにい!?む、陸奥は無事なのか!？」

「大丈夫よ。心配いらないわ。起きたらあいつを張り飛ばしたし。」

「むむむ・・・そんな暴力的な子に育てた覚えはないのだが・・・」

「ぼおーいゝゝいゝゝ！」

「あわわわす、すまん夕立！」

あわわわわすごい拗ねてるぞ。こりやしばらくこのままだなあ・・・

「渡辺提督？そちらでの長門はどう？」

「長門さんは、みんなに良くしてくれています。長門さんが来てから、俺に長門さんの教練はいつ始まるんだ、自分は見てもらえるのか、長門さんの好きなものはなんだというの子はひっきりなしです。うちの警備府はさらに明るくなりました。」

「そう・・・横須賀はね、昔の長門を実際に知っている人が多いから怖がって近寄らない人が多いわ。極一部の人しか関わりを持つともしなかった。大湊に行く少し前くらいから長門がみんなに歩みより始めたから少し解消したけど。それまでは長門自身も暗かったしね。」

「そうでしたか。」

「此方に来て様子を見たけど、長門はほんと幸せそう。いつのまにか娘みたいなのもいるみたいだしね。」

「ぼおーいゝゝいゝゝいゝゝいゝゝ!!!うあああーん!!!」

「あわわわわ！て、提督！ビス子！すまん！少し出る！夕立が本格的に泣き出した！」

「ああ、もう下がっていいよ。」

「私も、気にしなくていいわよ。」

「恩に着る！よおしよし！夕立い！お散歩行こうな！」

「びやああああん!!」

これ以上邪魔したらいかん！当事者がいないのもあれだが、今は夕立だ。夕立の如く涙流されたらたまらん！いい子だから泣き止んでくれー！

「あんな長門を見れるなんて思いもしなかったわ。」

「楽しい人ですよ。ほんとに。」

「あいつも、好かれてはいなかったわ。一生懸命だったことだけは評

価するけど。もともと提督に向いてなかったのよ。運が悪かったのね。」

「バアちゃんも歳が歳だったしね。引退するにはちようど良かったのかなあ……。」

「行くのは牢獄だけどね。」

「は?。」

「今頃裁判よ。罪状は国家反逆罪。」

「なに……?!。」

「あいつは特に長門を怖がってたわ。艦娘が力を持ちすぎること危険視していた。今回の艦装の取り違え、あいつが長門を始末するためわざとやったのよ。気づいた時には遅かった。そんな大胆に始末しようとするなんて思わなかったし……日本の英雄を謀殺し、日本を混乱に陥れようとしたから国家反逆罪。」

「……!。」

「そしてあいつの元で健造された艦娘のいくらかはあいつの思想に染まってる。大侵攻を生き抜いた艦娘を始末しようとしていたみたい。」

「それでは……!。」

「それももう平気よ。私の仲間が片付けてくれてる。大侵攻を生き抜いた艦娘っていうのは普通の艦娘とはひと味もふた味もちがうのよ?。」

「そう、ですか……良かった。」

「貴方のことも調べてある。あいつの教え子だからもしかしたら、と思ってるね。」

「そ、それは……俺がバアちゃんと共謀していると……!?!それはありえない!俺はどんな艦娘でもその子の幸せを……。」

「ああ、安心して。教え子達は利口みたいだし、あいつバカだから人望もなかったのね。一人でやろうとしてたみたいよ。こつちも安心してるわ。」

「……そうでしたか、怒鳴って申し訳ない。」

「こちらこそ、失礼なこと言ってごめんなさい……。」

「いや、そう思うのももつともだ。」

「・・・私が、私達がこうして動くのはね。理由はひとつだけ。」

「・・・。」

「長門を、幸せにしてあげたい、それだけよ。」

「・・・わかりました。」

「長門が望まぬ戦いに赴いた時、貴方も覚悟しなさい。」

「誓いましょう。決してそのようなことはしない。」

「ありがとう・・・それだけ聞けただけでも充分だわ。」

やあ諸君。長門だ。難しい話はビス子と提督に任せた。私は夕立をお世話しないと。泣いたまんまだとなんとも居づらい。大湊の警備府の中、中庭を夕立とお散歩だ。夕立は引っ付いたまんまだが。

「ううー！ぐしゅー！」

「ごめんな夕立・・・心配をかけたな・・・」

「お姉さん、死んじゃったかと思っただけ・・・」

「大丈夫だ。戦艦が簡単に沈むか。」

「怖かったっばい・・・」

「本当に、すまん。」

ああー！夕立の顔、涙でぐしゃぐしゃだけど可愛いなあ！だけでも二度とこんな顔をさせんぞ。絶対にだ。夕立を泣かす奴はぶちのめしてやる。今決めた。ん？今決めたから今私をぶちのめさなきやならんか。覚悟しろ私！

「・・・びすこは、夕立のこと、お姉さんの娘みたいって言ってたっばい？」

「ん？もうビス子と仲良くなったのか。あいつは言葉はキツイが仲間を絶対に裏切らない。約束も守る。気高く美しい奴だ。私の大切な友。」

「お姉さん、は夕立のママ？」

んはああああああ!!!長門、轟沈。ママ、か。ママ。いい。実に、いい。ママ。世のお母さん、私は元気です。

「ママ？」

「はっ！ゆゆゆ、夕立！ももももういつかい！」

「ママー！」

んほおおおおお!!!戦艦が簡単に沈まぬと言ったな。あれは嘘だ。戦艦は沈む。しかも丘でだ。しかしこれは本望だ。良い艦娘生だった。

「ママは、夕立を守るっばい。」

「・・・ああ。」

「ママにひどいことするやつは許さないっばい。だから夕立は強くなる。」

「・・・そうか！じゃあ私より強くならねばな！」

「ママより強く？わかったっばい！」

そういえば今一瞬ぽいがなかったな。まあいいか。

「あれ・・・長門さん。」

「ん・・・？あ、綾波・・・！」

中庭のベンチにいと、軍手とエプロンをしてスコップを持った綾波、私を見つけるとキツと顔を律してこっちに向かってくる・・・あわわわわやべえよ・・・やべえよ・・・まじおこの顔だよあれ。

「長門さん！」

「はいい！」

「もうお怪我は大丈夫なんですか!?こんなところで平気なんですか!?!」

「んえ!?は、はい！」

「本当に？」

「ああ、ほ、本当だ！戦艦は簡単に沈まん！」

「馬鹿言わないでください！戦艦でも沈むんですよ！」

人差し指を立ててぷりぷりと怒る綾波可愛い。じゃない、妹を危険に曝してしまったんだ・・・

「あ、綾波・・・私は君の妹に、ひどいことをしてしまった・・・本当にすまなかつた・・・」

「ひどいこと？」

「私の落ち度だ。本当にすまなかつた・・・」

「・・・爆発のことですか？あれはビスマルクさんから聞きました。横須賀の提督が悪いって。長門さんは何も悪くないじゃないですか！」「しかし・・・」

「もう！自分が悪くないのに謝ってしまうのは謙虚だと言われますがなんにも良いことじゃないですよ！」

「あ、ああ。」



「夕立ちちゃんは長門さんが入渠してる間ずっと泣いてたんですからね!!だから謝ることが違うんじゃないですか!」

「そ、そうだな。」

駆逐艦とは思えぬ迫力。これが長女の貫禄か。いや、私も長女だけれども。妹がたくさんいるところなるのか。

「はい!」

「へ?」

「へ?じゃありませんよ!」

「あ、ああ。綾波、心配かけてすまなかった。」

「えへへ、みんなほんとに心配してたんですよ。睦月ちゃんなんか、もう親子丼食べられないにやしい!?なんて泣いちゃって。」

「綾波、今のにやしいって可愛かったからもう一回。」

「ええ!?!もう!」

綾波が顔を真っ赤にしてチョップしてきた。・・・今までのどんな砲撃より効いた気がする。

「それなら、早くみんなにこの長門が復活したと回ってやらねばな!戦艦の有無は士気に関わる!」

「そうです!今ならみんな食堂でおやつのお箸ですよ。私は花壇のお掃除してから行きますね。」

「わかった。」

「ママ、今日のおやつは杏仁豆腐っばい。」

「そうか!杏仁豆腐は好きだ。」

「・・・へ?ママ?」

—————

—————

食堂に入った瞬間、みんなから集中爆撃にあった。体はもう大丈夫なのか。心配かけて!と騒がしくなってしまった。曙は横須賀の提

督に怒り心頭でファツキン提督と宥めるのが大変だった。天龍に至っては夕立より泣いてた。そのまま過呼吸になってドツクに運ばれた時にも冷や汗が出た。暖かい、場所だな、と不覚にも涙が出てしまつてまた騒がしくなり、おやつにありつくのは結局大分経つてからだった。

「ママ、強くなるにはどうしたらいいっぽい？」

「ママ!？」

「長門さん!どういうこと!阿賀野気になる!」

「ああビスマルクがな、娘みたいだと言つてからこうなつた。」

「いいなあ阿賀野も長門さんの娘になりたい!」

「ちよつと阿賀野姉!ごめんなさい長門さん!」

「はっはっは!すまん阿賀野、母など柄ではないから一人で勘弁してくれないか?」

「夕立ちちゃんずるーい」

「えへへ夕立のママだもん!」

ママの件で娘候補がいつぱい出来てしまった。子沢山なのはいいことだ。だが旦那がいないな。

「長門ー?いるかしら?」

「おおビス子。話は終わったのか?」

「ええ。もう安心よ。」

「敬礼!」

「いいわよ阿賀野、今は。」

「ご、ごめんなさい。」

「ちようどいい。ビス子、夕立が私をママと呼ぶからお前私の旦那にならんか?」

「ちよーっ!?!ちよちよちよままま待ちなさいよ!どどどどどいな&

\*@\$☆★#%??!:\$!?!」

「わはははは!冗談だ!」

「ししし心臓に悪いわ!」

「ほら、ビス子も食べる。杏仁豆腐だそうだ。」

「い、いただくわ・・・」

「間宮！」

「はい！今持って行きますね！」

ビス子が私の隣に座って真つ赤な顔を沈めるために手で扇いでいる・・・お前そんな顔も出来るんだな。覚えておこう。こんど何かに使えそうだな。

「びすこ、ママは渡さないっばい。」

「いいわよ。好きなだけ持っていきなさい。」

ビス子の杏仁豆腐が運ばれてくるとみんなが我先にと集まってくる。二つ名こそ無いもののビス子も私と並ぶ英雄だ。みんな話を聞きたいらしい。

「あがの、夕立が強くなるにはどうしたらいいっばい？」

「そうねーっばい食べてっばい寝て。大きくならねえとね。そうしたら阿賀野が訓練してあげる！」

「わかったっばい。夕立、早く大きくなるっばい！」

「ビスマルクさん！ビスマルクさんも魚雷が撃てるのよね！ドイツの魚雷ってどんな感じ？」

「そうね・・・威力は日本のに劣るけど、生産性等はこっちが上ね。帝国の科学力は伊達じゃないわ。」

「へー！長良型にも装備出来るかな!？」

「鬼怒！日本の艦娘なら日本のを使いなさいよ！」

「えー！五十鈴姉固いなー良い魚雷使った方が戦果もきつと出るよー？」

「あのねえ・・・」

「私も使ってみたいかな」

「ちよつと！由良まで!？」

「いいわよ！帝国の兵器が使いたいなら武装援助出来るように計らってみるわ！」

「やったー！」

「あ、曙ちゃん、そろそろ落ち着こ？ね？」

「クソ・・・これだから提督ってのはクソなのよ！ぐぬぬぬ・・・」  
「まったく、綾波を見習いなさい。」

「（；；）潮、敷波、今の曙に言葉は届かぬ。」

いつもの賑わいが戻って来たようで安心した。夕立も以前よりみんなの話についていけてるようで嬉しい。ああコーヒーが美味しい。

「ねえ、長門？」

「ん、どうしたビス子。」

「貴方、今、幸せ？」

「そうだな。幸せかもしれん。これ以上を求めるのはおこがましいくらいに。」

「そう、なら、いいわ。」

「戦いすぎて、忙しすぎて忘れていたものを取り戻した気分だ。お前も幸せか？ビス子。」

「ええ、幸せよ。毎日が楽しいもの。」

「そうか。なら、良かった。」

## 二章 私と大戦艦

page 17 私と監査

やあ諸君。長門だ。一悶着あってから数日が過ぎた。私はこの掃除洗濯家事食事と忙しい日々をおくつている。この間に、何度か北方海域に水雷戦隊が緊急出撃していったが、大事にはならなかった。これだけ深海棲艦が静かだと少し恐ろしくもある。

「ふむ、あのバカは・・・もう終わりか。」

「ママ、なに見てるっばい？」

「電報だ。」

例のあいつは・・・もうサヨナラ！したらしい。粗探しすると出るわ出るわ黒いのっばい。ビス子が電報で教えてくれた。

「どーも、せんかん、さん、びすまるくです。あいつは、だいほんえい、さん、の、こたいかいぐんからで、ばくはつしさん？よくわかんないっばい。」

「そりやあ暗号だからな。」

今の私の装備を紹介しよう。赤城からの餞別のエプロン、おんぶひもで背負われた夕立、右手に大量の洗濯物、左手にも洗濯物だ！汚れを一網打尽にして完全勝利待ったなしだ。

「さて張り切って洗濯だ。間宮！由良！」

「はーいー！」

「はい。」

「物干し竿を用意しろ！この長門に続け！」

「はーいー！」

「はいー！」

間宮と由良に支えてもらい、物干し竿にどんどん洗濯物を干していく。圧巻の量だ。艦娘の数が違いますよ。庭にもりもりと物干し竿が増えていき、艦娘がたくさんいることがわかるな。

「次！」

「はーいー！」

「はいー！」

すばやい連携だ。流石、大湊の艦娘は練度が高い……ん？こつちに近づいてくるちっちゃな影が……あれは！

「ほっほっほ。」

「あら？お爺さんここは関係者以外立ち入り禁止ですよ？」

「警備員は確か今日阿武隈よね？何をしているのかしら」

「元帥閣下に敬礼ーっ!!」

「え!?!」

「っ！」

「ぽーいー！」

立派な白髭と立派な白眉を蓄えたこのお方は！間違いない！しかしどうしてここに……

「ほっほっほ。よいよい、長門。直れ。」

「はっー！」

「久しぶりじやのお長門。元気にやっとなか？」

「はい！山元提督！お久しぶりです！髭の艶がよくなりましたのでは？」

「ほっほっほ！毎日のヨーグルトは欠かしとらんからのお」

「奥様の厳命でしたからね。」

「あ、あのー……長門さん、こちらの方は……」

「元帥閣下とおっしゃっていましたが……」

「こちらは山元一元帥、海軍の頂点に立つお方だ。そして、私を建造したお方でもあるー！」

—————

—————

—————

—————

—————

洗濯を間宮と由良に任せて私は山元提督を客室にお連れした。そこには大淀と提督、扶桑が既に待っていた……おい、なんで迎えにいかないんだ。

「ほっほっほ。渡辺君。わがママを聞いてもらってすまんのお」

「いえ、元帥閣下。長門は如何でしたでしょうか？」

「ふむ、楽しくやっているようで安心した。」

「山元提督、いらっしやるならば連絡してくれば歓迎しましたのに。」

「おや？長門がこちらに移籍したから、監査に入ると連絡が行っている筈だかの。」

「え、あれは中将閣下がいらっしやると・・・」

「まあー中将も元帥も変わらんじやろ！ほっほっほう！」

「提督うー！」

「いや、長門さん！待ってくれ！俺も知らなかったんだ！拳！拳！拳！まってー！」

「ぽーい！」

「ほっほっほ！長門、最後の作戦で横須賀をあやつに渡して以来かのお。」

「そう、ですね。しかしあいつは・・・」

「わかっておる。あやつも、日本の未来を憂いてのことだったんじや。

あの大侵攻で、深海棲艦だけではなく、艦娘の恐ろしさというのも知った。それ故じや・・・まあわしの長門を葬ろうとしたんじや。それなりの罰はかぶってもらったからの。二度と日の光も浴びれんし、地面に足も付けられんじやろ。」

「恐ろしいお方だ。まったく。」

「して、長門。随分愉快な格好をしておるのお」

「あ、失礼しました！」

「よいよい。背中のお嬢ちゃん、ビッグセブンの背中はどうじや？」

「すっごくおっきいっぽい。」

「ゆ、夕立ちちゃん・・・！」

「ほっほっほ！そうじやろう？長い間、この国を背負ってきた背中じや。今はその大荷物を若い世代に託したんじやな。その背中、独り占めとは羨ましいのお！」

「ママ、お疲れ様っぽい？」

「ああ、ありがとう、夕立。」

「ママ！ママと来たか！ほっほっほっほ！！見ろ扶桑！もたもたしてる間に長門は子供をこさえておるぞ！」

「提督？」

「お、おほん！」

「扶桑も、久しぶりだな。」

「ええ、長門・・・本当に。」

このお方、山元元帥は妖精さんにより人類に艦娘がもたらされて幾ばくか過ぎた時、提督による建造が行われ日本で初めての戦艦型の建造に成功した提督である。その際に生まれた戦艦は扶桑、伊勢、そしてこの私長門だった。戦艦が建造されて日本は深海棲艦に対して決定打を手に入れて海域を取り戻していくことになる。この扶桑もそのうちの一人だ。

「お前とはソロモンでの共同作戦以来だな。」

「ええ本当に。あれは恐ろしい戦いだったわね・・・」

「昔の話はやめよう。また会えて嬉しいぞ。」

「私もよ。貴方もその格好を見ると戦線を離れているのね・・・」

「貴方も・・・ということとは。」

「ええ、私も。今は本営で提督の補佐をしているわ。」

「伊勢のやつはどうしているかな。」

「佐世保で、暴れまわっているんじゃないかしら。貴方のその格好を見たら伊勢も心変わりして少しは大人しくなってくれるんじゃないかしら？」

「無駄だろう。あいつには刀が似合いだ。」

「そうね。」

「ほーいー！」

「あははすまんな夕立、この人は扶桑。私の古い友人だ。」

「ふそー？よろしくっぽい！」

「よろしくね夕立ちちゃん。でもあなたとつてもちっちゃいのねえ。長門ママは意外と泣き虫なところがあるからしっかり守ってあげてね？」



「ほーい！ママは夕立が守るっほい！」

「こんな若い艦娘、見たことないわ・・・」

「ドロップ艦・・・らしい。」

「・・・あら」

「元帥閣下、して今日は中将閣下に変わりうちにいらっしやつた理由とは・・・?」

「ひとつは長門の顔を見たかった、じゃがもうひとつはな・・・特命を持ってきたからじゃ。まだ極秘ではあるが、大和型の船魂が確認されたからじゃ。」

「大和型だと・・・!?山元提督！それは本当か！」

「長門！声がでかいわい。」

「し、失礼しました・・・」

「そ、そのような重要事項を一介の佐官である私が耳にして良いのでしょうか・・・」

「て、提督！どぞどうしましょう!?私も聞いちゃいましたあー！」

「落ち着け大淀！閣下の前だぞ！」

「この大和型、通常の建造ではドックが耐えきれず、建造を失敗してしまふ。それどころか建造ドックも損壊してしまふ。」

「其れほどまでに強力な艦娘のですか・・・！」

「そうじゃ。そこで、大和型の建造にも耐えうるドックを開発した。その試験運用をしてもらいたい。わしの長門を御す君なら任せられるじゃろうと思つてな。」

「勿体なきお言葉です。」

「おほん！大湊警備府提督、渡辺博則大佐に大本営より命ずる。大型建造を行い、大和型戦艦を建造せよ！」

「「はっ！」」

「ほい！」

「扶桑、書類を。」

「はい。」

大和型・・・大和型だぞ！日本人なら知らぬものはいないとされる大戦艦大和型だ！大型建造、実に楽しみだ！

「あ、長門や。大和型が出たらちやんと教育するんじやぞ。」

「は？」

「なーにすつとんきような顔しとるんじや、お前はここの新人教育担当なんじやろ？」

「あ。」

すつかり忘れてた。

## file 1 洗脳艦娘

「プリンツ、レーベ、マックス、拘束したやつらはどんな感じ?」

「今のところ大人しくはしていませんお姉様。」

「思想に同調したからなんて聞いてたけど、大したことなかったね。マックスと二人で全員捕まえられたよ。」

「でもちよつと不気味ね。イメージというか先入観があったから。」

「そう、ユーは?」

「引き続き潜ってもらっていますお姉様。」

「そう、あいつの性格上、そんなに多く艦娘は抱えてないと思うから。様子を見て戻ってくるように言つて。」

「はい。」

「それじゃ案内してちょうだい。」

横須賀のどこか・・・地下か。ドイツ艦が勢揃いしている。四人が進むと金属の艀装の靴音がよく響く。

「ここです。ちよつと不気味ですが、実力は大したことありません。お姉様なら素手でも制圧できます。」

「わかった。開けなさい。」

重く暗い扉を開けると鎖に繋がれ吊り下げられた、四つの同じ顔。本来のその艦娘に見られる快活さ、明るさは見る影もない。

「グーテンターク、金剛達?」

「・・・。」

四人の金剛のうち一人が顔を上げるが、何も物言わない。

「あら、どうしたの暗い顔して。」

「日本は、もう終わり、あの狂暴な戦艦をのさばらせて、日本は艦娘に滅ぼされる。」

「ふんっ!」

「ぐぎやああああ!」

「あーあ。余計なこと言わなきゃいいのに。」

金剛の一人が口を開いたらビスマルクが拳を顔面に叩き込む。マックスは以前見たマンガで顔を殴られ前が見えねえという台詞を

言うシーンを思い出した。だがあれはギャグマンガ、こちらは現実である。

「こいつは会話できないわね。次。」

「……。」

「起きなさいよボンクラ！」

「ひっ……ぐ、ぎ……！」

「プリンツ、やりすぎ。四人しかいないんだから。」

「ごめんなさいお姉様。」

「ぐ……狂暴な戦艦の仲間も、また、狂犬か……」

「ふんっ!!」

「ぎい!？」

もう一人、前が見えなくなった。

「あーあー友人と同じ顔を殴るっていうのは気が引けるわね。」

「お姉様、こいつらはあいつの思想に同調、いえ、あいつに洗脳されて建造されたので私達に良くしてくれている金剛さんとは違うものですのでご心配なく。」

「あらそう。いいことを聞いたわ。」

かつかつと金属音を響かせ、三人目の元へ近づく四人。

「さて、貴方はお話できるかしら？」

「これ以上何を話せというの……仲間はもういない。提督は逮捕された。何も残ってないわ。」

「そうね……何が聞きたいレーベ？」

「あいつがなぜ金剛を四人も建造するなんて頭のおかしいことをしたのか聞きたいな。」

「だ、そうよ。」

「提督は、建造されてすぐに、提督に愛情を向ける私達が扱い安かったんじゃないの？」

「だと思った。面白くない答えだね。」

「そういえば、あいつは将来艦娘を完全駆逐するって考えがあったみたいなんだけど、貴方達は艦娘を始末するために建造されたんでしょ？自分も艦娘なのに。」

「別に、最後に一人始末する艦娘が一人増えるだけよ。」

「あ、そう。如何にも自分に酔った考えでつまらない。やっぱりもう聞くことはないわね。」

「お姉様、もう終わりにしちゃうんですか？まだ本当に仲間がいないのかはつきりしていませんのに。」

「いいわよ。どうせあいつのガバガバな計画だし。元々あいつは艦娘を信頼するなんてことしなかった筈だしバカだから人望もなくて人間の仲間も少ないだろうしね。艦娘金剛の提督に対する愛を利用するクズババアだし。あんた達も生まれた世を怨むのね。」

「ぐ……」

「ぎ……ああ……」

「やはり、艦娘は道具でなければならぬ……こんなことが……」

「解体すると足が着くわね。本営のおじいちゃんに頼みましょうか。今度スイスの高級ヨーグルト送つときましよう。あーでもそうしても足が着くかなあ……」

「まあ私は賛成です！お姉様いいお考えです！」

「ビス、私もヨーグルト欲しい。」

「私も。」

「こんな、こんなことが!!!」

鎖を引きちぎらんばかりに三人目が目を見開いてビスマルクに迫った。しかし届かず、弱った足がもつれて転がってしまふ。

「艦娘は!!提督の兵器でなければ!!!道具でなければならぬのに!!!お前達のようなロートルが!!!蔓延っているは日本に未来はツ……ぐぎや!?!」

ビスマルクの鉄拳が三人目の顔面に力強く叩き込まれ、壁がひび割れるほどの勢いで衝突し、動かなくなる。

「艦娘はね、道具よ。今も昔も、そしてこれから。でも道具にも愛情もって丁寧扱ってやらなきゃね。それが出来ないやつは総じてろくでなしよ。あんた達の提督ってやつは道具扱いも出来ないバカだった。」

靴音を響かせて座って項垂れたまま動かない四人目の元へ行く。

「……。」

「ひっ……ひっぐ……私の行くヴァルハラでは誰も……誰も待つていてくれないデス……ひっぐ……そもそも私は……ヴァルハラに行けるのデスか……提督……私は……提督に……ひっぐ……愛して欲しかった……だけなのに……。」

「……。」

「こいつは、洗脳が薄い……？」

「……。」

「お姉様どうしますか？」

「この子は、洗脳が解けるか、やってみましょうか。私が面倒を見る。」

「お姉様……！」

「うーん……？金剛が二人っていうのは面倒なことになりそうだし。そういうばおじいちゃんに艦娘の完全武装解除って聞いたことあるわね。それ頼んでみましょうか。」

「お姉様！流石お優しい！」

ビスマルクが腕の鎖をひとつ外すと、四人目を立ち上げらせる。

「聞きなさい、金剛。これから私があるあなたのお姉様よ。それを理解して、そうして生きていくのを受け入れるならここから出して、許してあげる。あの提督のことは忘れなさい。新たな提督と、素敵な出会いをするの。いい？」

「……。」

小さく頷いた四人目の金剛は鎖を外されプリンツに連れられていった。残ったビスマルク、レーベ、マックスは暗い室内を見渡しながら一考する。

「ねえビス。」

「なにマックス。」

「こいつらは私達に任せてもらってもいい？」

「ダメよ。」

「ええ……。」

「こいつらは恐らく実戦経験はおろか、艦娘基礎訓練もしていない。」

何もしなくなつて、そのうちここはただのオイルにまみれた部屋になるわ。」

「そうか、黒い海・・・」

「よく知ってるわね。レーベ。」

「そりやビスのことだからね。調べたよ。」

「黒い海？黒海のこと？」

「ふふ、マックスは調べておくことね。」

「仲間外れ・・・」

「マックスが不勉強なのが悪いよ。」

「ぐぬぬ・・・レーベ！」

三人も部屋を後にして、靴音を響かせて遠ざかっていった。暗闇に包まれた部屋でばしやりと静かに一回水音が響いた。

やあ諸君。長門だ。とうとうココ大湊の工廠を大型建造用に改装する。さすがの資材量だ。警備府の敷地の半分が資材で埋まった。夕立があぶないところに行かないように。おんぶはかせせない。

「大本営より派遣されてきました！本日より大湊の所属になります！工作艦の明石です！よろしくお願いします！」

「大湊警備府提督の渡辺博則だ。よく来てくれた。歓迎する。しかし・・・すさまじい量ですなこの資材は・・・」

「そうですねーまだ実験段階なのでドックの改装資材の他に研究用の機材とかもありますので。」

「なるほど・・・。」

「ところで提督。」

「なんだい？」

「あそこでこつちを見ている面白い格好の怪しい人は誰なんでしょうか・・・」

ん、明石がこつちを見ているぞ。何か用だろうか。運搬なら任せろ鉄骨の二、三十本など軽く運んでやるぞ、

「私に何か用か？」

「うえっ?! えつとお・・・」

「あ、明石君、紹介しよう。我が大湊唯一で最強の戦艦長門だ。背中には夕立だ。」

「長門戦艦一番艦、長門だ。資材の運搬なら任せろ。」

「ぼいっ！」

「あ、あはは、貴方が・・・よ、よろしくお願いします・・・工作艦の明石です・・・えつと、ドックの工事は私と妖精さんで行うので・・・」

「・・・そうか。」

「(めっちゃしょんぼりしてる。)」

必要ないなら仕方がない。大人しくしていよう。エプロンを締め直して食堂に向かうとしよう。今日の食事当番は私だ。親子丼を作ろう。



「今日はママのお昼ご飯っぽい?」

「そうだ。親子丼だ。」

「いっばい食べるっぽいー!」

「うむ。そうするがいい。」

そういえば私が歩くとのしのと音がすると卯月に言われた。まあ・・・体格の差だから仕方がないな。身長2mを越しているとそりゃあ足音も存在感のある音になる。これからは軍艦マーチでも流しながら練り歩いてやるか。

「間宮!いるか?」

「はい長門さん!お昼ご飯の用意ですね?」

「そうだ。材料を頼む。」

夕立を降ろし、お子様椅子に座らせる。そして手を洗おう。台所に入るならば常識だな。肘までしっかり・・・

「長門さーん!」

「ただいまぴょーん!」

「お腹すいたあー!」

「すいたあー!」

お昼の時間が近くなると待ちきれない駆逐艦達が集まってくる。特に睦月、卯月、皐月、文月はいつも一番乗りだ。

「おいおいお前達、まだ速すぎるぞ?」

「待ちきれなくてきちゃった!」

「それならばまずは手を洗ってくるんだ。いちごがあるからそれを食べ待っていなさい。」

「やったあー!いちご大好きぴょん!」

「あ!長門さんまたですかあ?もー駆逐艦には甘いんだから!」

「む・・・大丈夫だ。みんなに甘いぞ。」

「そういう問題じゃありません!」

怒られてしまった。いいじゃないか。お昼ご飯が食べられなくなるくらい食べさせるんじゃないし。

「夕立もいちご大好きっぽい!」

「わかった。ちよつと待ってるんだ。」

夕立の手も洗わないとな……だっこして椅子から持ち上げると、ん？何かがぼとりと……

「あ、落っこちちゃったっばい。」

「爆雷……!?夕立！艦装は危ないからちやんとしまっておきなさいといつも言ってるじゃないか。」

「ごめんなさいっばい……」

「ほらお片付けする。」

「ん……ぽいっ！」

ちつちやな煙とともに爆雷が消える。もう驚かなくなつたがいたいこれはどういう原理なのだろうか。謎は深まるままだ。

「手え洗ってきたにやしー！」

「わーい！」

「いちごいちごー！」

「まっつてえー！」

「よし夕立も今手を洗うから少し待っててくれ。」

夕立の手をあらつて、お子様椅子を睦月達の席まで移動。そして速やかにいちごを盛りつける！完璧だ。

「待たせたな！」

「いただきますあーす」

「いただきますぴよん！」

「いただきます！」

「いただきますー！」

「いただきますっばい！」

ふむふむ……美味しそうに食べてるなあ〜ああ〜駆逐艦はいいものじゃあ〜

「はれえ長門さんは食べないのお？文月の一個あげるねえ！」

「む！そうかありがたくいただきます！」

「はい！あーん！」

「……もぐ。美味いぞ文月！」

「えへへ……」

……はっ！そういえばお昼の用意をするのだった!!!いかんいかん。

文月で悟りを開くところだった。・・・? 悟り・・・小五口り・・・

「長門さんどうしたぴよん?」

「宇宙はここにあり」

「!?!?!」

「んん!!なんでもない。さて私は厨房に戻るぞ。すまないがお昼が出来るまで夕立を頼む。」

「わ、わかったにやし・・・」

—  
—  
—  
—

いつも通り大量の親子丼を作った。みんないつぱい食べるんだぞ! っと思ったら一人だけ食が細い子がいるな。いつもはみーんな三回くらいオカワリするんだが・・・心配だ。何か困っていることでもあるのだろうか。

「・・・」

「ママ?」

「ん、すまないな。あーん。」

「ぽいっ!」

「・・・」

それぞれが挨拶をしてデザートを頼むなり、紅茶やコーヒーなどで一休みしている中、その子はひとりだけ静かに食堂を出て行った。・・・むういつもはみんなと一緒に仲良しなのに・・・喧嘩でもしたのか?」

「・・・間宮、すまんが夕立を頼む。」

「え、あ、はい。」

「おやつの中には戻る。」

「結構かかりますね・・・わかりました。」

「すまん。」

「……。」

ぼんやりとドックの工事現場を見つめるその背中のはかの大侵攻で見た、先の見えぬ不安に怯える背中とよく似ていた。そしてそのような雰囲気を出す艦娘は例外なく、帰ってこなかった。私はそれを幾度となく見過ごしてきた。変わりはいくらでも補充されるからだ。しかし今は時代も違えば艦娘のあり方も違う。2度と見捨てるものか。「どうしたんだ。」

「……！長門、さん……。」

「工事現場に近づいたら危ないだろう？」

「これ……ドックの改築なんですよね……。」

「そうだ。試験的に新しい建造システムを導入する。」

「それで、新しい艦娘が出来るんでしょうか？」

「そうだな。より大きな、より多くの船魂を召喚し建造することが可能になるだろう。」

「長門さん……長門さんは艦娘ってなんだと思いますか？」

「……艦娘は兵器だ。戦う道具だ。」

「……道具、ですか。」

「ああ。どうしても抗うことの出来ない壁がそこにある。」

「……悲しい、ですね。」

「そうでもない。道具でもこうして心があり、自らの意思で歩き、自らの意思で選択することが出来る。悲しい存在だと言うならそこから脱却する道を進むことも出来るのだ。」

「ふふ……流石、長門さんかっこいいですね。この新しいドックを見て艦娘ってなんなんだろうと思ってたんですけど、なんかすつきりしました！」

彼女は普段の明るい表情を取り戻してすこしほっとした。しかしだ。この長門の目はごまかせない。悩みはそれだけではないはずだ。

独特の雰囲気は消えていない。徹底的に解消してやろうじゃないか！

「そうか・・・だが、それで終わりって顔はしてないぞ・・・如月。」

「わかっちゃいますか・・・？」

「・・・何があつた。」

「・・・。」

「黙っていたらわからないぞ如月。私は如月の味方だ。この長門に全て任せておけ！」

「・・・長門さん、あの・・・うう・・・。」

「大丈夫だ。泣くほど辛かったか・・・よしよし。」

「長門さん、長門さんは・・・。」

「うむ。どうした？」

「言葉を・・・言葉をしやべる深海棲艦を知っていますか・・・？」

やあ諸君。長門だ。如月から、言葉話す深海棲艦の話が出た。そんな、馬鹿な。鬼級、姫級の深海棲艦は大侵攻のあの戦闘で全て撃滅した。・・・新たな、鬼級、姫級が生まれたというのか。また、あの凄惨な大侵攻があるというのか。

「な、長門さん・・・？」

「如月、その話を私以外の誰かにしたか。」

「ま、まだです・・・怖くて・・・誰にも・・・」

「今すぐ執務室に行つて提督に話すんだ。手遅れになる前に。」

「でも、あの時、私はぐれちやつて・・・怖くて、幻覚かも・・・」

「幻覚でもなんでもいい。海は怖いところだ。真実はいらん。事実だけ話せ。」

「ひぁ・・・はい・・・！」

いかん。非常にいかん。ここの艦隊では太刀打ちは出来ない。早急に対策を練らねば再び海が赤と黒に染まる。そうならないために私は戦つたのだ。

—  
—  
—  
—

「提督、いるか？私だ。」

『入ってくれ。』

「失礼します。」

「し、失礼します。」

執務室には改築の報告書類に埋もれる提督と大淀が忙しそうにしていた。申し訳ないが、更に忙しくなるぞ。

「どうした？如月まで。」

「夕飯の材料とかですか？間宮さんに一任しているので後で報告書を出してもらえればこちらは・・・」

「提督、緊急だ。」

「・・・何があつた？」

「如月。」

「は、はい・・・あの、先日の出撃で私が、はぐれてしまった時の話なんです・・・」

「アリユーション列島からの迎撃か・・・それで。」

「・・・うう。」

「大丈夫だ。如月。」

「あの時、辺りは濃霧に包まれていて、一人でいるときに、声を聞いたんです・・・」

「声・・・？」

「あれは、あの深く響く、ひつぐ・・・あの声は・・・間違いありません・・・！ひぐ・・・あれは深海棲艦の、声、でした！」

「・・・大淀、旗艦達と、天龍を集めてくれ。急げ。」

「はい！」

「うえ・・・うわああああん！しれ、しれいかあああん！！ごめんなさい！ごめんなさい！！うあああああん！」

「如月、気づかなくてすまなかった。よく勇気を出して言ってくれた。ありがとう如月。」

「うああああああん！」

「・・・言葉を発する深海棲艦など、鬼級と姫級以外ありえない、新しく生まれたか・・・」

—  
—  
—  
—

「第一水雷戦隊旗艦長良、入ります。」

「同じく第二水雷戦隊旗艦阿賀野入りします。」

「教練顧問天龍、入るぜ。」

「よく集まってくれた。」

会議室に集まった私含め七人、着席すると提督が口を開く。如月はまだ私の隣で小さくなっている。安心出来るかどうかはわからないが手を握ってやろう。びくつと顔をこちらに向けたがすこしはにかんでまた視線を戻した。

「集まってもらったのは先日のアリューション列島に出現した敵高速戦隊の迎撃作戦のことだ。長良、あの時の状況を教えてくれ。」

「え、あ、はい。深海棲艦出現の通達を受けて長良率いる五十鈴、名取、睦月、如月、弥生の水雷戦隊が迎撃に出撃、これを撃滅しました。帰投途中、濃霧に遭遇し如月が遭難するもすぐさま合流。他特に問題はなく、フタフタマルマルに帰投しました。」

「ありがとう。．．その濃霧に如月が巻かれた際に、敵上位深海棲艦の存在をにおわせるような現象が確認された。」

「．．．!?!」

「うそお．．．!」

「おい!?!どういうことだ!?!」

「如月、霧の中で何が起きた?」

「は、はい．．．」

「あらら．．．みんな、どこいったのかしら．．．おい!長良さーん!睦月ちゃーん!」

声は帰ってきませんでした。燃料も帰投分しかなくて、不安で、このまま遭難するんじゃないかって．．．怖かったです。

「おかしいわ．．．羅針盤も、めちやくちや．．．一応、魚雷と砲の準備を．．．」

(ススミタイノ…カ…?…?)

「ッ!だれ!!」

振り向いても濃霧で何も見えなかった。でも耳ではなくて全身で



感じた……

(イマイマシイ……ガラクタドモメ……)

「っひい!」

(サビシイナ……)

(ウツフフフフフ……!ヘイキヨ……ミンナ……)

「どこ……どこな……!?!みんな助けて……睦月ちゃん……!司令官……!」

霧の中でいくつもの声が聞こえてくる……物悲しくて、苦しくて、憎らしい……怨嗟に満ちた声……とても、とっても怖かったわ……「いたーっ!おーい!如月ーっ!」

「如月ちゃん!」

(……)

(……)

(……)

(……)

「あつ……長良さん……睦月ちゃん……!」

「いくつもの……!」

「如月、数は、わかるか?」

「たぶん……よっつでした……」

「うそだろ……まさか俺達が仕留め損ねたっていうのか……!」

「それはないだろう天龍。自分でもわかるはずだ。作戦後も掃討作戦を練って残党を撃滅したんだ。」

「じゃあどうして!!」

「……新しく、生まれたのだろう。」

「そんな……また、海が、大侵攻があるっていうのか……?」

「それはわからん!」

「姫級がいるってんならそうってことだろうが！」

「静かにしろ！」

しまった、私まで、熱くなってしまった・・・提督に声を荒げさせてしまうなど・・・

「長門さん、天龍。幸いまだ大きな動きはない。敵もあそこで如月を見たことを気づいているだろう。今はまだ、敵も動けないんだ。」

「わかったぜ、提督、今の内に叩くんだな？」

「焦るな。今の話を聞く限り上位深海棲艦の数は四体だ。大湊の戦力で叩くのは無理だ。」

「了解、了解！わーったよ！」

「長門さん、天龍・・・正直、うちの戦力でどこまで出来ると思う？」

「そうだなー偵察くら・・・」

「何も出来ん。出れば犬死にする。」

「な！おい長門!!」

「なんだ？」

「だから・・・」

「そうだな、第一、第二水雷戦隊合わせて私を撃破することが出来れば偵察は可能だろうが消耗は激しいことを覚えておけ。」

「あちやー・・・」

「ちよ、ちよっと！いくら長門さんでもそれは！」

「そうです！阿賀野達だって！頑張ってやってきたんだから！」

「・・・じゃあ、やってみるか？大湊の戦力の中で勝負になるのは天龍だけだろう。」

「やめろ、長門煽るなよ！長良と阿賀野もよせ！」

「・・・くっ」

「もぉー！」

「この事は大本営に報告、指示を仰ぐ。これより大湊警備府は戦力増強に方針を変更する。幸い、大型建造ドックも出来るしな。天龍は教練のレベルを引き上げ、防空と対潜に重きを置いてくれ。長門さんは・・・」

「私は、ここでの仕事は戦闘以外だ。それに努めるよ。」

「・・・変なこと考えないでくれよ。」

「ふっ・・・まるで私が変なことをしたみたいだな？」

「まあいい。このことは追ってまた連絡する。解散！」

――  
――  
――  
――  
会議が終わった後、私は如月を抱きながら長良と阿賀野を呼び止めた。

「長良、阿賀野。」

「なんですか？」

「さつきは・・・すまなかつたな。」

「・・・いえ、きつと大侵攻で上位深海棲艦と戦った長門さんだからこそわかることもあるんだと思います。」

「それでも、だ。すまない。」

「ロートルの私に出来ることは少ないが、やれることはやろうと思っている。何かあったら提督と私に言ってくれ。」

「はい！」

「ありがとうございます！」

「では、私は夕立の元へ戻る。二人とも、出撃の時は用心しろよ。」

・・・早急な戦力強化をしなければ、かつてのラバウルやショートランドのようになる。ドックの改築は二、三日で終わるだろうが・・・それまで何も無いといいがな。

やあ諸君。長門だ。今日は・・・特にすることがない。夕立は阿賀野に連れられ津軽海峡で訓練出撃している。ちなみに言うと、私は出撃出来ない。艦装は爆破されて修理中だし、横須賀に残されているはずの私の艦装は、ご丁寧に寧ろ壊された。ガツデム。提督代理のビス子が艦装を建造中だと言っていた。そのせいで大湊の私と横須賀の陸奥は身動きが取れない。

「・・・大淀。」

「なんででしょう?」

「湯飲みに紅茶を淹れるのはやめろと言った筈だが?」

「味は変わりませんよ?」

こいつ・・・私に喧嘩売ろうって言うのか。・・・いかんいかん。どうも如月の報告からそわそわイライラしてしまっただけ。それに胸がざわざわする嫌な予感が拭えない。胸焼けなら薬を飲めばいいんだが・・・食堂にあるのはせいぜい胃薬・・・いや胃薬でいいじゃないか。落ち着け私。

「びよーん!長門さーん!肩車してほしいびよーん!」

「ああいいぞ。よっ・・・と」

「うひょー!めっちゃ高いびよーん!」

「卯月は軽いな。ちゃんと食べてるのか?」

「長門さんにかかったらみんな軽い筈びよん。」

「それでも・・・そうかも。」

こういうとき無邪気に飛びついてくる卯月はいいものだ。素直に一緒に楽しんで遊べる。

「如月もずーっと背中にくっついておやつとかはいいのか?」

「・・・いらない。」

「じゃあ如月ちゃんのもうーちゃんがもらっちゃ、イダダダ!おしり突っつかないで欲しいびよん!いたっ!いたいいたい!」

如月は報告以降ずーっとくっついたままだ。娘が増えたみたいだな。よきかなよきかな。会議が終わった後、提督は阿賀野に本格的

に夕立の訓練を命令した。夕立もやる気まんまんだからいいが……  
怪我でもして帰ってきやしないかと不安だ。

「はっはっはっは！」

「あ、長門さん紅茶淹れますね。」

「せめてティーカップもってこいティーカップ。」

「長門さんのティーカップは高級なので触るの怖いです！」

金剛からもらったティーカップにはそんな秘密があったのか……  
というかそんな高級なものだったのか。知らなかったわそんなの。

「あー長門さん如月ちゃんはわかるけどどーしてうーちゃんまでお  
留守番ぴよーん？」

「それはうづきが寝坊したからだろう？ 弥生が帰ってきたらちゃんと  
謝るんだぞ。」

「てへぺろー」

「はっはっはっは！ 可愛い顔したって何も出ないぞー！」

「きゃー！ 早いぴよ……」

如月をくつつけたまま卯月をぶんまわしていると耳をつんざく警  
報が鳴り響いた。

『津軽海峡に深海棲艦出現！ 大淀を旗艦に酒匂、如月、卯月は準備がで  
き次第順次抜錨し訓練中の第二水雷戦隊へ合流せよ。繰り返す、津軽  
海峡に……』

「如月ちゃんっ！」

「わかってるわ！」

「卯月！ 急げ！」

「りようかいぴよーん！」

くつついていた二人が飛び降りて、大淀が両手に抱えて走って連れ  
て行く。私は……何も出来ない。とりあえずは見送ることは出来る。  
出撃ドックへ急ごう。

「提督！状況は！」

「なっ!?長門さん!?貴方は出撃出来ないだろう！」

「そんなことわかりきっている！」

「大淀以下三名準備出来ました！」

「よし！急いで抜錨し・・・」

次の瞬間、ドックが体が浮くほど揺れた。転びそうになる大淀達を抱きかかえて辺りを見渡せば揺らめく光と黒煙が見える。あ、提督は手が足りなかつたから転がった。すまん。

「いたた・・・何事だ！」

「（；；；、、、。？；；；）（?艸?、；）（。；。；。；。；）」

「なんだと!?敵の長距離艦砲射撃・・・ぐわあっ!?!」

再び大きく揺れるとドックの天井から瓦礫が降ってくる・・・いかんこれは陸奥湾まで敵に進入されていることになる。

「お前達！急いで出ろ！提督は私が連れて行く！」

「は、はい！酒匂！卯月ちゃんをお願い！私は如月ちゃんを！」

「長門さん！地下司令部へ！」

「了解した！」

提督を担いで本棟へ走る。低速戦艦と侮るなかれ、陸上ならその長い手足を生かして人よりは早く走れる。おっと島風お前は座つてろ。ドックから飛び出た瞬間、私の視線の先には三発の砲弾が見えた。

「提督すまん！」

「え・・・うわあああああああ」

提督は危ないので本棟へぶんなげた。硝子窓をやぶって入っていったけど怪我しないことを祈る。

「おおおおっ!!!」

私はというと・・・いつか見たことがある、金剛が拳で敵の砲弾を弾き飛ばす所を。いつ見たかはわからない遠い昔だ。しかし金剛に出来て私に出来ない筈がないのだ。

「ふんっ！」

裏拳を繰り出せば三発の砲弾は愉快的音を立てて海へと弾き返さ

れていく。この大きさの砲弾は・・・重巡!!先ほどからの砲撃のペー  
スを考えると、敵の数は多くない筈だ!!

「意外と出来るもんだな・・・」

「な、長門さんすげえ!!」

「ぼけつとしてる場合か!!地下司令部へ急げ!私はこのままドックを  
防衛する!」

「艀装も無しに・・・ちょ!待っ・・・」

海へは出られないが。ドック波止場に駆けつけると再び砲弾が飛  
んでくるのが見えた。見えるぞ・・・私にも砲弾が見える!

「でりやあああああつ!!」

鋼のひしゃげる音がして砲弾はたき落とし、海に着弾する。いけ  
る。それに今のは軽巡級の砲弾だ。

「ゞ(。ヅ)ノ」

「む!妖精さん!ここは危険だ・・・それは、通信機か。ありがたい!」

「ゝ(ゝωゝ)ノ」

「うむ。約束だ。私も危なくなったら逃げる。」

激しい、とまでは行かないが重巡級と軽巡級の艦砲射撃は時間をお  
いてやってきていた。時には身に受け、時には殴り飛ばし、時には投  
げ返した。そしてしばらく、砲撃が止み、あたりに静けさが戻る。大  
淀達が湾内に出現した敵を撃破したのか。しかしこの胸騒ぎ、不快感  
は増している。何故だ。

『・・・もし・・・もし!なが・・・!きこ・・・』

「こちらドック、長門だ。」

『・・・よかった!長門さん大淀です!ただいま阿賀野さん達と合流し  
ました!みんな無事です!いま急いで帰投しています!あ、驚くこと  
がありますよー!』

「うむ、今は置いておけ、それより湾内の敵は?どうだった!」

『湾内の敵は重巡二杯、軽巡一杯で、私達でも充分対抗出来ました!』

あ、今鎮守府が見えて・・・長門さん!!そこから離れて!!』

「む・・・」

通信機から大淀の叫びが聞こえると同時に私に巨大な影が二つ刺

した．．．見上げれば．．．海中から現れた、爛々と輝く黄金の目が二対。これは．．．まずい．．．  
「戦艦．．．夕級と．．．ル級．．．はは．．．私も．．．老いたものだ．．．これほどの接近にきづかつ．．．!?」

艀装もなく、戦艦級深海棲艦の砲撃をこの至近距離ではまず私でも耐えられないだろう．．．そう覚悟した瞬間だった。砲撃ではない大爆発が私を吹き飛ばした。

「ウオオオオオオツ!!!」

「．．．うぐ．．．」

「ママにツ!!!何するっぽいッ!!!」

「ゆ、夕立．．．?」

「ギ．．．ギギギ．．．」

「ウアアアツ!!!」

「ギアアアアツ!!!」

ギラギラと憤怒に満ちた深紅の目、煌めく金髪．．．黒光りする巨大な魚雷、獣の咆吼のような叫びと金板を引き裂いたような叫びがぶつかり合い、二つの影は火を噴きながら身体を折られ、海中に没していった。

「ママッ!ママアツ!!!」

「お前．．．改二に．．．?何故．．．」

「夕立ちちゃん!っ長門さん!!!」

「阿賀野さん!早くママを入渠ドックに!!!」

「わかった!第二水雷戦隊は湾内を索敵!」

「うぐ．．．」

「ママああああ!うわああああん!!!」

「泣くな夕立．．．お前は．．．母を救ったぞ．．．」

「ママあ!夕立が守るって!言ったのに!ごめんなさい!!ごめんなさいママあ!!!」

「いい．．．大丈夫だ．．．それより夕立．．．首、首絞まってる．．．くるし．．．」

「うええええん!!うわああああん!!!」





やあ・・・諸君・・・長門だ。その・・・なんだ、気がついたらまた私は大分眠っていたらしい。大湊に来てから戦つてもいないのに入渠して寝てるのが多くなった気がするぞ。横須賀にいたときより大分しんどいなこれは・・・ふにやふにやと白いベッドから起き上がって水差しの水を飲む。喉がからからだ。しかし・・・何か恐ろしい目にあつた気がするぞ。何が起きたかはあまり覚えていない・・・確か・・・目の前に戦艦級深海棲艦が二体・・・うっ・・・あたまが・・・「おーい・・・誰かいないかー?」

「・・・。」

ちよこつと開いた扉から跳ねた髪が特徴の金髪とくりくりの深紅の瞳が覗いている。・・・はて、あれは、まさか、か。

「ぽい・・・?」

「夕立つ!!!」

「ぽいつ!?!」

「待つ・・・ほげえつ!?!」

この長門、一生の不覚。慌ててシーツに足を取られ、ベッドから豪快に落ちるとは・・・地味に痛い・・・

「ママっ!」

「うぐぐ・・・すまん夕立、手を貸してくれ・・・」

「ママ・・・」

夕立がこんなに大きくなるくらい寝ていたのか・・・いやいやいやそんなわけないだろう。寝ぼけている場合ではないぞ・・・あー何か思い出してきた・・・

「ママ・・・ごめんなさい・・・夕立の魚雷で、ママを怪我させちゃつたの・・・ママを守るつて強くなったのに・・・ごめんなさい・・・ママ・・・」

「ん・・・夕立、顔を上げなさい。大丈夫だ。私は怒ってないよ。それより、どうやって改二になったんだ?阿賀野達と海上に出ていたのに・・・」

「わかんないっほい・・・阿賀野ちゃん達と訓練してたら深海棲艦に囲まれて・・・それでママのいる警備府にも敵が来てるってわかったら、わーっ！てなつてこのーっ！てなつたら改二になった・・・ほい？」  
「ふむ・・・さっぱりわからん。」

もともと夕立は謎が多い艦娘だった。今更でつかい謎がもうひとつ増えようと私は気にしない。

「でも、ママほんとに心配したのよ？ずーっと起きないんだもん・・・」  
「・・・待て、どれくらい寝ていたんだ？」

「えーつと・・・一週間くらい？」  
「・・・まじか」

一週間！なんと・・・前回の艦装爆発は三日も寝ていたし・・・もう私は本当に老朽化がはげしいんだなあ・・・

「そうか・・・とりあえず、お腹空いたな・・・」

「大丈夫！夕立が作るよ！」

「お・・・大丈夫か・・・？」

「大丈夫よ！ちゃんともや・・・親子井作れるよ！ママがいつ起きてもいいように練習したの。」

ええ子や。夕立ええ子や。流石私の夕立だ。親子井の作り方も覚えてしまうなんて優秀なんだ・・・

「すぐ作るね！」

「ああ！楽しみにしているぞ！」

「おーい夕立、お前演習の報告書まだ、出して・・・」

「お、天龍、おはよう。」

「な、長門オオオオオオオオオオオ！！！！大丈夫かあああああああ！！！！！！  
「うおおおっ!？」  
!?!?!?」

天龍がわんわん泣き出してしまつてみんな集まつてきて、私が起き



陸奥の一声で私以外の全員が敬礼をする。

「なおつてくれ。」

「ママーっ！親子丼持って来たっばいー！」

「良いにおいだ。ありがとう夕立。」

「長門さんはゆつくり休んでくださいな。そしてやつぱりへんなことしてくれたな．．．まさか艀装も無しに戦うとは思わなかった．．．」  
「意外といいとこまでいけたんだぞ！砲弾を私の鉄拳でがんがん弾き返してだな．．．」

「姉さん？」

「お、おう。」

陸奥の奴、いつのまにあんなおつかない眼光出来る様になったんだ．．．

「ママ、はい、あーん。」

「お、おい夕立．．．私は一人で．．．」

「ママは怪我人っばい。」

「いや、だがな．．．」

「ばい。」

「．．．。」

「ばいー！」

「あ、あーん．．．んむ」

「ママ？美味しい？美味しい？」

「うむ、美味いぞ。」

「へえ．．．姉さんを押さえ込むなんて．．．夕立ちちゃん、貴方姉さんを越える大物になるわよ。」

「ほんと？むっちゃん？」

「はあくいいわあく姪っ子かわいいわあく艦娘やっててこんな経験出来るとは思わなかったわあくんん」

「むっちゃんくすぐったいっばい」

夕立が陸奥と仲良くやれているようで良かった。おい不知火。女の子のする顔じゃないぞそれ。

「長門さんも起きたことなので皆さんの任務を．．．横須賀からの皆さ

んは大湊決戦艦隊に所属しています。上位深海棲艦に対抗するべく派遣されています。」

「ほう・・・それで私が旗艦で討つといわけだな。」

「まあそんな感じですが・・・基本その上位深海棲艦が出るまでは出撃はありません。他の仕事は教練のお手伝いや、演習相手になります。」

「いいわね。決戦艦隊。」

「オツケー！」

「わかりました！」

「不知火は長門さんの元にいられば。」

「朝潮は司令官の命令に従います！」

「他にもうひとつ、重要な任務を受け持ってもらいたい。」

「「「「？」」」」」

「長門さんの監視です。」

「もぐ!? んっぐ! 私の監視だど!? 何故だ!？」

「長門さんが勝手に出撃したり、戦ったりしないように見張ってください。長門さんの不在はうちの艦隊の士気に大いに関係してるよ。なので・・・戦場に共に出てもらうより後方で構えてもらったほうが助かる。」

「へーイ長門ー? アイドルは大変ネー?」

「アイドルは四水戦のヤバイ奴だけでいいだろう・・・」

「ふふっ長門さん、みんなに愛されてるみたいで私も嬉しいですよ?」

「もぐもぐ・・・鳳翔、よしてくれ。」

「ママー! これで最後! おかわりすりゅ?」

「すりゅうううう!・・・ってそれは別な艦娘の台詞だぞ。」

「えへへよそつてくるね。」

夕立可愛すぎてやばい。・・・不知火も構ってやらんと膨らませた頬を破ってしまいそうだ。

「ま、いろいろ説明したけど長門さんには今までみたいみんなと遊んで、ご飯作って、洗濯してくれればそれだけでみんなは安心して戦える。太平洋の英雄に背中を守ってもらうなんて今後一生ないかもしれないしな。」

「・・・お前達がそれでいいならそれでいいけどなあ。戦艦は戦ってなんぼだろう・・・」

「姉さん、姉さんの存在っていうのは姉さんが思っているより大きいよ。少しの損傷でもみんなの心を動かしてしまう・・・姉さんそのものがみんなの心と言ってもいいくらいに。姉さんの心は私達が守るから・・・ね？今度は私達に姉さんを守らせて。」

「・・・なら、私は何を守れば・・・いいんだ・・・」

「姉さん・・・」

「ママーっ！おかわり到着っばい！おつきいどんぶりにしてもらったよ！」

「おお夕立！待っていたぞ〜！」

提督は更に二、三話をした後、部屋から出て行った。陸奥達も仕事の為に退出し部屋には寝間着の浴衣を着た私と夕立だけになった。夕立は私が眠っていた一週間分を取り戻すかのようにたくさん話をした。私はこれまでにないくらい気分が穏やかだった・・・夕立可愛いいいい！ともならなかったし。いつの間にか日は傾いていて、夕立はすやすやと寝息を立て夢の中にいる。夕立のさらさらの髪をゆっくりと梳きながら頭を撫でる。あとからだか不知火が見ていたらしく、それこそ人間の母親が愛娘を愛でるようだったと鼻血と血涙を流しながら語った。大丈夫かこの子。

「・・・今度はみんなが守ってくれるんだってよ、夕立。」

「すうー・・・ぽいー・・・」

「・・・どうしても諦めきれなかったんだろうなあ。自分が守られるなんて嫌だったんだろうなあ。思い出したよ、長門になった時。違う世界の一般人だった自分が長門として誰かを、何かを守れるのが嬉しくて頑張ってたんだろうなあ。今考えると・・・よくそんな精神持ち合わせてたなと思う。漫画の主人公かよ。」

「ぽい・・・すう・・・」

「・・・うむ、ダメだ。思い出したこともすぐ忘れてしまう。私はもう長門になってしまったんだろう。私が守られるような存在になっても誰も守れないわけじゃない。せめて守られていても娘たるお前は

守ろう。これより先増えそうだが、その時はまとめて守ってやろう……ふふふ。」

「ぽいい……」

「夕立、起きなさい。そろそろ夕餉の時間だ。夕立。」

「ぽ、いい？ママ？」

「そろそろ夕餉の時間、だ。食堂に行こうか。」

ベッドから起きて寝間着の浴衣を直し、まだ目をこする夕立の手を引き扉を開けると、不知火がいて驚いた。駆逐艦がする顔じやなかった。食堂に行くと予想通り鳳翔が夕餉の支度をしていた。間宮は調理のスピードに目を丸くしている。名取と鬼怒曰く、皆の食べる量が鳳翔が来てから倍になったとか。……平和だな。新たな脅威がじわじわと燻っている状況だとは思えない。ずっと、ずっと続けばいいのに。このまま娘がいて仲間がいて、友がいて……ずっと、ずっと。



やあ諸君。長門だ。いきなり悪いがちよつちピンチすぎや。

「寄せ！陸奥！！早まるんじゃない！！私はお前をそういう風に育てた覚えはないぞ！！」

「例え姉さんの言うことでも聞けないわ。大人しく諦めて。」

「くっ・・・鳳翔！！」

「私も聞けません。これは・・・正当で、至極当然な判断です。往生際が悪いですよ。」

「鳳翔まで・・・！！ならば、天龍！！」

「すまねえ・・・俺一人じゃあ・・・どうすることも出来なかった・・・」  
「そんな・・・そんな！！提督！あんまりじゃあないか!?私・・・伊達や酔狂で英雄を名乗っているわけではない!!それを・・・それをこんな形でツ・・・!!」

「こうでもしないと長門さんはまた・・・な?とてもじゃないがもはや長門さんの口約束は信用出来ない。」

「あ・・・ああ・・・夕立・・・夕立は私の、ママの味方だよな?なっ?」

「ママには・・・少し眠ってもらおうっぽい。」  
「ああ・・・ああああああああ!!!」

せっかく来た私の艀装が!!!接触厳禁のテープと!!!注連縄とお札で封印されていく!!!やめろ!!!これから鎧袖一触「頭にきました。」出来ると思つてたのに!!!なんで艀装を封印されなければならないのだ!!!

「おいしい!!私を戦線離脱させるな!!!戦わせろ!!!」

「ちよ、それは俺の台詞だろうが!!!」

「うわああああああやめてええええええ!!!しまわないでええええええ!!!」  
「!!!」

なんとということだ。私が勝手に戦場にでないように監視するのにここまでする必要があるのか!?いやない!!!

「正直、生身でも戦えるとわかつてしまったからな・・・これは横須賀の長門さんの友総出での希望である。」

「提督の鬼！悪魔!!ち○ひろ!!」

「俺は博則だが？」

「ああああんまあああありだあああああ!!!」

重たい音が響き、コンテナが閉じて私の艀装が収容された。工廠の床下に轟々と音を立てて収納されていく。は、はは．．．はははははは!!!

「．．．．」

「．．．燃え尽きてるわ。」

「大丈夫っぽい。今度こそママは夕立が守るっぽい。」

「ま、まあ長門、気を落とすなよ。上位深海棲艦が確認されれば封印は解けるんだから。」

「．．．ブツブツブツブツ．．．」

「あん？」

「どうしました長門さん？」

「これでは夕立と一緒に攻撃出来ないこれでは夕立の勇姿を拝めないこれでは夕立のあられもない姿を見られないこれでは．．．」

「ヒエツ」

「あらららら．．．」

なんて．．．なんてひどいことをするのだ．．．私の．．．私の艀装．．．私の艀装．．．ニ〇ンのカメラも用意したのに．．．夕立アルバムに新たな章を刻めると思ったのに．．．ひどい．．．ひどい．．．こうなったらしばらく戻らないわねー．．．夕立ちゃん、お姉さんと一緒に訓練に行くわよ?」

「私が勝手に出撃しない為に艀装が封印処置されたエックスデーから数日たった。」

「誰に言ってるんですか長門さん。」

「さてな・・・」

「そこにずーっといても私は艀装出せませんよ。」

「知っている。」

「はあー・・・大型建造もうまくいかないし・・・デツカイ人は居座るし・・・もう・・・」

「明石お前なかなか辛辣だな。」

「長門さんのことは扶桑さんから聞いてますので。」

「ほう・・・そうか。扶桑はなんと?」

「・・・死に急ぐ危険な人だと。」

「そんなこと言ってたのかアイツ。それなら扶桑は武器オタクな工廠泣かしだ。通常なら気づかないような砲塔の軋み音で何時間もメンテ増やしてたからな。」

「帰ってきてくれるだけマシですよ。私は特に、ちゃんと帰ってきて修理を受けてもらわないと困る身ですからね。だから死に急ぐなんて噂が立つ人は嫌いです。」

「厳しいな・・・出来ることをしているだけで嫌われるとは・・・」

「ま、私のわがまま・・・」

「明石、いるかい?今日の建造なんだが・・・長門さんもいるのか。」  
「やあ提督。」

「あーまたですか長門さん。居座っても艀装は出しませんよ。」

「大淀め・・・いまもう明石に言われたところだ!」

ぐぬぬみんな私をばかにして!!だって艀装が使えないと不安になるだろう?ならない?んなばかな。まあいい。艀娘の装甲服も着られないから臙脂色の浴衣だがオイルで汚すと大変だ。

「そういうえば提督、大型建造の方はどうだ?大和型はできそうか?」

「それが・・・」

「提督、見てもらった方が早いと思うのですが。」

「・・・そうだな。付きそう艀娘によって建造可能かどうか変わるなんて話も聞くくらいだ。長門さん、ちよつと付いてきてくれ。」

「あ、ああ?」

「まあ……これだよ。」

「ほお……デカイな。通常の三倍はあるか？」

「素体を建造するシリンダーだけで通常の三倍。艀装を作るスペースはおおよそ二十畳。うちの規模じゃあ二つが限界だった。それで難航してる理由はあれだ。大淀、開けてくれ。」

「はい。」

大淀がモニターを数回叩くとガガガツと重そうなシリンダーの蓋が開いて窓が……おおう。

「すごい輝きだ……もしかしてこれが大和型の？」

「うむ。間違いない。大和型の船魂だ。ここから建造に移るんだけども……」

「なら簡単じゃないか。資材をぶち込め。大本営からしこたま送られてきてるんだらう？」

「そうすりゃいいけどな……ほれ。」

「……おいおいおい！桁が一個増えてるぞ!!!大型建造はこんなに使うのか?!」

「そうなんだよ。通常の建造の十倍資材を使う、大湊の貯蔵量を超える資材が送られてきてているが一日に二回もすれば消えて無くなる。

資材集めがどれだけ大変か、うちはよくわかる……大和型建造は先が長いかもな……」

「ふううむ……」

「長門さーん何か建造のコツみたいなの知りませんか？明石もそんなんあつたら苦労しないとわれちやって……」

「そうだなー……横須賀にいた頃は……今日は無理だなど思ったら建造、開発は一切やらなかった気がする。勘だよ勘。結局はここに頼るしかない。」

「勘ですかー……」

「俺も昔は戦艦や空母を狙った資材量をぶちこんだが・・・ま、御覧の通りだしな。神のみぞ知る・・・だな・・・」

「じゃあ試しに私がやってみてもいいか？一度建造してみたかったんだ！横須賀のあいつは建造ドックに近づかせてもくれなかったからなあ・・・」

「お、わかった。艦娘に建造させるなんて話は聞いたことないしな・・・今日はまだ一回も試してないし。」

「ふふん・・・！戦艦が建造すれば戦艦が出来るだろう。刮目せよ!!資材量はこれだ!!」

モニターにぽんぽんと数字を入れるが・・・この数字はすこし恐ろしいな。一度で連合艦隊が動くような資材量が消えるとは・・・怖くもあるがわくわくするぞ!!

「んく・・・これくらいだな。これでいくぞ提督。」

「3500、3500、6000、6000・・・？この数字はどのような意味が？」

「勘だ。この数字が良い。」

「長門さんが言うならこれにしよう。」

「開発資材は百個使うぞ!!」

「ひえっ・・・」

「世界最大の戦艦だぞ？けちつても良い結果は出ない!!豪快に行こうではないか。」

「な、長門さん!!いくらなんでも無駄遣いしすぎですよお！これで失敗してしまつたら・・・私達大本営に島流しされちゃいます!!」

「いや・・・大淀、やってみよう。今までのやり方では結果は出なかった。まあ・・・先は長いから。すまないな大淀。」

「わ、わたしは知りませんからね!!とつりあえず、補給とかは問題無いんですが・・・予定していた対潜装備の開発は先延ばしに・・・」

この大型建造のモニターをみた時に・・・頭の中に何かが浮かんだ。この数字じゃなければダメなんだ。こう・・・大型建造はばーってやらないと・・・こう、自由に、解放されなければダメなんだ。

「よし、まだどの艦娘になるかはわからないが・・・この戦艦長門が建

造してやったんだ。元気に出て来るんだぞ。」

シリンダーの窓を撫でて、蓋が閉まるのを見届ける。妖精さんが忙しく動き始めるのを見るととりあえず問題無く始まったんだろう。

「・・・建造時間は・・・？」

「ゞ(ゝc|、ゝ\*(ゞ(ゝc|、ゝ\*(ゞ(ゝc|、ゝ\*(」

「6週間・・・!?!」

「お、おおおお！長門さん！やりましたね!!この長い建造時間は間違いなく大和型ですよ!!!」

「お、大淀、わた、わたしも驚いてる・・・」

「島流しにならずに済むな・・・」

やあ諸君・・・長門だ。バタバタした日々が過ぎて・・・やっと安定した日常が戻ってきた・・・気がする。

「やあまだ見ぬ艦娘。元気にしてるか？」

拳で建造ドッグのシリンドラーを叩く。私が建造してからの日課だ、私を建造した提督もこんな気分だったのだろうか・・・！

「おや、長門さん。おはようございます。今日もですか？」

「明石か、おはよう。ああ、もう艦装でうだうだ言わんよ。」

「にしても、提督以外が建造するなんて初めて聞きましたよ。」

「いや、聞かないだけであるんじゃないのか？意外と。」

「そーなんですかねー・・・」

「じゃ、私は朝ご飯食べに行く。明石はどうだ？」

「私は、まだ朝のメンテがあるので。」

「ほーん・・・わかった。」

朝の建造中の艦娘への挨拶を済ませると朝食だ。ちなみに夕立は阿賀野達と朝練でいない。寂しい。

「あら、おはようございます長門さん。」

「おはようございます！」

「おはようございます〜」

「鳳翔、長良に問宮。おはよう朝食はなんだ？」

「今日は焼き魚・・・鰯ですよ。」

「いいな。鰯、好きだぞ。」

「長門さん！戦艦盛りですか!？」

「いや・・・もう戦わないのに、その量は・・・」

「あら・・・そうなんですか・・・？いっぱい作ったのに・・・」

「間宮も・・・もう私は武装解除されてるも同然だぞ？そんないっぱい食えんよ。」

朝食なのに他のみんなより三倍近い量がある。えらいこっちゃ・・・食えないって!!

「姉さんおはよう！あら、それだけでいいの？」

「陸奥！・・・うそだろ。」

隣にきた陸奥の朝食の量がマジパネエスモイヤバイ・・・茶碗の形をした米櫃だありゃあ。焼き魚も何匹いるかわからんし漬け物も瓶ごと持って来たみたいで味噌汁なんか鍋まるごと。・・・そういえば大侵攻中は私もこれぐらい食べてたかも。

「あー朝練あがりはお腹空くわね。燃費悪くて困っちゃうわ。」

「お、おう・・・」

陸奥が座ったくらいに食堂へ真っ白に燃え尽きた軽巡達が入ってきた。陸奥が朝練を見ていたのか・・・そういえば最初は私が教練をするなんて話があったが聞かなくなったな。

「夕立は？」

「他の駆逐艦達と入渠中。それからご飯だつて。」

「そうかあ・・・夕立がなんだか遠いところに行ってしまった気がするなあ・・・」

「何言ってるの、これから夕立はどんどん姉さんに近づいてくるわよ。追い越されるのもあつという間かもね」

「・・・私は戦艦だぞ？そんな簡単にいくか。」

「もう！」

さくつと朝食を平らげて執務室へ向かう。提督と大淀の分の朝食を持って行ってやらねば。

「提督、朝食を持って来たぞ。」



『長門さんだね。どうぞ。』

「おはよう提督、大淀。今日は焼き魚だ。」

「おはよう、鳳翔さんのだね？ いやー料理上手な艦娘で実に助かる。」

「おはようございます長門さん。」

「おはよう。今日は私に出来ることはあるか？」

「んー・・・今日はありませんね。あ、でも明後日、鳳翔さんの中心とした囲機動部隊作戦があるのでその時に調理場を間宮さんと二人でお願いします。」

「了解した。朝食の盆は後で間宮が取りに来る。」

「建造、早くできるといいですねー」

「高速建造材を使いたいところではあるが、大型建造でどんな影響があるかわからない・・・すまないが我慢してくれ。」

「構わん。もつと穏やかにやった方が艦娘の気性にも関わる・・・と思う。たぶん。きつと。」

「曖昧ですね・・・まあ暴れん坊が来ても困りますけど。それにしても長門さんが建造したから。出てきた子も夕立ちちゃんみたいにマーッて言ったりして！」

「まあ・・・それも悪くない。」

「ふふっ！あ、最後に御着物が届きましたよ。箱をお部屋の前に置いておきました！」

「ありがとう。確認する。それでは提督、またあとで。」

「ああ。ぐく苦勞。」

部屋に帰ってくると平たいダンボールが三つ積んであった。これか。艦娘の装甲服以外の服を持っていなかったので鳳翔に頼んだら着物が届いた・・・正直着付けなんか出来るか不安だったが無意識に出来た。ふむ、よくわからないが便利でいい。

「ふむふむ。これはいい。鶴の柄かあ．．．いいぞお。では早速。」

『長門さーん！いますかー！朝潮ですー！』

『不知火もいます。』

「ん、ちよつと待ってくれ。着替え中だ。」

朝潮と不知火か．．．どうかしたのだろうか。急いで着よう。帯を締め．．．うーん。きつめに巻こう。扉を開けて二人を迎え入れてやる。

「おはよう、二人ともどうした？」

「おはようございます！本日、非番ですので長門さんと御一緒しようかなと思ひまして．．．」

「おはようございます。不知火も、です。」

「おお、そうか！じゃあむつ市にでも出てみるか。私もばたばたして街を見たことがなかったからな。由良に美味しい洋食屋の話も聞いたしな。」

「！いいんでしょうか！」

「提督に頼んでみよう。今日は金剛達が留守番艦隊の筈だ。何かあつても金剛なら大丈夫だろう。」

「はい！」

「不知火は甘い物を食べにいきたいです！」

「いいだろう。じゃ、執務室へ行こうか。」

「外出許可？いいぞいいぞ三人分な。」

「軽いな提督．．．普通ちゃんも前もってーとかなんとか言うと思つたんだが。」

「そう言つて、長門さんはどうする？」

「．．．」

「おっけーおっけー。拳を降ろしてくれ。」

「ありがとうございます司令官！」

「司令、こんなんでよろしいのですか・・・？一応我々は新参です。」  
「ん、まあ・・・問題を起こすとは思っていないしね。それにある程度艦娘のみんなのわがままは聞くようにしてるんだ。うちは軽巡と駆逐艦しかいなくて他の鎮守府より危険な目に遭わせてしまっているからね。」

「・・・まあ不知火はお菓子が食べられればそれでいいです。」

「あー・・・」

「司令、なんですかその生暖かい視線は。不知火に落ち度でも？」

「いや、なんでもないよ。はい、外出許可、受理しましたつと。いつてらっしゃい。」

「長門さん！お土産にお菓子お願いしますー！」

「わかった。この長門に任せておけ。」

とりあえず・・・三人とも土地勘が無いのでタクシーにのり大湊の駅で降りしてもらった。タクシーのおつちゃんは十分驚いていたがなにに驚いていたんだろうか・・・私の顔か？いや、大きなキズがあるが・・・このご時世そんな珍しいものじゃないなあ・・・まあいい。

「あつたぞ。前に由良に聞いた洋食屋、ここだな。」

「可愛いお店ですね。」

「さっそく中に入りましょう!!!」

アンティークな雰囲気を裏切らず中もとてもおしゃれな内装だった。

「いらっしやいませー」

「大人一人に、子供二人だ。」

「かしこまりました、こちらの席どうぞー！」

通されたテーブルにすわり、歩いて渴いた喉をお冷やで潤す。キツチンの方からいいにおいが漂ってくる。お昼にはちと早い時間だが・・・お腹が空くニオイだ。

「長門さん・・・これ面白い形してますね！」

「アランドロンカレーだそうだ。由良はこれがオススメだと言っていた。」

「じゃあ、私これにします！」

「不知火も。」

「私も・・・だ！飲み物はどうする？」

「私はこのアーモンドオレにします！」

「不知火は？」

「・・・。」

「不知火？」

「・・・ツシーを。」

「？」

どうしたんだろうか。うつむいてしまっている。何か、気に入らない部分でもあったか。

「こ、この名犬ラツシー・・・に、します。」

「可愛い頼むんだな。わかった。」

店員に目配せしてテーブルまで呼ぶ。

「アランドロンカレーを三つ・・・アーモンドオレをひとつ、名犬ラツシーをひとつ、あとホットコーヒー。食後にクリームブリュレを三つ頼む。」

「かしまりました！お飲み物を先におもちしますか？」

「食事と一緒に頼む。」

「かしまりました！ごゆっくりどうぞ！」

うむ。元気な良い娘だ。接客業は笑顔が大事だ。朝潮は待ちきれないのかソワソワと鼻息荒いし、不知火はメニューを見つめたまま動かない。・・・ふむ、良い内装だな。この町の洋食屋さんという雰囲気は実に良い。・・・ん？あの、端の席にいる女性・・・見たこと、ある、ような。そしてすごい違和感を感じる・・・？なんだこの感覚は。

「・・・む。その奥方。」

「こ、これは失礼・・・」

「いや構わない、見たところ、そちらは駆逐艦艦娘の、朝潮と不知火のようだが・・・貴方は海軍の関係者かな？」

女性はすつくと立ち上がりこちら席に歩いてくる。・・・でかい。私と同じくらいある。二メートルは超えているな・・・

「そ、そんなところです。」

「不知火達にご用ですか？貴方は？」

「いやいや！こんなところで仲間に会えるとは思わなくて、つつい気分が上がってしまった！ゆるして欲しい。」

「なるほど・・・」

近くにきてわかった！長い黒髪！凛々しい顔つき！瞳の色こそ違えどがっしりとした体格は間違いなく艦娘！しかも・・・

「艦娘を連れていて、貴方のお顔の名誉の負傷・・・きつと名将なのでしよう。お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「先に、そちらから名乗るのが礼儀、というものでは？」

「不知火、よさないか・・・」

「いえ、そうでした。失礼をしました・・・」

黒髪の女性は左手で拳を作り、こちらをしつかり見て、自己紹介をする。そして貴重体験をしたのだった。

「単冠湾泊地、第二水上打撃艦隊所属、長門型超弩級戦艦一番艦、長門だ。敵戦艦との殴り合いなら任せておけ。」

## file 2 扶桑のお見舞い

「・・・あら、扶桑さん。こんにちは。いつものお見舞いですか？」  
「はい。」

「わかりました。それではここに記入を・・・」

横須賀の軍病院。それも艦娘専用だ。入渠ドックで治らない怪我等を妖精さんが集中治療するための施設だ。それだけではなく、退役した艦娘等もお世話になっている。  
「・・・」

白い廊下を歩くとちまちまと妖精さんが忙しく鋼材等の資源を持って飛んでいく。人間の姿は少ない。

「伊勢？いるかしら。」

「扶桑！いらつしやい！」

「失礼するわね。」

扶桑が入った病室には、水色の病院着を着た伊勢型戦艦の伊勢がいた。長い髪がどれ程ここにいるのか物語っている。

「これ、大湊で買ったチーズケーキよ。」

「大湊かあ。いいねえ佐世保とは反対側だね。」

「そこで、長門に会ったわ。」

「長門って・・・あの、長門か？」

「ええ。元気そうだったわ。」

「そっかあ・・・あいつも、長いよなあ」

「ええ本当に。報告では大湊が襲撃されたとき艦装無しで戦ったらしいわ。」

「あいつ規格外だよなー昔泊地に取り残された時も一人で帰ってくるし。」

「ええ・・・でも、もう、限界よ。」

「そっかあ・・・そうだよなあ・・・」

「入渠の時間がとても伸びて来ている・・・長門も、いつ動けなくなるか・・・一応、鳳翔に話してあるから。大湊に横須賀から何人か、長門に無茶させないよう移籍するって」

扶桑がお土産のチーズケーキを切りわけて伊勢の口に運ぶ。

「どう？美味しい？」

「うん！美味しいなあ・・・」

「私ね・・・長門に嘘をついてしまったわ・・・貴方のこと・・・」

「そつかあ・・・」

「佐世保で、暴れまわってるって・・・」

「本当は横須賀で腕も動かせず、ずーっとぼんやりしてるって知ってたら・・・どうなるだろうね。」

「・・・長門のことよ。黙って睨み付けて後で子どもみたいに泣くよ。それに私も、そろそろ貴方の仲間入りよ。」

「扶桑もかあ・・・お疲れ様、だな。」

「艦装を付けて立ち上がれないってわかった時に、悟った、わ・・・もう戦えないんだって。」

「もう、30年？いや、建造されてから数えると40年を超えるくらいになるのかあ・・・」

「そうね、あんなに、元気に、動ける長門が羨ましいわ。」

「・・・でも、もう、長くない。」

「・・・。」

「扶桑、チーズケーキちょうだい？」

「あ、ごめんなさい。」

「あーん・・・うん、美味しい！」

「あ、そうそう。長門ね。大湊でママなんて呼ばれてたわ。」

「ええー！なんだそれ!!」

「ドロップ艦の夕立にね？なつかれたみたいで。おんぶひもで夕立を背負ってエプロンしてるのよ？笑っちゃいそうだったわ。」

「ふあーっはっはっはっは!!長門おおおほんとなにしてんのおおおあっはっはっ!!げっほげっほ、うぐ、いたたたた・・・」

「伊勢！」

「うぐぐ・・・ちよつとつった・・・扶桑、ごめん、ちよつと・・・」

伊勢のお腹をさする扶桑、落ち着いたら水差しで水を飲ませてチーズケーキを一口食べさせた。

「にしても、ママかあ・・・艦娘でそんなふうに使われる話が聞けるなんてなあ・・・長生きするもんだね。」

「そんなこと言ったら私達だって山元三姉妹だなんて言われてたじゃないの。ね？伊勢ちゃん？」

「参ったね・・・じゃあ扶桑おねーちゃん長門おねーちゃんって呼んだ方がいい？」

「今さら過ぎてなんでもいいわ。」

「なんだよー」

病室に二人の小さな笑い声が響く。

「長門のこと、言っているのは鳳翔だけ？」

「大湊の提督にも話すつもりでいるわ。珍しく長門が気を許しているみたいだし。」

「ほう、長門が。」

「ママなんて言われて少し丸くなったのかしらね。」

「そうかもね。」

「・・・そのまま、丸くなって自分から退役してくれないかしら。悲しいことに、なる前に。」

「・・・どう、なんだろう、な・・・あいつは。」

「・・・老朽化が、艦娘にもあるなんてね。」

「艦娘も、生きているんだ。寿命くらいあるさ。最近は、なんか新しい建造、改修、解体の方法が出来つつあるなんて聞くけどねえ・・・」

会話はなくなり、扶桑はチーズケーキを食べさせ、伊勢は食べては窓の外を眺める。

「私、そろそろ行くわね。」

「ああ。いつもありがとう。」

「次何か食べたいものとかある？」

「そうだなあ・・・間宮のアイス、食べたいな。・・・また、みんなで。」

「みんな、で。」

「長門にも、いつまでも嘘ついていられないだろう？」

「そう、ね・・・」

「じゃ、またね。」



「ええ、また・・・」

扶桑は病室から静かに出て、唇を噛む。通りかかった妖精さんが佇む扶桑を見つめていた。

やあ諸君。長門だ。むつの町に出たらこれまた以外な出会いを果たした。外出すると新たな出会いがある。皆も積極的に外に出るといいぞ。

「長門型、戦艦！」

「うむ。よろしく朝潮、不知火。」

やはり、か。このいかにも戦士らしいオーラを放っていてただ者ではないと思っていたのだ。それもそのはず、《私》なのだからな。自分に、失礼があつてはいけない。こちらもしっかりと挨拶せねば。

「こちらも、自己紹介させてもらおう。大湊警備府、決戦艦隊旗艦、長門型超弩級戦艦一番艦、長門だ。今日同じ艦娘に会えたことを嬉しく思う。」

「同じく、決戦艦隊所属。朝潮型駆逐艦一番艦の朝潮です！」

「同じく、決戦艦隊所属の陽炎型駆逐艦二番艦の不知火です。お見知りおきを。」

「おおお！奥方、いや、貴方も艦娘！しかも《私》か！なんとという奇遇なことか！よろしく！」

単冠湾の長門は大いに喜んでいいるな。日本でたった数隻しかない長門型戦艦が作戦外で会うなど生涯あるかどうかかわからない。こちらの長門は長い黒髪をおろして花のバレッタとヘアピンで留めてあり、白いブラウスにジーンズ、ロングブーツと私と服装に凄く差がある。見た目相応の凛々しい服装だ。いいなあ。

「しかして、その傷は、もしかすると英雄長門か・・・？」

「自分に言われるとむずかゆいな・・・そうだ。」

「私のはかの大侵攻を知らない、貴方を誇らしく思う。」

「よしてくれ、見たところ非番なのだろう？堅苦しいのは無しだ。」

「ああ、非番では・・・いや・・・ありがとう、ここで会ったのも何かの縁、相席させてもらってもよろしいか？」

「私がかまわない。朝潮、不知火、いいか？」

「はい！」

「是非。」

「ありがとう！すまない！私の席をこちらに移してもらえないか？」

「かしこまりましたー！」

まだ料理は来ていないらしく、お冷やを持って長門は席に座った。荷物はキャリーバッグとボストンバッグ、大分大荷物で、旅行か何かだろうか？

「長門型、それも同一艦がならばと壮観です！」

「連合艦隊でもありえませんか。」

「そうだな、普通は混同を防ぐ為に同一艦は同時に編成しないという規程があるからな。」

「ふふ・・・長門が二隻も並べば深海棲艦も尻尾を巻いて逃げ出すだろう。」

「ははっ！違うない！」

「して、わざわざ単冠湾からどうしてここに？」

「・・・ある、任務でな。」

「・・・任務？」

「あ、大した任務ではない。任務というのもおかしいくらいのだ。」

「何があつたんだ・・・？」

「自分に、しかも英雄となつた自分に話すのは、なんとも情けない話だが・・・自分は、解体されるのだ。」

「解体!?戦艦を!!しかも長門型を!?日本の数少ない貴重な戦力をなぜ!?」

「・・・。」

長門は悔しさを顔に出して俯いてしまった。・・・長門型の解体、一体何故、

「提督が、無能なのか？並ば私が掛け合つて貴方をこちらに・・・」

「違う！単冠湾の提督は決して無能等ではない！艦娘一人一人を気にかける優しく、頼もしい人だ！私が、私がダメだった・・・」

「話してみる、同じ長門がここまで消沈するのは、私も心が痛い・・・」

「・・・私は、もう、戦えない・・・深海棲艦との戦いで、無視出来ない、直すことも出来ない損傷が体中から見つかった。次、艤装を装着

するだけで私の体は崩壊する。戦場で散ることも許されなくなつた……」

「な、に……!?!」

「そんな……!」

「思えば単冠湾で建造されてから、無茶ばかりしてきた。装甲の薄い駆逐艦を守る為に敵戦艦の一撃を何度もこの体で受けた。撤退する仲間達を守る為に殿を引き受け一人、敵の海域で戦った。砲が折れれば拳で、拳が潰れば足で、足が無くなれば噛みついて……戦いぬいた。」

まるで、私だ。同一艦というだけではない。中身も、心も、私だ。

「ちょうど先週のことだった。いつもの様に深海棲艦を打ち払うべく、艦装を装着したとき、体に激痛が走り、立ち上がることが出来なかった。」

「そんなことが、あったの、か……」

「そして提督は私の解体を決定した。私に解体を言い渡す時の提督の顔は笑えたよ。良い年齢の男が目を張らして叫ぶんだ……おかしくて、私は顔をあげられなかった。」

「ひっぐ……えっぐ……」

「これを、見てくれ。」

「そ、それは、まさか……貴方……」

長門は左手を見せて悲しく笑った。

「長門……ケツコンカッコカリ、していたのか。」

「ああ。それもうちのバカは、解体を言い渡した後にかいつを私に渡してきた。単冠湾は資材が潤沢でなく、本営からきたひとつだけのケツコンカッコカリ用の指輪をよりにもよって解体される私に超越したんだ。」

「……いい男じゃないか。」

「ありがとう……そしてあのバカは戦艦の私に遠征任務を言い渡したんだ。日本を見てこいと、お前が守った美しい国を目に焼き付けて来い、とな。」

「それで、大湊に。」

「ああ。」

「お、お待たせしましたー！アランドロンカレー3つとアーモンドオレ、名犬ラッシー、ホットコーヒーです！こちらのお客様はアランドロンカレーとメロンソーダですね！」

「ありがとうございます。」

「あとはお食事の後のデザートですね！ごゆっくりどうぞー！」

「酒でなくてすまないが、長門、君の旅が良き物となるように、乾杯。」

「乾杯！」

「ありがとうございます、乾杯！」

かちんとそれぞれのグラスを鳴らし、一口飲む・・・

「ふふ・・・旅を初めてすぐこれ以上無い出会いだ。この先退屈してしまっそうだ。」

「なに、島国と言っても日本は広いぞ。もつと良いことがあるさ。」

「そうかな？」

「そうだよ。」

さくりとメンチカツにスプーンを刺し、じわりと肉汁とチーズが溢れてくる。ライスと一緒に掬いカレーに浸して口に運ぶ。

「美味しい・・・」

「そうだ。日本には、もつと美味しいものがあるぞ！」

「解体されれば・・・美味しいものも、食べることが出来なくなる・・・」

「・・・ッ！」

「いやだ・・・生きていたい、もつと、生きていたかった・・・仲間達と、一緒にいたかった・・・死にたく、ない・・・！ううううううううああああああああ・・・」

—————

—————

—————

—————

—————

カレーを食べ終えて、デザートは私達はクリームブリュレ、長門は大きなパフェを、食べていた。店を出る頃には長門は最初の笑顔とま

ではないかないが、泣き腫らした顔も少し鳴りを潜めた。

「情けない姿を見せてしまった・・・自分に、しかも英雄にだ。駅まで送ってもらって、すまない。」

「気にするな・・・自分にも見せられないで溜め込むよりはいい。」

「朝潮と、不知火も。ありがとう。」

「こちらこそ！」

「不知火で良ければいつでもお相手します。」

「頼もしい駆逐艦だ。」

「長門！」

「ん・・・？」

「これを。」

「・・・メモ？住所、か？」

「横須賀にある、艦娘専用の病院だ。私も昔、世話になったことがある。そこならば、何か希望が見えるかもしれない。」

「・・・！」

「すまない、今さら希望を見せるようなことを・・・」

「いや、ありがたい！提督には内緒でなんとかならないか方法を探す予定でもあったんだ。助かる。」

「・・・。」

「では、貴方達の御武運を祈る。」

長門の敬礼に、敬礼を返す。力強く、凛々しく、長門型に相応しい立派な敬礼だった。敬礼を直すと長門はコートを翻して電車に乗っていた。・・・私も運が悪ければあなっていたのか。それこそ横須賀のババアにさっさと解体されていたかもしれない。同一艦だからとかではなく、他人事には思えなかった。私の体もボロボロの筈だ。もうすぐで艦娘として稼働して五十年になるのだろうか？アラフィフだアラフィフ。何も異常が無いわけがない。これから日常が変わっていくのか。ただそれが恐ろしい。

「・・・。」

「長門さん・・・？」

「長門さん、不知火はこれからは無茶を許しません。」

「不知火・・・？」

「長門さんが皆が止めるにも関わらず戦いに赴こうと言うならば、不知火が長門さんの息の根を止めます。」

「恐ろしいやつだな・・・」

「それに。」

朝潮が慌てる横で不知火がぎろりと私を睨む、本当に駆逐艦か・・・？絶対加賀と那智と日向を足して三で割った何かだろう。

「私達はもう、守られるほど、弱くはありません。でしょう？朝潮。」

「し、不知火のいう通りです！戦艦も魚雷で一撃ですよ！一撃！」

「・・・」

「フンスツ」

「・・・はっはっはっは!!そうだな！私も、そろそろ守られなきやいけないかあ・・・よろしく頼むぞ不知火、朝潮。」

「やりました。」

「了解！」

「じゃあ、帰ろうか。今私は着物で機動力も火力も落ちている。護衛を頼むぞ。」

「任されました。」

「朝潮！旗艦の護衛任務承りました！」

私達も帰路につこう。いま時間は1610だ。日が傾くのが早い。あまり遅くなると皆に余計な心配をかけさせるな。そりゃあいかん。陸奥と鳳翔がまた騒がしくなる。ま、騒がしくされてる方がまだマシなのかもしれないがな。にしても、何か忘れてるような

「あ、大淀のお土産忘れた。」

## file 3 避難訓練

皆さまこんにちは。鳳翔です。近年、鎮守府が襲撃されることが多くなり本営から非戦闘員と艦装未装着艦娘の避難訓練を実施するよう通達がありました。

「というわけで、避難訓練の監督を努めさせていただく鳳翔です。よろしくお願ひします。」

「二二」よろしくお願ひいたします！「二二」

「なあ鳳翔、これは俺もやるのか？」

「もちろんです提督。非戦闘員も、とのことなので。」

「見たところ全員いるように見えるが。急な出撃はどうする？」

「ご心配なく、湾内は朝潮が、近海は金剛が警戒して上空は私が艦戦、艦爆、彩雲を使って索敵していますので。もし出撃を要することがありましたら大淀さんを旗艦に長門さんを除いた決戦艦隊が出る手はずになっていますよ？」

「わ、わかった。」

「ごほん・・・ただ避難訓練をやるのではおもしろ・・・訓練になりませんので状況をつくりました。敵戦艦フラッグシップ級深海棲艦の上陸を想定した鬼ごっこをしたいと思います。」

「はい！」

「鬼怒さん。」

「何故鬼ごっこを・・・？」

「鬼ごっこは敵を想定し、逃げる、隠れる、対抗する。避難訓練に必要なこの3つを効率良く行える最適手段です。横須賀では水雷戦隊の新人によく鬼ごっこをやらせています。どこに逃げれば安全か、敵はどう動くのかを考えさせられる戦闘の基本を学べます。」

「わかりました！」

「何か他に質問は？」

「・・・。」

「無いようですね。では、敵戦艦フラッグシップをやってもらおう長門さんをご紹介します。」



工場の方から重機が歩くような重厚な振動音が聞こえてくる・・・筋骨隆々な人影と女性らしいスタイルの良い人影のふたつが向かってきていた。

「ホウツゲー……キ!!ホウツゲー……キ!!」

「そうよね、戦艦の砲撃は最高よね。こっちよ姉さん。」

「「「!?」」」

「ほ、鳳翔さん!?あ、あの筋肉達磨はいつたい!」

「いやですね提督、長門さんですよ。ちよつと大戦艦パワーに飲まれていきますけど。」

「テツツツコウツツダー……ン!!!」

「そうよね、徹甲弾の威力は素敵よね。」

「陸奥さん?長門さんの様子はどうでしょう?」

「ひ、久しぶりだから緊張してるのかも、力が入りすぎているわ。」

「長門さん、元気いっぱいですね。楽しみです。」

「う、うわぁ」

「大戦艦パワー……すごい……」

「何をしたらあんなになるんだ……」

「長門さんに捕まったら罰ゲームとして大破します。妖精さん。」

鳳翔が指を鳴らすと、倉庫から跳び箱にうつぶせに縛り付けられた不知火が運ばれてくる。

「むー!むぐー!」

「不知火ちゃん……?」

「何で跳び箱に縛り付けられてるぴょん……?」

「えーこの不知火、昨晚食堂に侵入し羊羹を食べているところを発見し捕縛しました。長門さん。」

「ホウツツツゲー……キ!!!」

「むぐぐー……ン!!!」

長門が右手を振り上げて、大きな手を不知火の小ぶりな尻に振り下ろした。その場にいる艦娘全員が想像される痛みと耳を刺す破裂音に歯を食いしばり目をつぶった。

「「「……ッ!!!」」」

しかし感じたのは全身に受ける風圧と、衝撃。想像した音はいつまで経っても聞こえてこない。皆はほつと一息つこうとするが、呼吸が出来なかった。あまりの緊張感に過呼吸になったのか、過呼吸は伝染するというのが、違う。長門の大戦艦パワーを持って放たれた平手打ちは衝撃が音より早く飛ぶ。故にその轟々と不知火の尻が叩かれた音を伝えるはずの空気が衝撃で吹き飛ばされ、一時的に空気がない状態に陥り音が聞こえず、呼吸が出来なくなったのだ。

「かはあつ!?はあ、はあ、い、今のはいったい!?!」

「何が起きて・・・」

「あーっ!見てください!!」

睦月が指刺す方向には、跳び箱。ビクビクと痙攣する不知火は尻にキレイなもみじ型の痕が残り、衣服は全て弾き飛ばされボロ切れとなり散らばっている。しかし跳び箱と縛り付けているロープと猿ぐつわは無傷だった。

「んあつ・・・んぐう・・・おほお・・・」

「ビイイイグツツツツツ!!!セブウウウウウウウン!!!」

「流石ですね長門さん、飲まれていても力のコントロールは完璧です。」

「ホウゲキツ!」

不知火は妖精の手によって運ばれていった。恐らく入渠ドックにいくのだろう。

「このように、長門さんにつかまった場合、その場でおしりぺんぺん10回です。不知火さんは一回も耐えられない未熟者だったので私が鍛え直しておきます。」

「ひゃーすっげえ長門前よりしあがってんなあ・・・」

「知っているんですか天龍さん・・・」

「そうだぜ阿武隈、あれはソロモン攻略作戦に向けての演習、中・・・あ、ああ・・・あああ・・・」

「て、天龍さん!?!」

「龍田あ・・・あやまるから・・・あやまるから身代わりにするのはやめてくれよお・・・ああああ・・・けつが割れる・・・」

「天龍さん！おしりは既に割れてます!？」

トラウマを呼び起こす者、恐怖に震える者、姉妹艦で固まる者、様々な反応が有る中、ただ一人してはいけないことをした者がいた。

「(; ㉔) ウワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「ちよ、漣!どこいくのよ!待ちなさい!!」

「あら、まだ始まっていないのに逃げるのは感心しませんね。」

鳳翔が再び指を鳴らすと上空からエンジン音が聞こえ、彗星が漣の頭に黒光りする爆弾を落とす。

「(; ㉔) こ、こんなことやってられっか!私は自分の部屋に……ん?」

爆音と共に炎に包まれる漣。啞然とする他の艦娘。爆心地には横たわる漣……

「ヤム……さざなみいいいい!!」

「朧、あんたもノリノリね。」

漣は不知火同様どこからともなく現れた妖精に運ばれていった。ナムサン。

「安心してください。演習弾です。いけませんね、敵前逃亡は銃殺ですよ?皆さんいいですか?これからルールの説明をします。」

「「「は、はいっ!!」」」」

「私の開始の合図と共に皆さんはこの警備府の中を逃げ回ってください。開始の合図の三分後、長門さんが動き始めます。終了条件は艦娘の全滅、提督の死亡判定、給糧艦間宮の轟沈判定、工作艦明石の轟沈判定、長門さんの撃破です。行動範囲は大湊警備府内のみです。湾内に出てはいけません。終了時間はヒトキューマルマルです。頑張ってくださいね。」

「ええっ!?私も、おしりペンペンされちゃうんですかあ!？」

「自分で自分を修理するなんてことしたくないわね……」

「もちろんです。あ、長門さんを撃破するための艦装ですが出撃ドックに全員分用意してもらいました。ドックに取りに行くか、隠れるか、どちらを優先するかは自由です。」

「ママを撃破するのは大変っぽい・・・？」

「いや、夕立、我々単艦では非力でも数がいればなんとかなるかもしれない。」

「菊月ちゃん、じゃあ僕たちで艦装を取りにいこうよ！ほら望月もやる気出して！」

「私も、あのおしりぺんぺんは嫌だ・・・」

「長月も同行しよう。」

「ど、どうしよう三日月ちゃん・・・」

「私達は隠れよう文月・・・」

「あ、言い忘れました。長門さんを撃破出来た時は長門さんがなんでも言うこと聞いてくれるそうです。」

「な、なんでも！阿賀野何お願いしようかなあ・・・」

「ちよ、阿賀野姉！もう倒す前提なの!？」

「あの気迫は・・・撃破出来るのか・・・？」

「ぴゃあ・・・長門さんと一緒にお出かけしたいなあ・・・」

「酒匂まで・・・」

「ちよ、ちよつと待っててくれ!!俺すごく不利じゃないか!?艦娘に身体能力で勝てるわけが・・・」

「はい。なので提督は守ってもらってくださいね。」

「は、はあ・・・」

「さて、では。」

あつというまにざわつく広場で鳳翔が鎗矢を放つ、あまりの至近距離での音に皆が耳を塞いだ。

「び、びっくりしたあ・・・なにになに？」

「長良！大変！驚いて名取が気絶したわ!!」

「五十鈴、背負ってあげて・・・あの！すみません鳳翔さ・・・」

「何をしてるんですか？はじまりましたよ？訓練。」

「へ?。」

「いいんですか？長門さんが動くまであと二分三十秒ですよ?。」

長良はちらりと長門に視線を向ける、まるで火力発電所のように鼻と口から煙を吹き出す様子はもう化け物としか言い表せない。長良

の顔から血の気が引き、後ろを向いていつもの如く旗艦として指示を出す。

「みんなああああ!!!逃げろおおおお!!!」

長良の一声ですばやく行動を開始した。いつもより三倍早かったと、後に長良は語ってくれた。早きこと島風の如し。

やあ諸君。長門だ。最近夕立が他の駆逐艦と遊びに行くことが多いくてとても寂しい。とつても寂しい。しかし元気なのは良いことだ。夕立が出撃することも多くなった。帰って来るごとに何杯沈めたなど嬉々として報告しにくるのは実にほほえましい。しかし些か私に依存しすぎているのが困ったことだ。それはそうといつもの朝の挨拶に工廠の大型建造ドックを訪れて驚くべきことが発覚した。

「提督・・・これは・・・もう、なんと言ったらいいか・・・」

「いや、もともと先の見えない実験的なことではあったんだ。長門さんのせいではないよ。」

「しかしあれだけ大見栄をきって大量の資材を使ったのだ・・・その結果としてこれは・・・」

大型建造のドックで大きなシリンドラーの奥にある艀装スペースには重厚な飛行甲板と大きなバルバスバウ。大和型ではないことは明らかだった。

「うちには無い正規空母の艦娘だろう。このバルバスバウ、恐らく翔鶴型のどちらかだろうな。」

「それなら艦載機などどうしようか・・・」

「鳳翔に開発してもらおう。彼女なら艦載機の開発など呼吸をするかのようにやってくくれるはずだ。横須賀から来てくれたみんなのおかげで装備はかなり充実してきている。ありがたियो。」

「・・・それにしても、翔鶴型か。確かに鳳翔一人では限界がある、が鳳翔は鳳翔で化け物だからな。連携が取れるかどうか・・・」

「鳳翔が・・・？いくら大侵攻を生き抜いた艦娘でも化け物なんて長門さんぐらいしか呼ばれないだろ。」

「喧嘩売っているのか？」

「悪かった。拳、拳しまってください。みしみし言ってる。拳みしみし言ってるから。」

失礼な奴だなほんと。まあ気の良い奴だからこうして冗談も言い合えるが・・・それにしても私の武勲は語られても鳳翔の地図書き換

え談は語られていないのか。鳳翔の性格もあるからかもしれんが。

「もうすこし古参艦娘について調べておいた方がいいぞ提督。あだ名だけでどういう武勲を上げた艦娘だかわかるぞ。」

「わかった・・・だが俺が知ってるのは英雄長門だけだ。」

「ふむ。生き残っている連中であとはこの天龍は千里眼の天龍。鉄血宰相ビスマルク。鬼の扶桑に羅刹伊勢。大岩山加賀、不動の赤城。無音の島風、不死鳥の響・・・これは自ら名乗っていたな。あと空焼きの高雄姉妹。そして・・・島割り鳳翔だ。」

「なんだよ大岩山って・・・」

「横須賀の一航戦だ。やつらのタフさはもう笑えてくるぞ。腹に風穴開けながら艦載機を放つ様子は魍魎の類いかと思ったな。」

「鳳翔のは・・・なんだ？島割り？」

「うむ。島を爆撃で木端微塵にするんだ。」

「な、なんだそりや・・・」

「過去の泊地強襲作戦で敵の泊地を発見したのは鳳翔なんだが。だがその見つけた方法が・・・な・・・」

「彩雲や二式艦偵とかじやダメだったのか？」

「切羽詰まっていたんだよ。」

「はぁ・・・」

「鳳翔は泊地の詳細がわからないからかたつぱしから島を爆撃して海の藻屑にしたんだよ。深海棲艦に制圧されているなら人間や生物はいないからな。爆撃で島が無くなったらその島は泊地じゃない、頑丈だったらその島が泊地だってな。」

「・・・そういや本営が深海棲艦の侵略の影響で島が無くなったって発表を出したの聞いた事があるが・・・まさか・・・」

「そうだ。深海棲艦の侵略で、は間違っていないが、実際、深海棲艦の侵略で や む な く 消し飛ばしたのは鳳翔だよ。」

「鳳翔にはこれからさんを付けて呼ぼうか。」

「私がかしたんですか？」

「ぎゃあああああああああああああああ!!!」

「うわあああああああああああああ!!!」

ぎやあああああああいつの間にいたんだ!!!びつくりして竜骨にひびが入るかと思ったぞ!!!鳳翔!君そんな神出鬼没キャラじゃなかっただろう!?

「朝ご飯が出来ましたので執務室にお呼びにいったらいらっしやらなかったの……おや、建造ですか?」

「あ、ああ!長門さんが建造したのだよ!」

「立派な飛行甲板ですね……私もこんな飛行甲板が欲しいです……」

「……鬼に金棒……」

「長門さん?」

びゅうと空を切る音と共に私のおでこに鳳翔の手刀がぴたりと添えられた。やばい。大戦艦アイでも見えなかった。

「なにか?」

「ナンデモアリマセン」

「もう!ふざけてないで朝ご飯ですよ!提督も早くきてくださいね。」

ふたりでわかったと返事をして食堂に戻る鳳翔を見送る。あー怖かった。空母って怖いんだな。

「提督……私は生まれてくるこの艦娘はしっかり教育するよ。優しい子になるように。」

「しっかり頼むぞ。頼む。」

そして明石に挨拶をして工廠を出た。建造が終わるまであと二週間ほど。翔鶴か瑞鶴かわからないが……どちらにせよ正規空母が建造されるだろう。このまま無事に建造されて欲しいが最後まで気は抜けない。体まで出来たのに起動せず建造失敗というパターンもあるからだ。そして私は騒がしい工廠の喧噪に紛れ、シリンダーから響く音に気づかなかった。

---

---

---

---

時間は過ぎて、昼食を食べ終わったお昼頃、少し前に出会った長門



の事が気になり提督に相談しに執務室へきた。

「提督、私だ。」

『入れ。』

「失礼する。」

「お、長門じゃねーか。どうした？」

「天龍、それは俺の台詞だ。」

「提督、少し頼みがあつてな。」

「無視すんなよ！」

「長門さんが頼み・・・なんだ？」

「単冠湾泊地の所属艦娘のリストが見たい。それは可能だろうか？」

「可能だが・・・どうして急に？」

「いや、ただの気まぐれさ。」

「ちよつと待ってくれ・・・一番新しく更新された奴が今日届く筈なんだ。大淀が郵便物を取りに行つてゐるから。」

「わかつた。天龍はどうしたんだ？」

「今更かつ！」

「そうすねるな・・・長門さん。ちよつと雲行きが怪しくなってきたんだ。」

「何があつた？」

そつとうと天龍が大きな海図をテーブルに広げ、青のペンでたくさんの線を引いていく。青まみれになった海図に今度は赤のペンで上書きするように線を書く・・・これは、天龍は以前にもこんなことをしたような記憶があるな。

「・・・海流か？」

「さすが長門だぜ。そう、これはここ一週間で起こつた海流の変化だ。」

「・・・冗談だろ？」

冗談ではない。恐らく青の線が元の海流なのだろう。これがどう変化したら一方通行の海流が三つ又になり、逆行し、渦を巻くのか、変化を表す赤の線は幼い駆逐艦の落書きとも言えるような図になっている。

「・・・で、提督はこれをどう受け取る?」

「・・・上位深海棲艦の出現、だろう。変化した海流は一見めちゃくちゃなようだが一定の部分に近づけないようになってる。」

「アリュージャン・・・」

「ここ見ろよ。AL海域に近づけないだけじゃなくて特定の海域に誘導される流れだ・・・これはよお・・・準備が整ったって感じだよな?」

「そう考えていいだろう。偵察が、必要だな。北方海域を見る単冠湾と幌筵にも連絡をとらねば。」

執務室が静寂に沈む。しかしその中で静寂を打ち砕いたのは思いも寄らない人物だった。執務室のドアが開いて二つの小さな影が入ってきたのだ。

「司令官・・・?」

「司令官聞いたぴよん。」

「な・・・!?お前らどうやって!!」

「如月・・・卯月・・・!!」

「うーちゃんと如月が偵察に出るぴよん。」

「何を言って・・・」

「馬鹿野郎!まだそれを判断する時じゃねえ!!部屋に戻つてろ!!」

「天龍こそわかってないぴよん。海域で一番最初に海流の異常を感じ取ったのは如月とうーちゃんぴよん?覚えてないぴよーん?」

「ちっ・・・だからってお前らが行く理由にはならねえだろ?」

「きつと天龍さんが行くんでしよう?それなら私達も連れてつてくださーい!」

「夕立ほどじゃないけどうーちゃん達も強くなったぴよん!それに天龍と一緒にならぜーったい帰ってこれるぴよん!」

「ここより北の泊地は艦娘の数も、資材も、未知の敵がいる海域に偵察するのは難しいと思うわ。」

「天龍といっしょに遠征行くから海流が変わっても海図は頭に入ってるぴよん。」

「・・・」

「誰かがやらなきゃならねえことだ。その誰かはお前らじゃなくても俺じゃ無くてもいいんだ。お前らにはそれを買って出る意味がわかってるか？」

「それは・・・天龍さんが教えてくれましたよね。」

「それでも天龍の弟子ぴよん。」

「・・・けつ、こんな馬鹿野郎に育てたつもりはねえんだけどな。」

「・・・天龍を旗艦に偵察艦隊を編成する。如月、卯月の他に誰を連れて行くかは天龍に任せる。」

「ありがとうございます司令官！」

「うっしし！司令官にい！敬礼！ぴよん！」

「・・・提督、ひとつ言っておくぞ。」

「長門さん？」

「鳳翔の島割り爆撃だが、あれは偵察が成功しなかった故に行われたことだ。あの時の鳳翔の憤怒に満ちた顔は忘れん。」

「・・・。」

「気を付けろ。上位深海棲艦は会えば死ぬ。」

ちよいちよいと袖を引つ張られ目を向けると卯月と如月がこちらを見上げていた。ぐつと力のある目だ。こんな目をするようになったのかこの艦娘も。駆逐艦もあなどれんな。

「長門さん、これを預かって欲しいぴよん。」

「私のも。」

「これは、睦月型のバッジ。」

「代わりにこれもらうぴよーん!!」

「ちよ・・・卯月・・・今着物だから・・・！」

卯月によじ登られて頭のかんざしとバレッタを取られ、華麗に着地した卯月はにかつと歯を見せて笑う。・・・この感じ、昔を思い出すな。戦艦の私に願掛けだと私の手ぬぐいを取り合っていた駆逐艦達  
が頭に浮かぶ。

「ぴよおーん！はい如月はどっちがいい？」

「ちよ卯月ダメよ！長門さんもごめんなさい・・・」

「いや・・・構わんよ。卯月、如月、それを返さねばこの睦月型のバッ

ジは永久に私のものだぞ？わかつているな？」

「わかりました・・・！」

「うっしっし！うーちゃんはんはかんざしをもらうぴょーん！これで百人カぴょん!!」

「私は・・・バレツタを。」

「・・・長門、こりやあ昔を思い出すな。」

「・・・ああ。」

「しれいかーん！おやつ食べにいくぴょーん！」

「うわわ・・・待て待て！片付けてからな!!!」

「しゃーねーな先に行つてろよ。俺が片付けておくからさ。」

「手伝おう天龍。」

「わりーな。さんきゅ。」

この3日後、大湊警備府、単冠湾泊地、幌筵泊地合同の北方海域監視網が張られた。

一番最初の偵察は大湊から天龍、如月、卯月。単冠湾から球磨、多摩。幌筵から雪風が編成され出撃した・・・が、上位深海棲艦を四体確認の報を最後に通信は無くなり、帰ってこなかった。

### 三章 私と作戦

#### page 25 私と開戦

やあ、諸君。長門だ。天龍達が上位深海棲艦を発見して、大本営は第二次北方海域奪還作戦を発令した。そう。再び大きな戦いが始まったのだ。上位深海棲艦は水鬼と名付けられた。

「……。」

「淋しいですねー」

大湊はその機能を北海道の千歳に移し水雷戦隊と決戦艦隊をつれてついさつき行ってしまった。更に全国から艦娘が集結しているらしい。

「天龍さん……如月ちゃん……卯月ちゃん……悲しいです、今まで戦ってきた、仲間なのに……うつ、うつ……」

天龍から不規則な海流を突破し、四体の上位深海棲艦を発見、敵が攻勢に移ったという報告が来たのは昨日。それからあつという間に北方海域が敵で溢れた。

「大淀！いつまで泣いてるのよ！しっかりしなさいよ！」

「五十鈴ちゃん……でも、みんないい子だったのに、天龍さんも、怖かったけど、いい人だったのに……！」

「絶対、許さないっぽい……！てんりゅーも、如月も卯月も沈めたやつ、絶対許さない……！」

「如月ちゃん……うううううああああああああん!!」

「お姉ちゃん……泣かないで……私、仇を取るから……！」

良かったな天龍。名取には怖がられてるぞ。大湊に残ったのは大淀、五十鈴、名取、睦月、弥生、夕立だ。他は大型建造を見ておく明石と、食堂の間宮。艦装をしまわれちゃった私が残っている。

「おやつだぞ。最中を作ってみた。」

「長門さん……!!」

「……そうよね、長門さんは何度も沈むのを見てきたから今さら誰が沈もうが関係ないわよね!!」

「五十鈴ちゃんっ!!」

「ごめんなさい、長門さん・・・」

「・・・構わん。おやつ食べて落ち着け。」

皆の前に最中とあついお茶を置く。私もゆつくりと御茶の渋みで口を満たし、最中のストレートなあんこの甘味を味わう。

「さて、大淀。我々は提督に留守を任せられた。何をすべきかは聞いているな?」

「・・・はい。」

「わかった。それならばまず、私からのお願いを聞いてくれるか?」

「・・・お願い?何でしょうか。」

「入渠ドックを準備するんだ。明石にはもう言っている。秘書艦の指示待ちだ。頼む。」

「入渠ドックう?長門さん、何する気なの?ダメよ!勝手に出撃させないように金剛さんから言われてるんだから!」

「あの、私も、陸奥さんから・・・」

「違う。恐らく今日の夜中か、明日。天龍が帰ってくる。その為だ。」

「・・・え。ええええええええええ!」

「長門さん、わかるの・・・?」

「ああ。天龍がついていながら誰かが沈むなどありえん。恐らく深海棲艦の無線妨害か、無線の限界だろう。今ごろ太平洋を南下して遠回りして帰ってきてる筈だ。」

「そ、そういうえば雪風が編成されてたみたいですし!そうですね!きつと生きてますよね!」

「天龍のは幸運ではない。確実に生き残り、帰投出来るルートを瞬時に選ぶ能力が高いのだ。頭に海図と無限に近い移動ルートが叩き込まれている。それに、偵察任務で戦闘は極力回避している筈だ。生存している可能性は高い。」

「・・・冗談でしょう?」

「こんな時に不謹慎な冗談言えるわけないだろう。」

「お、大淀ちゃん!入渠ドック!入渠ドックの準備しよう!」

「わ、わかりましたあ!大淀いつてきます!もぐっ!」

大淀は最中をひとくちで詰め込み、食堂を飛び出していった。

「長門さん、随分天龍さんのこと信用してるんですねえ！」

「あいつは私の命の恩人だ。私を救うことが出来るのだから他の艦娘を救うくらいどうってことないだろう。」

「長門さん・・・すごい・・・！」

「ママはほんと規格外ね。」

「夕立もほんと口が達者になったなあ。」

「ぽい？」

夕立をわしゃわしゃと撫でると嬉しそうに体を反らす。うーん可愛いな。カメラ持ってくればよかった。

「五十鈴、名取は対空装備、大丈夫か？」

「任せといて！」

「大丈夫です！提督が機銃と噴進砲を置いていってくれました！」

「うむ。すまん、私が戦えればいいのだが・・・」

「そういうえば、なんでそんなに長門さんを戦わせたくないのかしらね。」

「戦艦がいれば三式弾や徹甲弾が使って防衛もかなり楽になると思うのにね・・・」

「長門さん・・・実は見えないところで怪我・・・してる？」

「そんなのは聞いたことないなあ・・・」

「後になって腰がああとか大変にやしい・・・」

「ママの分も夕立が戦うから平気!!素敵なパーティーの準備はばっちりなんだからー！」

「夕立ちちゃんの素敵なパーティーは洒落にならないにやしい・・・」

「演習で・・・加減してほしいな。」

「手加減したら意味無いっぽい。」

食堂で談笑していると大淀が戻ってきた。明石も一緒なようでおやつをもうひとつ持ってきてこよう。

「入渠ドック準備しましたよお！」

「敵海域で音信不通・・・普通に考えたら・・・生きて帰ってくるなんて考えられませんね。」

「お疲れ様。明石もおやつ食べるといい。間宮が作ってくれた。」

「ああー最中あー糖分補給うー」

「とりあえず今日することは留守を守ることです。出撃準備で待機しててくださいね。」

――――

――――

――――

――

――

その日は特に警報もなく、穏やかな1日をすごした。執務室では私と大淀が千歳から送られてくる北方の戦況を纏めていた。あまり戦況は良くないようだ・・・今日だけで8の重巡、10の軽巡、7の駆逐艦が沈んだらしい。これで幌筵の艦隊は壊滅だという。1530に横須賀と舞鶴から連合艦隊が到着し、北方に向かったとあった。「夜には警戒だけして出撃は無し・・・と。長門さん、これで終わりますね。」

「あまり、戦況はよろしくないようだ・・・悔しいな。私がいればもつと・・・」

「長門さん、私はまだ若輩者ですけど・・・一人に戦争を変えられる力なんて無いと思います・・・」

「・・・そう、だな。思えば周りにすごいいっぱいいるな。鳳翔とかビスマルクとか。」

「みんなで力を合わせて戦うから長門さんも強くなるんだと思いますよー!」

「まさか大淀に一本取られるとはな。」

「ひえっ!?すすすすみませんでした!」

「・・・ん?これは、戦力名簿か。提督に頼んでいたの忘れていた。」艦娘の名簿ですけど、何か気になることでも?」

「ああちよつとな。」

「単冠湾を抜き出してみる。・・・先月にはあった戦艦の欄は、ない。・・・」



「お知り合いでも、いたんですか・・・？」

「ああ・・・良き友に、なれると思っただが・・・」

「作戦前に・・・すみません・・・」

「いや、どうって・・・」

作業中に電話がなった。こう、夜の電話つて結構びつくりする。大淀もびつくりしていたが、すぐに我に帰つて受話器を取る。

「こちら大湊警備府・・・はい・・・はい!! 本当ですか!? はい!!! ..  
軽巡3 駆逐艦3 ですね。わかりました! こちらで誘導の準備をします!! はい! 本当にありがとうございます!!」

「どうした!」

「三沢基地からでした! 艦娘を六人保護したことです! 天龍さん達に間違いない、ないでじゅ!!い”ま”、輸送機で”ごちら”に”!む”か”つて”まじゅー! うわあああん!よ”か”つた”あああ!!”  
”そうか!! 帰ってきたか!!! 大淀!!! みんな起こせー!!! 入渠の用意だ!!!”

それからしばらくして大型ヘリが到着し。中破状態の六人を入渠ドックに放り込んだ。睦月と弥生は入渠ドックの中で如月と卯月に付きつきりだ。夕立と五十鈴達は他鎮守府の艦娘の様子を見ている。天龍は報告の為に高速修復材を使って執務室まで来てもらった。

「天龍さん! まずはよく戻ってきてくれました! 偵察任務、ご苦労様でした!」

「ああ。まったく死ぬかと思っただ。しかし、もう連合艦隊が来るのか。はえーな。」

「千里眼から不死身の天龍と改めたらどうだ?」

「やなことだ! 二つ名なんて恥ずかしいだけだぜ・・・あ、そういや提督に二つ名のことしゃべっただろ!? 勘弁してくれよなー!」

「すまん。」

「反省してねーだろ!」

「ま、まあまあ・・・それより、偵察結果を報告してください。」

「ああ、提督は千歳だっけか? 通信は?」  
「できます。」

大淀は数字のボタンの無い通信機を押すとすぐさま提督からの返

事がきた。

『こちら渡部。大淀、何かあったのか?』

「はい!天龍さんが帰投しました!」

『な、なに!?大淀変わってくれ!!』

「よお、提督。死に損なったぜ。」

『バカ野郎!心配かけさせやがって・・・まったく!』

「とりあえず提督、偵察結果だ。高速出撃艦艇から射出後、敵上位深海棲艦を四体確認。戦艦型、空母型、基地型が二体、ここまでではないな?」

『ああ。戦艦型と空母型はすでに連合艦隊が交戦している。それぞれ戦艦水鬼、空母水鬼と呼称している。』

「そうか。基地型はまだ交戦していないんだな?一体はキス島に、もう一体はアリユーション列島の北方棲姫だ!やつら、この北方棲姫を守ろうとしている。」

『北方棲姫・・・!!わかった!』

「だが俺たちは北方棲姫の防衛艦隊に見つかってる。その後、追撃を避けながら太平洋を南下して三沢基地に保護してもらって帰ってきた。六隻全員無事だ。北方棲姫の防衛は相当硬いはずだ。注意してくれ。」

『よくやった。天龍。本当に生きていてよかった。』

「じゃ、俺も修理と補給が終わったらそっちに行く。待つてろよ。」

『・・・すまん、ほんとはゆっくり休ませてやりたいが・・・戦況はよくな・・・どうした。な、嘘だろ!?高速修復材を使い!すぐにだ!ドック開放急げ!』

『ギリギリだな・・・急いで行く。』

『偵察艦隊六隻全員、修理と補給が終わり次第、緊急千歳基地に向かえ。すまない、頼む!』

「ああ。じゃあな。」

天龍が受話器を置くと顔を、ぼしぼしと叩き気合いを入れたようだった。天龍は出撃前にいつもこうしているのを見ていた。

「というわけだ。長門、大淀。留守は頼むぜ。」

「頑張ってこいよ。もしかしたら、龍田に会えるかもな。」

「他所の龍田には他所の天龍がいるだろ？いーんだよ気い使うな！」

「わかった。じゃあくたばれ天龍。」

「このやろう!!」

「はっはっはっはっ!!!」

「え、ええこのノリはなに・・・？」

だが心配だ。私より大分後に建造されたとは言え天龍も私と同じく長い間稼働してる。ビスマルクも、鳳翔もだ。もうあまり無茶は出  
来ないはずだ。この戦い、きちんと勝利したいものだな。

やあ諸君。長門だ。上位深海棲艦が跋扈する危険な海域に偵察任務に出ている天龍が帰ってきた。天龍ならば生存を第一に考えることをわかっていたから不安はなかった・・・が心配はした。如月も卯月も無事に帰ってきてくれて良かった。本当に。

「はい補給完了しました！」

「ありがとうクマ。ほんと死ぬかと思ったクマ。」

「まー天龍の噂は聞いていたから心配はしていなかったニヤ。」

「天龍さん、頼もしいですねー・・・最初は連合艦隊にいたなんて嘘かと思っちゃいましたけど・・・」

「大淀、天龍の実力は本物ニヤ。多摩が保証するニヤ。」

「多摩さんは天龍さんご存じなんですか？」

「一応ニヤ。」

工廠に入ると球磨と多摩が補給を受けていたらしい。さて、卯月と如月はどこだろう。

「あー！長門さんニヤ！」

「む、単冠湾の球磨と多摩か。もう大丈夫か？」

「大丈夫クマ、世話になったクマ。」

「それより久しぶりニヤ。長門さん覚えてるかニヤ？」

な・・・に・・・？この球磨と多摩は私のことを知っているようだが・・・私としたことが、全く記憶にない・・・どぞどぞどうしよう、思い出せ、思い出せ長門!!

「まー覚えてないのも無理も無いニヤー。」

「球磨達は琿作戦で連合艦隊回収部隊にいたクマ。球磨型全員で長門さんを連れ帰ったクマー」

「長門さん、ボロボロで動けなかったからニヤー・・・多摩達は実戦には出なかったから作戦終了して回収にいった時は恐ろしかったニヤー」

「そ、そうだったのか・・・すまない、記憶にないのだ・・・」

「その時天龍と仲良くなったニヤー」

「へー！球磨さん多摩さんは瓊作戦に参加していたんですね。」

「参加したと言つても傷ついた艦娘を運ぶだけだったクマ。」

「こんなところでも私のつながりが・・・というか運ばれていたのか・・・そういえば敵を撃破した後はその場にぶっ倒れた後の記憶がない。そうか、作戦後はそうやって帰ってたのか。てつきり随伴艦達がつれかけてるものかと思っていた。」

「なんとも、私には命の恩人がたくさんいるようだ。」

「なに言ってるクマ。長門さんに命を救われた人なんて日本中にいるクマ。」

「そんな人の命を救えるなんてこつちも命かけるに値するニヤ。」

「なんだか恥ずかしいにや」

「長門さん！うつつてますよ！」

「いいものみられたニヤ。」

「ふっふーみんなに自慢できるクマ？」

「か、からかわないでくれ・・・！」

ぐぬぬ・・・なんだかしてやられた感じがするな・・・まあいい。如月達はどこだ？

「大淀、如月達は知らないか？」

「今お風呂の筈ですよ。」

「わかつ」

「ぴよーん!!!」

「ぐはっ!？」

急に背中に衝撃が来たかと思えば・・・卯月、か・・・結構効いたぞ・・・

「長門さんにまだただいまって言っただけだったぴよーん！」

「長門さん、ただいま戻りました。」

「あ、ああ・・・おかえり卯月、如月。」

「大湊の長門さん！初めまして！幌筵の雪風です！」

「おお、よろしく雪風。」

「はあ、はあ・・・卯月、速いにやしい・・・」

「卯月、これから出撃でしょ・・・早く長門さんから降りて・・・」

「ママもお見送りっぽい?」

背中に張り付いた卯月を降ろして大淀に渡す。この偵察任務で練度でも上がったのかなかなか威力のあるタックルだった。

「長門さん……ごめんぴよん……かんざし、無くしちやったぴよん……」

「私も……バレッタを戦闘中に壊してしまって……」

「そうか……ならばこのバッジは返せないな。」

「そうか、無くなったか……そこそこ気に入ってたんだがなあ……まあそんなものまた買えばいいしな。」

「いいか、二人とも。お前達はこれから戦いにいく。最前線も最前線、一秒生きるのに全神経を使う戦場だ。」

「ぴよん……」

「はい……」

「このバッジを返して欲しければ、お前達の命と交換だ。」  
「!？」

「な、長門さん……?」

「いいな?ここに帰ってきて、その手で私から取り返せ。それがバッジを返す条件だ。だから……」

生きて帰ってこい。その言葉を私は飲み込んでしまった。いくら大湊の精鋭水雷戦隊とは言えど、戦場では意味をなさない。精神的に幼かろうが戦士だ。わかってくれるだろう……

「わかったぴよん!」

「う、卯月!？」

「うーちゃんが帰って来た暁には!長門さんに五連装魚雷ぶっぱなして!ふん縛ってくすぐってひーひー言わせてバッジ取り上げてみせるぴよん!首を洗ってまってるぴよん!!」

「ほう……やれるものならやってみろ!大戦艦パワーで水平線の彼方まで投げ飛ばしてくれる!!」

「いや……長門さんは手加減して欲しいぴよん……」

「ふっ……ふふ、あっはっは!」

「噴きだした如月から始まり釣られてみんな笑い出してしまう。とても出撃前の雰囲気とは思えない空気だ。」

「おーい、そろそろ出撃だぜ・・・って何わらってんだお前ら？」

「ふ・・・天龍、お前の育てた駆逐艦は恐ろしいな。」

「??？」

「なんでもないさ。」

「あ、おう。おらー！お前ら出撃だ!!」

ぞろぞろとクレーンに釣られている艀装を体に装着していく。ねじが閉まる音、油圧がきしむ音、缶に火が入りタービンが回る音、弾が装填される音が工廠に響く。

「・・・あ、多摩ー！」

「なんだニヤ？」

「すまない、引き留めてしまって、聞きたいことがあってな。」

「多摩にわかることならなんでも聞いてニヤ」

「ありがとう。・・・単冠湾に、長門がいた筈なんだがつい先日の戦力表を見たらいなかった・・・何か知っているか？」

「こつちにいた長門は、怪我をして長期修理するはずだったんだけど・・・いなくなつたニヤ。出撃表からも名前が消えてて、提督も何も教えてくれなかつたニヤ。・・・長門さんは何か知ってるのかニヤ？」

「すまない・・・私がしているのは大湊で食事を共にしたことだけだ。千歳に着いたら大湊の朝潮と不知火に聞いて見るといい。そしてその後を私も知りたかつたんだ・・・」

「長門ー！もういいか？時間が迫ってる。」

「ああ、すまない。ありがとう多摩。」

「多摩は・・・多摩は生きるニヤ。長門も帰ってきたら猫パンチしてやるニヤ。大侵攻の作戦中に生まれたあの頃の多摩とはちがうニヤ。あ、長門さんにも長門をパンチする権利をあげるニヤ。ニヤア。」

「そうだ・・・生きることが手向けになる。兵器の我々に来れることは生きて存在を示すことが大切だ。折れるなよ、多摩。」

「わかつたニヤ・・・ありがとうニヤ。」

「おらっ！多摩ー！行くぞー!!」

多摩は私に手を振りながら出撃ドックに向かっていく。・・・皆、無

事にはいかないだろう。何せ姫級に並ぶ深海棲艦が四体も同時にいる。だが、せめて多く生き残って欲しいものだ。



「やあ諸君。長門だ。我々はいいいここにお留守番しているぞ。決して提督がいらないから夜更かしなんぞしてない。断じてだ。」

「大淀、そっちに戦況報告をこっちにまとめてくれ。」

「はい。長門さんは被害報告まともりました？」

「ああ、頭が痛くなるぞこれは・・・」

「戦闘開始から4日・・・こんなに被害が出ているなんて。」

「大侵攻時の作戦と比べると少ないが・・・今は時代が違う。」

「空母3、軽母8、重巡22、軽巡30、駆逐26、潜水艦2・・・空母がやられるなんて・・・」

「ここまで被害が出ているのに上位深海棲艦撃破の報告はない・・・」  
「横須賀の連合艦隊がピストン出撃してますけど・・・いつまで保つでしょうか・・・」

「タフさも折り紙つきだが・・・」

「そういうえば横須賀の提督が直々に千歳基地で指揮を執るようですね。あ、山元元帥！」

「なに!? 山元提督が横須賀の提督か!? もうお歳なのに無理をする。」

「でもこれなら安心ですね。」

「しかし、上位深海棲艦が四体・・・気は抜けんぞ。なんせ私も初めてだしな・・・」

「はい。ただいま0200ですね。良い子は寝てる時間です。しかし私は艦娘なのでそんなの関係ない。」

「・・・大淀、このファイルの・・・」

「えっと・・・それはこっちでまとめて・・・」

「そうか・・・じゃあこっちの作戦立案の・・・」

「・・・補填資材は・・・これ・・・」

「夜も更けて動物や虫の声も聞こえなくなった頃、どうにも胸騒ぎがする。いやな予感がするのだ。」

「・・・大淀、この辺で一区切りつけよう。少々、夜更かししすぎた。」

「そうですね・・・もう0330・・・おわりましょうか。」

二人で、本棟から外に出て出撃ドックからの海を眺める。海が静かなんだよなあ・・・変な感じだ。それとも大規模戦闘領域外はこんな感じなのかなあ・・・

「私も・・・出来るなら作戦に参加したかったですねえ・・・戦って私の性能を見てもらいたかったです。」

「ほう、そういえば大淀は前線司令部機能を搭載出来るんだったな。強力な無線は助かる。」

「砲は積めませんが役立てるんですよ?」

「だが、大淀は魚雷撃つたことないだろ? 秘書艦だから戦闘訓練も水雷戦隊には及ばない・・・出来ないことはするもんじゃない。」

「でも・・・私も艦娘です!」

「ならば尚更だ。艦隊司令機能を持つ大淀は提督がいない今最も重要な立ち位置にいる・・・気を落とすな。戦わずとも、大淀はいなくてはならぬ・・・」

私も平和ぼけたものだと思った。今は作戦展開中なのにのんびり外でおしゃべりなど、考えられないことだ。戦況報告などの連絡を取らねばならない執務室を離れたことも迂闊だった。そして深夜だという事で上空の警戒などしていなかった・・・平和に溺れた私は生涯このことを悔やむだろう。

「」

「うぐあああああツツツツ?!?!?!」

目の前を閃光が包み、体が熱に包まれ衝撃波に吹き飛ばされた。何が起きたかわからなかった。敵の砲撃? 馬鹿な、津軽海峡に近づくなど、千歳基地に何かあったのか・・・

「が、ごほっ・・・うが・・・お、おおよ・・・ど・・・」

喉が焼けて声が出ない。頭がガンガンと揺さぶられているようだ。火傷で痛む体に鞭打ち辺りを見渡す。手が、見える。眼鏡も。逃げねば、敵襲、空襲だ。早く、シエルターへ・・・すぐるように手を握るといとも簡単に手が引き寄せられた。

「お・・・お・・・よ・・・!!!」

手が、軽い、肘から・・・ああ・・・なんてことだ。空襲のサイレ

ンが響き、妖精さん達が集まってきてきゃーとかぴー等と悲鳴を上げている。大淀・・・すまない、大淀・・・!!!

「・・・(っ)ほ・・・!」

体を引きずってドックの中に逃げよう。艀装が無いから立ち上がるにはダメージが大きすぎる。

「ああ・・・す、まん・・・て、てを、かし・・・」

「(；；。D)(；；。D)(；；。D)」

「長門さん!!!」

「ママア!!」

名取と夕立か、艀装を付けて・・・ああ、いかん・・・

「なにが・・・あった・・・」

「く、空襲です！しかし夜間で敵機確認出来ず・・・高高度からの爆撃かも、大淀ちゃんはどこですか・・・？」

「お、おおよどは・・・うぐ・・・」

名取に支えられながら指刺す物は・・・ついさっきまで大淀だったもの・・・名取はひとつと声を殺し、夕立に上空を警戒するように命令して視線を逸らさせた。

「そんな・・・大淀ちゃん・・・」

「すま・・・ない・・・私が、け、いかい・・・していれば・・・」

「いえ、な、長門さんは、悪くありません悪いのは敵・・・!!ツキやあ  
ああ!!!」

話てる途中にも爆撃されて瓦礫が舞い散っている。前にもあったが・・・何故大湊が襲撃されるんだ・・・？にしても不意打ち大破が多くて・・・

「うぐ・・・だ、大丈夫ですか!」

「すまん・・・ちよく、げき・・・で、うぐ、けない・・・」

んん？工廠の上に・・・

「な、など・・・り・・・」

「長門さん!?!どうしましたか!?!」

「うえ・・・こう・・・しょう・・・」

「・・・?あれは・・・浮遊要塞!?!それにしても小さい・・・あれは・・・」

「なんでもいいからぶちのめすっばい!!ってえー!!」

夕立の高角砲が火を噴くが工廠の上の飛行する白い球体は容易く避けていった。なんて運動性能だ。見れば上空から同じ物がいくつも飛来してきてサーチライトに照らされている。爆弾を投下し、口から弾丸を撒き散らすあれは……

「なんで当たらないっばい!？」

「ごぼっ……げほ……」

「まずい……!!夕立ちちゃん!長門さんを本棟の防空壕に連れて行くから援護お願い!」

「了解!」

「長門さんすみま、お、重い……」

すまん名取……艦装を付けてないから少しはマシだと思うがだいたいどうぶか

「私だって長良型……根性オオオツ!!」

「名取まだっばい!？」

名取に担ぎ上げられた瞬間、真上に爆弾を今にも吐き出さんとする球状の敵機。これは、避けられん……!

「しまった!敵機直上……きゃあああっ!？」

「ぼぎゃっ!？」

爆風で二人とも吹き飛ばされ、地面に転がる。仰向けになってわかったが屋上から機銃と高角砲で迎撃する五十鈴達が見える。しかし苦戦しているようだ。球状の敵機は……工廠の上に集まっているな。……そうか。しかしどうして敵に知られたんだ？

「ごぼ……大型……建造……」

「ママ……!血が……!」

「あぐう……いたい……」

夕立は微損、名取は中破か……すこし喉はマシになったか、だが焼け付く痛みはひどくなった。それより早く千歳の提督へ連絡し敵の新型航空機の

「ゆ、ゆうだち……しつむしつへ……提督へ知らせるんだ……早く……!」

「で、でも……!」

「夕立……!これは……に、任務……だ!!母の……母の言うことを……聞け……敵の狙いは、大型建造……敵新型航空機あり……救援、求む……だ……行け!!」ぼ……ゆうだち……!!!」

「う……わがっだああああうわああああん!!!」

「そうだ……あと……名取……」

名取を引きずって工廠の中にはいる……すると急に体が引っ張られ入り口のシャッターが降ろされた……

「長門さん!名取!!」

「あか、し……名取を……」

「二人とも……ですよ!!」

明石の艀装が展開され無数のクレーンが鋼材を動かし、名取の修理を始めた。なるほどな。明石の泊地修理。実際に見るのは始めてだ。

「長門さんごめんなさい……これは艀装を付けている人しか修理出来ないの……!」

「かま、わん……少し、マシになった……」

明石の泊地修理を見ていると金属のひしゃげる音が頭の上から響く。

「……修理中は、機銃とか武装が使えません……屋根なんてあつという間ですよ……!」

「修理、急げ……!やつらは、大型建造ドックを、狙ってる。」

「ドックを……?何故深海棲艦が……」

「……もう喋っている暇もなさそうだ。」

屋根を食い破り球状の敵機が侵入してきた。破られた天井から屋上の五十鈴達が見える。必死にな形相だが……生き残ることだけを考えるんだ……

「はっ……はっ……明石、ここは私に、任せろ……」

「何言ってるんですか……!!馬鹿なこと言わないでください!!!」

「大型建造ドックが敵にまわれれば……もしかしたら、今以上の、深海棲艦が生まれるようなことに、なるかもしれない……そうなれば我々に勝ち目は、ない……」

ちょうど良い所に、鉄骨があるじゃないか・・・重いな。よく見たら腕が焦げているじゃないか・・・これじゃ持てんな・・・

「私もここまでか・・・」

鉄パイプで我慢だ。思い切り投げたが軽々と避けられ、獰猛なうめき声を上げられた。数は・・・10・・・20・・・まあいい。たくさんだ。私を食らい尽くすと全部には行き渡らないだろう・・・ああ、そういえば食堂にしなちくを作っていたな。無事だろうか。床下収納に入れたからぶじだといいな。あれがあれば夕立もご飯を美味しく食べられるだろう・・・ああ、急に膝の力が抜けた。明石が後ろで叫んでいるがもうわからん。通販で頼んだ夕立の服、明日か明後日辺りには届く予定だったが・・・これじゃあ受け取れんな「お母様あああああああああ!!!」・・・なんだうるさいな。もう頭が痛いんだから・・・ん？お母様？

「全機発艦!!目標、お母様に仇なす不屈き者!!」

目の前を無数の紫電改二が通り過ぎて球状の敵機を打ち落として行く。どうして艦載機が・・・？振り向けば輝く銀髪に鉢巻、右腕の存在感のある巨大で重厚な甲板、足下のバルバスバウ、各所のバルジ・・・似ている、が誰なのだろうか・・・？

「翔鶴型装甲空母一番艦、姉の翔鶴です・・・お母様の危機を感じ取り馳せ参りました!」

「お、おう・・・」

少し見渡せば無理矢理こじ開けたような建造ドックのシリンドラー、装備のコンテナ、なるほど。この翔鶴は私が建造した翔鶴か・・・装甲空母・・・装甲空母・・・そうだ。大鳳か。しかし日本に大鳳以外の装甲空母がいたのか？聞いた事無いな。それにまず大鳳が艦娘となった等も聞いた事もない。大鳳が建造されれば日本中の大騒ぎになるはずだ。奥が深いな、大型建造。

「な、なにそれ・・・装甲、空母・・・？」

「まずはあいつらを蹴散らします!!艦載機の皆さんお願いします!!」

翔鶴が矢を放てばたくさんの紫電改二が上空の敵機を追い詰めていった。すごい。

「ぎやぎやぎやぎや!!」

「むーしまっ……」

「お母様!」

水平に突っ込んできた敵爆撃機が私に迫った瞬間翔鶴が遮るよう  
に私をかばった。なんてことだ!!空母が爆弾をまともに受けては甲  
板が……あれ……甲板が?

「装甲空母は、伊達ではありません!はああっ!!」

爆撃に耐えた翔鶴が敵機を握りつぶした……無傷だった。すごい  
な……なんとというか……

「ご無事ですか!」

「あ、ああ……」

「ああお母様!!こんなにお怪我を……すぐに、すぐに塵芥を掃除しま  
すのでもう少しまってください!」

「そ、そうか。頼もしいな……」

「お母様……!私は嬉しいです!」

翔鶴が三本同時に矢をあてがい放つ、既に鎮守府の上空は70機以  
上の艦載機が埋め尽くしている。敵機は撤退しているらしく二式艦  
偵を放ち、追撃しているとのこと。大型建造つてすごい。そう思った  
ところで私は意識を手放した。最近このパターンが多いな

「海内無双の一航戦……翔鶴型、ここにありです……ってきやああ  
あ!お母様!しっかりしてください!お母様……」

……この翔鶴は、声が大きい……な……。

やあ諸君。長門だ。幸い今回は意識はすぐ戻った。次の日の朝には目が覚めたのだ。しかし体はずたずた。歩けない動けないだ。病室の窓から見ると警備府はボロボロ。壁は穴だらけ。大型建造ドックは翔鶴が出て来るときの衝撃がトドメになったらしく運用停止となった。

「ふむ．．．小腹が空かないか？大淀。」

「それでふねもぐもぐ。わたしはしよりしよりあまり空いてないでふ。」

「それはお前が私のマンゴーをたべているからだろ！なんで私に届いたフルーツ食べてるんだ！」

「いいじゃないですかちよつとくらい！私怪我人ですよ!？」

「そりゃこつちもだ！翔鶴！もつとむいてくれ！」

「はあい！お母様！」

大淀は生きていた。爆弾で吹き飛ばされ、海に突き落とされたので爆撃の被害は最初の一発以外受けなかったらしい。

「でももぐ、しよりしより、利き腕が無いのは辛いですねー秘書艦のお仕事も、しよりしよりしより入渠でも失った、もぐもぐ、部分は直せませんし。」

「ううむ．．．入渠施設ももつと機能の向上してもいいだろうにな。」

「ほんとですねーあ、翔鶴さん私にもリングおかわりください。」

「はあい大淀さん！」

大淀は命を拾う代わりに左腕と体の左側の機能を失った。左の肺も失い、心臓も艤装に繋いで動かしている。顔にも大きな火傷の痕が残りととても痛々しい。

「そろそろ提督が戻ってくる頃か？」

「たぶん。お昼過ぎには戻って来るそうですよ。」

「失礼するわ。」

「おお、五十鈴。どうかしたか？」

「おさぼりの犯人の様子を見にね。」



「げっ」

「冗談よ。夜は休んでいいって言われてたもの。どう？調子は。」

「……。」

「まあ……。」

「……ごめん。」

まあ五十鈴も守りきれなかったと後悔の念があるのだろう……しかしあの航空機……航空機と言っているのか？まあ航空機でいいか。あれはどこから来たのか。こちらの対空警戒にひっかからない高高度を飛んできたのはわかる。だが津軽海峡には敵艦隊は確認されなかった。新型航空機を使うような上位深海棲艦は。

「お母様？そろそろお姉様が帰ってきますよ。」

「そうか……翔鶴、別に姉妹艦だというわけでもないんだ。わざわざ呼び方を……。」

「いいえ。お母様の一番最初の娘ですもの。それなら私のお姉様です。ね？」

「む、むう……。」

「長門さんこんなおつきな娘が出来てすごいですね。」

「大淀オ！」

「うふふ……ほら噂をすれば。」

廊下を走る轟音がある。これ夕立が走ってる音か？ブルドーザーでも来たんじゃないか……？？と思っていたらドアを弾き飛ばして夕立が飛び込んできた。

「ママあ—————!!!」

「おおっと。おかえり夕立。哨戒ご苦労様。」

「どうってことないっぼい……また、ママを守れなかったから……」  
「そうだな……しかし不意打ちならば仕方ない。自分を責めるな。敵を攻めろ。いいな？」

「ぼいー！」

「ふふふ……。」

「おかえりなさいお姉様。」

「ぼいー！翔鶴もただいまっぼいー！」

「ふふ・・・」

ふうむ不思議な光景だ。夕立に撫でられて喜ぶ翔鶴。瑞鶴が見たらどう思うだろうか・・・いや、そもそも『この翔鶴』の妹はいるのだろうか？翔鶴型装甲空母なんて初めて聞いた。同じ名前の別な艦かもしれない。

「そうだ・・・五十鈴、名取はどうだ？」

「平気よ。艦装のおかげで中破しただけだったわ。入渠して今は部屋で寝てるわ。」

「そうか・・・名取にも世話をかけたと言っておいてくれるか？」

「わかったわ。長門さんと大淀もゆっくり休んでね。」

「ありがとう。」

「はい。」

そして昼過ぎには提督と決戦艦隊、天龍が帰ってきた。提督は大淀の姿を見た瞬間、壊れたダムのように泣き出してしまった。どうしようかと思ったが・・・翔鶴と夕立に頼んで病室から連れ出してもらった。戦艦長門はクールに去るぜ。

「もうケツコンしろよあいつら。」

「そういうな天龍。あの提督はなかなかそういうのを言い出しづらいんだらう。付き合いの短い私でもわかる。」

とりあえず天龍、鳳翔と私の部屋に来てもらった。翔鶴と夕立には少し時間を潰してもらっている。そういや翔鶴は軽々と私を担いでいたな。将来有望だ。

「まどろっこしいなあ・・・」

「しかし大湊の主力がほとんど戻ってきているが・・・どうするんだ向こうは。」

「大湊が空襲を受けたらどう？そしたら山元のおっちゃんか敵の二面

作戦では・・・なんて言ってよ。千歳を中心に防衛範囲を広げることにしたらしい。」

「敵の狙いは・・・？」

「ひとつは大湊の大型建造ドックだろうが・・・あとはいつも通り、わかんねえ。」

「私達は提督の命に従い、戦うだけです・・・ですよね？」

「ああ、そうだ。」

「けどなあ・・・そろそろ体にガタが来てるんだよなあ・・・」

「私も・・・狙いがぶれることが多くなって・・・少々・・・」

「・・・みんなそうか。」

「ビスマルクもな。久しぶりにあったらなんか嬉しそうな顔して肩こり自慢と腰痛自慢してくるんだが・・・なんか知ってるか長門。お前仲良しだろ？」

「ビス子が？・・・なにも知らんな・・・」

「その顔は本当に何も知らねー顔だな。」

「そういえば高雄ちゃんからフルーツが届いてましたよ。」

「ああ、食べたぞ。あの姉妹は今パラオか。果物は翔鶴が剥いてくれた。美味かったよ。」

「まあ良かった！翔鶴ちゃん、随分変わった姿だけど良い子で良かったわ。お行儀もいいし、仲良くできそうです。」

「そりゃあ良かった。」

「あの翔鶴、夕立に負けず劣らず元気だぜ。見てみるあれ。」

「ん？」

窓の外を見るとグラウンドを全力疾走する夕立と翔鶴。むしろ翔鶴の方が速い。なんだそりゃ。

「さすがだな。馬力が違うな。」

「けどなんで走ってるんだありゃ。」

「元気なのはいいことですよ。」

「ふむ・・・しかしお母様、か・・・不思議なこともあるものだ。私は山元提督を父と呼ぶようなことはなかったがなあ」

「そこは不思議ですよええ。そんな刷り込みみたいなのが艦娘にも

あるなんて。」

「まあそこらへんは俺らが考える事じゃねーよ。学者の連中にまかせとけ、あと明石とか。」

「・・・そうだな。私なんかを母と慕ってくれるなら私も全力で愛情を注ごう。」

「大戦艦。パワー満載の愛情が・・・身震いするぜ。」

「なんだ天龍、お前も受けたかったか。大戦艦ラブ。」

「うわああああああ!!!よせ!!竜骨が粉碎されるだろ!!」

「くたばれ天龍。」

「このやろう!」

「ふふ・・・お二人も仲良しですね。」

「・・・というのが今の現状だ。今も被害は増え続け、水鬼級の撃破にも至っておらず基地型深海棲艦の泊地にまでも到達出来ない。」

「それで、基地型は偵察艦隊が監視しているんだな?大湊を襲撃したのはどちらの基地型だ?」

私と大淀が車椅子に乗せられて執務室にいる。提督から状況を聞いて置かなければならないからな。再び空襲されてはたまらない。

「それなんだが・・・北方海域から航空機が出たという報告は無い。」  
「そんな馬鹿な!ならばどこから来たというんだ。」

「わからん・・・それに大湊を襲撃した球状の航空機というのはこちらでは確認されていない。よく見るヒトデだけだ。深海の高高度爆撃機・・・ということになるのか・・・?」

「本土が爆撃されるのも時間の問題だな・・・それにあの球状の航空機・・・ええいタコヤキだ。タコヤキと呼ぶぞ。あれは艦戦、艦爆と種類があった。恐らく艦攻タイプのタコヤキもいるだろう。」

「た、タコヤキ・・・」

「美味しそうですね。」

「お腹空いたっぽい？」

「お姉様、お昼はたこ焼きにしましょう？」

「いいね。」

「んんっ！」

「五十鈴達はあの・・・タコヤキはどう思う？」

「そうね、やたらすばしっこくて硬くて本当にやっつかいだったわ。ホバリングもするし。」

「口からおえーって爆弾出すのは気持ち悪かったにやしい・・・」

「・・・どうやって機銃を撃っているのか、わからなかった・・・」

「えっと・・・飛行音がほとんどないので、何度も奇襲されてしまいました・・・すみません・・・」

「ふむ・・・」

あれを真つ向に相手すると辛いんだな・・・速くて硬いなんて厄介この上ない。

「えーっと、翔鶴君・・・だね。大型建造で建造された・・・」

「はい!!」

「おう・・・君は艦載機を使って迎撃したそうだがどうだった？」

「はい、艦載機での相手だと普通でした・・・といっても初めて戦ったのがあのタコヤキなのでそのヒトデというのがわかりません。なので比較にならないかな・・・と。」

「ふむ。ありがとう。」

やはりこの翔鶴は声がデカイ。以前見た翔鶴の幸薄そうな感じとは大違いだ。装甲空母と普通の空母では大きく違うのだな。

「おそらく、敵にはまだ見ぬ上位深海棲艦がいるのかもしれない。そして敵の狙いの一つはここにある大型建造ドックだ。ひとつは壊れてしまったがまだひとつある。これを奪われるわけにはいかないし、これ以上好き勝手やらせるわけにもいかない。空母の二人には監視網を引いてもらって、金剛には三式弾を積んで対空警戒・・・残りの駆逐艦達には対潜警戒だ、どこで見られているかわからな・・・」

電話だ。それもホットライン。これの意味することは・・・一瞬で

緊張が走るが。夕立と翔鶴はなんのこともわかっていない。

「・・・了解、すぐに出撃させ、防衛ラインを展開させます。」

「・・・どうしたんだよ提督。」

「出撃だ。基地型深海棲艦が動き出した。こちらに向かっていているらしい！総員、すぐ出撃し、防衛ラインを作ってこれを迎撃せよ！これより基地型深海棲艦は港湾水鬼と呼称する。千歳からも艦娘が出る。決して近づけるな!!」

「「「了解！」「」」」

「長門さん・・・長門さんの艦装の封印を解きます。何かあった場合、大淀や間宮さん、明石を連れて逃げてください・・・お願いします。」  
「承った・・・この戦艦長門に任せておけ。」

やあ諸君。長門だ。私の大戦艦パワーの可能性は無限大だ。いろんなものを天元突破するぞ。この、天元突破って言葉はなんだか心地が良いな。私を信じろ。

「おーらい、おーらい・・・もう少し右だ翔鶴、そう、行き過ぎだ。戻して・・・おーらい、おーらい・・・」

「長門さん、武装の方、一式徹甲弾と三式弾、46センチ連装砲と零式水観です。」

「いつのまにそんな装備を・・・」

「陸奥さんが開発しました。翔鶴さん！そこでお願いします！」

「はい！」

クレーンにぶら下げられた私の艀装。久しぶりだな。試製46センチ連装砲が使えるとは頼もしい。

「翔鶴、肩を貸してくれ。装甲服を着る。」

「はい。お母様、失礼します。」

翔鶴の手を借りて、車椅子から立ち上がり着物を脱がせてもらう。寒い。そのまま明石いつもの装甲服を着せてもらい艀装の前に行く。

「ふむ、46センチが四基八門。圧巻だな。」

「お母様、艀装着けますよー。」

「まるで介護だ・・・よつと！」

連結音が工廠に響くと同時に缶に火が入る。久しぶりの感覚だ。私にも火がついたようだ。体に熱が入り始めて動かなくなった筋肉が力を取り戻していく。

「翔鶴、もういいぞ・・・自分で立てる。」

「お母様、素敵です！」

「・・・ふむ。動けるようになったか。だがまだ重いな。」

「向こうに高速修復材を満たしたドックがあるのでそこで細かい修理を行います。それで元に戻るはずです。」

「わかった。翔鶴！もういいぞ。持ち場に戻りなさい。」

「で、でもお母様がまだ……」

「翔鶴!!今は作戦行動中だ……母を困らせるな。」

「う……はい……」

すまない翔鶴……母の立場を都合よく使う私は最低だな……しかし、大湊の防衛はこの長門一家に懸かっている。気を抜けん。大淀のようなことを二度と起こさんぞ。

「これだな。明石、妖精さん、頼んだぞ。」

「敵がすぐそこまで来てるんですよね。急ピッチで慎重にやります。」

—————

—————

—————

—————

高速修復材での修理を終えて防空壕の入口まで向かう。天龍達は出撃したので司令艦も出たようだ。周りには翔鶴と夕立、そして五十鈴がいる。

「ママ!もう大丈夫っぽい?」

「ああ。夕立、気を緩むな。いつ来るかわからんだ。次は完全にやられるぞ。」

「は、はい!」

「五十鈴、上空の警戒はどうなってる?」

「翔鶴が紫電でやってくれてるし。電探にも感無し。空も海も静かなものよ。」

「わかった。翔鶴!敵は高高度だけから来るわけではないぞ!全方位に目を向ける!」

「は、はあい!」

『長門さん!聞こえますか!』

「大淀か。」

地下司令部からだろう。と、いうと提督から戦況報告か。

『敵港湾水鬼艦隊、択捉島より北北東600km地点にて確認。これより千歳より抜錨した機動部隊、水雷戦隊と合流し、交戦するとのこ



とです。』

『了解した。大淀、無理はするな。名取もいるだろう?』

『いいんです。これが私の勤めですから!』

「そうか・・・わかった。ならば全力全開、限界突破で敵から守ろう。大船に乗った気持ちでいろ。」

『長門型ですからね。期待してますよ。でも、長門さんも無茶しないでくださいね。病み上がりなんですから!』

「そうだった。忘れていた。」

無線を切り視線を上に向ける。来るならこい。この長門が焼き払ってくれる。

—————

—————

—————

—————

—————

時間は、1840。少し前に敵港湾水鬼艦隊と交戦したとの報告があつてから連絡はない。ならば我々は我々の仕事を全うするだけだ。

「電探・・・感なし。」

「偵察機より報告、敵機影無し、その他湾内、津軽海峡に艦影無し・・・」

『こちら夕立、湾内、ソナーに反応無し。』

「了解。」

今のところ敵が来る気配はない。嫌な胸騒ぎも、ない。だが不気味なほどに静かだ。遠くでカラスが鳴いていて、大分日が傾いている。

「長門より、各艦へ。前回敵は夜襲を仕掛けてきた。日が傾いてきているので、警戒を厳とせよ。」

『「了解!」』

五十鈴は機銃のチェック、翔鶴は艦載機のチェックと補給をするを夕立からは陸奥湾まで警戒範囲を広げると通信があった。

「長門さん、私も湾へ出るわ。その方が電探で見つけやすいし。」

「わかった。潜水艦に気を付けろ。」

「了解、いつてきます!」

「翔鶴！偵察機の目を私に渡せ。そして間宮のところへ行つて食事をとつてこい。」

「え、しかし、お母様は……」

「私も後で取る。先に行くんだ。」

「……はい！」

翔鶴から弓を受け取り意識を頭の電探に集中する。見えるのは津軽海峡……深海棲艦が現ればノイズとして目に映るが特にノイズは見えない。自分の零式水観に戻しても陸奥湾にもノイズは見えない。

「共有、問題なし。これだけの数を操るのはつらいな……戦闘は無理だ。」

「お母様！おにぎりとお茶をお持ちしました！」

「む、そうか……助かる。」

弓を返して、おにぎりを受けとる、具は……

「エビフライ？」

「私のは肉じゃがですね。」

なんだこれは。こういう時は梅干しとかじゃないのか？その方が楽だろうに。わざわざエビフライ作ったのか？肉じゃがも？あ、そういえば昨日の夕食が肉じゃがで昼がエビフライだったっけ。じゃあその余りか。そうだろうな。肉じゃがは襲撃で食えなかったし、昼も出撃だから食堂で取るひとが少なかつたんだな。にしても間宮、料理うまくなつたな。

「……お母様？」

「どうした翔鶴。」

「お母様は、私のこと、どう思いますか？突然母と呼ばれて、不快ではありませんでしたか？」

「……急にどうしたんだ？」

「艦娘なのに母だの娘だのと言うのは変だというのは自覚がありません。そもそも親と子供というのは母がお腹を痛めて産み、子供は幼少期、成長期、青年期と年を重ねるもの。ですが、私はこの姿で現れ、その過程がありません。なのにお母様をお母様としか思えなくて……」

それに、本来はあり得ない翔鶴型の装甲空母で・・・得体の知れない私がお母様を、お母様と呼んでよろしいのでしょうか・・・」

「翔鶴、私はそれに対する正しい答えは持ち合わせていない。しかしだ・・・母と慕う娘を捨てるほど外道でもない。それにだ、腹を痛めたわけではないが、お前を生んだのはこの私だ。私に生み出されたお前が私を母と呼ぶのになんの問題がある。胸を張れ翔鶴、私は英雄長門の娘だと。私も声高らかに言おう。装甲空母翔鶴は私の娘だと。」

「お母様・・・！」

「もちろん、夕立もだ。あの子も私を母と呼んだ以上、母として責任持って成長を見届ける予定だ。お転婆でやんちゃだが、とても繊細な子だ・・・翔鶴、お前と私はこれから始まる親子だ。将来が見えんのは不安だろうが、怖いのなら母の私に甘えなさい。姉の夕立を頼りなさい。家族は必ずお前の側にいる。」

「はい・・・はい・・・！」

涙は静に流すのだな・・・てつきり、大きな声で泣いてしまうのはとひやひやしたが・・・まあ翔鶴かどうい子なのかは少々わかってきたかもしれん。・・・それになんというか、思春期の子を持つ親の気持ちがあつたかもしれん。私に体を預ける翔鶴を撫でながら肅々と感じた。あしながおじさんにでもなろうか。あ、私は女だからあしながおばさんか？うーん翔鶴も夕立とは違うかわいさがあるなあ〜いろんなお洋服着せて恥ずかしがるところとかを写真に収めたいぞ。シヨツピングとかも楽しいだろうなあ〜

・・・少し頭も切り替わってきたみたいだ。今になってわかったが思考が昔の方へ寄りつつあつたようだ。大淀の大破で、気分がそういう方向に向かったのか・・・私はもう昔のように出来ないというのに。ギリギリと悲鳴をあげる私の竜骨は命のカウントダウンのようだった。

やあ、諸君。長門だ。今日は挨拶をしてる暇がない。警備府の防衛中だからだ。夕立や翔鶴もよくやってくれている。

『港湾水鬼の混乱を確認！敵防衛艦隊の損害甚大・・・！勝てます・・・勝てますよ！』

「ふむ。優勢なようだな。こちらも警戒網に異常無し、だ。」

『了か・・・て、敵港湾水鬼の完全破壊・・・！港湾水鬼を撃破したようですよ!!やった・・・やりましたよ!!』

「本当か!!」

『提督は敵防衛艦隊の追撃を開始するそうです！このまま進軍して根室の分屯地に向かうみたいです！』

「よかった・・・大淀、こちらは警戒を継続する、こちらの報告を続けるんだ。」

『は、はい！』

水鬼級を撃破したか・・・よかった。とりあえず危機は去ったか。ならばこちらも仕事を全うしよう。

「こちら長門。各艦、状況を報告せよ。」

「翔鶴、警戒網に異常無しです。」

『五十鈴、ソナーに異常無し！』

『夕立、こちらも異常無し！』

「大淀、こちらは異常無しだ。」

『わかりました。提督に報告します。・・・待ってください。ノイズが・・・?』

「どうした。」

『いえ、少し無線にノイズが混ざっていて・・・上位深海棲艦の影響ででしょうか。』

「わかった。こちらの警戒レベルを上げよう。翔鶴！」

「はい！爆戦を発艦させます！」

「頼む。」

翔鶴が追加で紫電を着艦させて、代わりに艦載機を放った。無線の

異常は見逃せない。気のせいならあとで笑えばいい。警戒を厳とせよ。

「現在0230。あとは、北方棲姫か・・・なんとかして撃破して欲しいものだ。」

「上位深海棲艦というものを、見たことはありませんが。私達が東で相手にならないといけないのですね・・・」

「そうだ。恐るべき戦力をもっている。決して一人で立ち向かうなど馬鹿なことは考えるな・・・」

「はい・・・」

『長門さん、敵の追撃中に、金剛と不知火が大破。他連合艦隊に任せて我々の決戦艦隊は根室に直接向かうそうです。』

「あいつら詰めが甘いな・・・こちらも0400まで警戒を続ける。それ以降レベルを引き下げていく。」

『了解。』

このまま何事もなく、過ぎてもらいたいものだ。まだ空母水鬼も戦艦水鬼も残っている。この作戦、前線におらずとも緊張が張りつめている。気を抜くな・・・集中しろ・・・

—————

—————

—————

—————

—————

「現在0600。各艦、索敵終了。順次帰投せよ。」

『お疲れ様でしたー!』

『はあ・・・全く、嫌な夜だったわ・・・』

『ほおーい・・・お腹ペコペコっほおーい・・・』

「ふう・・・」

「お疲れ翔鶴。すまないが艦載機はみんなが帰ってくるまで偵察を続けてもらえるか？私も水観は出しておく。」

「わ、わかりました!」

戦闘は帰ってきて初めて終了だ。ここで気を抜いて轟沈など目も当てられない。

『聞こえるか・・・こちら司令艦。』

「提督！大湊警備府、異常はありませんでした。」

『よくやった。俺はこれより根室を経由して陸路で千歳に戻る。このあとも警戒を怠らず頼む。港湾水鬼を撃破したことで味方の士気が上がっている。北方の連合艦隊はすでに空母水鬼、戦艦水鬼もかなり追い込んでAL海域に突入した。このまま北方棲姫を撃破する。』

『了解しました。御武運を！』

『ああ、大淀も、気を付けろ。以上だ。』

通信が切れると安堵の息が漏れた。ひとまず何事もなかった。とりあえず夕立達を待つて。食事をとろう。

「うーん・・・！よいしょっと！」

翔鶴も安心したらしい。大きく伸びをする。すると弓以外の艀装が焰のように揺らめいて消えた・・・ファッ！

「しよしよし翔鶴!?おままま艀装は!?!」

「はい？弓は出るので艦載機は扱えるので大丈夫です！」

「いやいやいや！艀装どこいったんた!?!甲板は!?!」

「・・・？格納しただけですけど・・・」

あれか、夕立と同じやつか。でも夕立はドロップ艦で、建造された翔鶴にこんな共通点があるなんて・・・？

「どうなっているんだ・・・？艦娘にも変化が・・・深海棲艦にも新型航空機、新上位種・・・まさか、それで大湊が狙われているのか？」

「お母様、偵察機より報告。津軽海峡、日本海、異常無し！です！」

「あ、ああ、わかった。私は先に工廠に戻る・・・全機戻ってきたら艀装を片付けて・・・」

「はい！」

まあこういうのを、考えるのは、天龍じゃないが、学者がすればいい・・・あとで明石が驚けばいいんだ。

「明石ー！艀装を頼む！」

「あ、長門さん。長門さんは外した時のフィードバックがこわいので

機関部だけは残しておきますよ。提督にも報告済みです。」

「ん？そうなのか・・・じゃあまあ頼むよ。」

「ふむ・・・燃料の補給だけで良さそうですね。弾薬は未使用ですし。ご苦労様でした。」

「うむ。」

疲れた・・・わけではないがこう戦闘体制を解いたり構えたりはなかなか来るものがあるな。それに翔鶴の衝撃の事実・・・ああやっばり疲れた。

—————

—————

—————

—————

—————

「五十鈴、さっきのファイルはどこだ？」

「これよ。」

「ありがとう・・・よし。まとめたから頼む。」

「長門さん！提督からの戦況報告です！」

「わかった。こちらに。五十鈴、被害状況まとめてくれ。」

「はい、以前の被害状況のファイルはどこ？」

「あ、執務室だ・・・」

私は大淀、五十鈴と地下司令部で戦況をまとめていた。千歳から送られてくる情報、こちらでの対空警戒の結果もまとめていた。

「ふう・・・大淀、少し休憩したら？」

「そう、ですね。長門さんも休憩しましょう？」

「ああ。」

「私、間宮さんのところに行ってお茶とお菓子もらってくるわ。」

「あ、いいですねえ」

五十鈴が出ていくと司令部が静寂に沈む。私は被害状況に目をおしながら考え込む。撃沈された艦が多くなる一方でAL海域に追い詰め全力出撃の報があったにも関わらず水鬼達や北方棲姫の撃破報告はない。

「長門さん、大丈夫ですか？」

「ああ・・・やはり私が行ければ少しでも沈む艦を減らせたのでは、と思ってしまうてな。」

「・・・悲しいですが、命令です。私も行けたら役にたてるのではとも思いましたが・・・」

『き・・・ガーガーガー・・・けて・・・』

不意に無線が何かを受信した。現在千歳からの連絡しかない状況で他からの受信となると緊急しかない。

「!!大淀!」

「はい!こちら大湊警備府!こちら大湊警備府!どうしました!こちら大湊警備府の大淀!」

『あ・・・ガーガーけピー・・・』

「よく聞こえない!どうしました!」

『しゅ・・・うは・・・ピーーガーイーこれで・・・ザーイーガーイーあああつ!!青葉あああ!!このおおお!!』

「どうしました!!こちら大湊警備府の大淀!!聞こえますか!!」

『うつ・・・ひつぐ・・・私は舞鶴鎮守府の、生き残りの衣笠です、舞鶴が、襲撃されて、壊滅、救出にきた、呉の艦隊も、返り討ちに・・・ドゴイーイーんっああああ!!ちつくしよおおお!!ドオン!ドオン!ドオン!』

「衣笠さん!返事をしてください!!」

「まさか、北方海域のやつは困・・・!?本土攻撃が狙いか!」

『はあ・・・はあ・・・ザザ・・・大淀さん・・・ごめん・・・私だめです・・・』

「長門さん!翔鶴さんに航空機を!!」

「だめだ・・・間に合わない・・・」

『現在・・・秋田沖・・・はあはあ・・・謎の敵球状航空機と無数の艦隊に、追われています・・・ドゴイーイーんぐああザーイーイー』

「長門さん!横須賀と佐世保に連絡して舞鶴の救援要請を!!」

「わかった!」

『敵は・・・佐渡、から・・・はあ・・・来てる、みたいで・・・ザーイーイー・・・』



ドゴーーーーーン．．．深海棲艦．．．はあ、はあ．．．見たこと  
ないやつが．．．ザーーーーー．．．ドゴーーーーーン．．．基地  
型に追われていて．．．ドゴーーーーーン．．．ぎゃあああつ!!  
ザーーーーー．．．ガツ』

「衣笠！衣笠あーーーーっ!!!くそおっ!!」

「基地型．．．まさか、新たな水鬼級．．．！長門さん!!救援要請をこっ  
ちにしてください！千歳にも緊急連絡！」

「佐世保から救援艦隊が出たが舞鶴沖で深海棲艦と交戦、身動きが取  
れないらしい。横須賀は舞鶴の救援に向かって陸路を移動中。舞鶴、  
呉は壊滅、提督も、行方不明らしい。よって救援は出せるところはな  
い．．．」

「そ、そんな．．．！ち、千歳からも入電！うそ．．．AL海域で空母  
水鬼、戦艦水鬼が形態変化．．．連合艦隊に損害．．．」

「敵の作戦通りか．．．!!日本海側に上位深海棲艦が発現するなど．．．」

『こちら千歳！渡部だ！何があつた!!』

「提督！佐渡に敵上位深海棲艦が出現し北上！舞鶴の衣笠さんが報告  
してくれました．．．球状航空機を使っているらしく、目標は、ここ  
かと．．．」

『うそ．．．だろ．．．すぐ救援に艦隊を．．．』

『ならん！渡部君、今残る艦隊は連合艦隊を回収する艦隊だ．．．大湊  
の救援に出したら連行艦隊をALに取り残すことになる。』

『や、山元元帥．．．し、しかしそれならば私の艦隊に大湊で死ぬと言  
うのですか!!』

『逃げることは許されない．．．逃げればむつの街は深海棲艦の手に落  
ちる。』

『元帥！ならば、ならば非戦闘艦だけでも！』

「提督！私達に長門さんや五十鈴さんを置いて逃げろというんですか  
!?!」

『ぐ．．．！ならば．．．』

『長門。』

「はい。山元提督。」

『長門、私はお前を本当の娘のように思っている。妻も扶桑、伊勢共にとても可愛がっていた。その娘のようなお前にこんな、こんなことを命令したくなかった。』

「山元提督、私はそれ以前に艦娘です。ご命令を。」

『山元元帥・・・!!』

「長門さん！いやです!!そんな命令聞かないでください!!」

『大湊所属長門型超弩級戦艦一番艦長門、帝国海軍元帥が命じる。大湊を脱出する艦隊を援護し、むつの街を守れ。』

「了解。長門、承った。」

「い、いやです！長門さん！逃げましょう、一緒に、一緒に逃げましょうよー！」

『長門、さん・・・つぐう・・・!』

「泣くな提督。娘二人を頼むぞ。」

『長門、すまん・・・すまんなあ・・・』

「そうだ山元提督。ひとつ聞きたいことがある。」

『なんじゃ？なんでも聞け。』

「こういうときに言ってみたい台詞だったんだが・・・別に、敵を全部倒しても構わんのだろうか？」

やあ諸君。長門だ。敵が攻めてきている。大淀や翔鶴達を逃がすんだ。私か？私は戦う。そういう命令だしな。馬鹿野郎お前私勝手でお前。

「……。」

「みんな艀装は付けたな？順次抜錨し、大淀、間宮、明石を中心に輪形陣で千歳基地に向かえ。私が殿を勤め、津軽海峡に出た後に別行動だ。南方よりラバウル、ショートランド、パラオより救援がでるはずになっている。」

「ママ……。」

「私はこの救援が来るまで大湊の町を、本土を守らねばならない。諸君らの武運を祈る。」

「ママ!!」

「……なんだ夕立。」

「夕立も行く!!」

「ダメだ。」

「どうして!!一人でいったら死んじやうっぽい!!」

「死なん。戦艦は簡単に殺せんぞ。」

「今はそんな冗談聞きたくないっぽい!!」

「グダグダいうまえに抜錨し……。」

「電探に感！伏せて!!!」

工廠を抜けようとすると爆音が響き、地面が大きく揺れる。ちっ……もう来たのか。

「敵の攻撃だ!!!早く行け!!!」

「艦載機、発艦しま……。」

「翔鶴!!艦載機はいい!!早く行くんだ!!!」

「でも！お母様が!!」

「三式弾装填!!!てえーっ!!!」

46センチ連装砲が火を噴くと三式弾が天井を突き破り上空を飛んでいく。破裂音が響いたあとに甲殻のような残骸が雨の様に降り

注いだ。きたない。

「見ないで撃ったんですか・・・!?」

「早くでろ!!」

出撃ドックに走り海上を駆ける。煙を上げているのは・・・工廠、大型建造ドックか。

「やはり大型建造ドックをピンポイントで狙ってきたか。ありやもう使えないな・・・」

「警備府が・・・」

「次発装填!!つてえー!!」

衝撃波と爆音が響き八門の砲から三式弾を吐き出す。空中で破裂しタコヤキを撃ち落としていく。

「ひゃー・・・三式弾すごいにやしい」

「当然だ。私を誰だと思ってる。」

「あれ・・・見て・・・!!」

湾内を進む我々は地上に着陸(?)するタコヤキを見た・・・何をしているんだ?

「これは不可抗力だ。敵に大型建造ドックを渡すわけにはいかんな。撃てえー!!」

放たれた三式弾が工廠を吹き飛ばした。もともと引火しやすいものが大量にあったからか大爆発を起こして出撃ドックと入渠ドックを巻き込んで吹き飛んだ。うーんまた作ってくれ。南無。

「まあまた作ればいいいな。」

「電探に感有り!・・・これは、撤退している?」

「大型建造ドックを壊したからか。ならば今の内だ。行くぞ!!」

津軽海峡に出ると、偵察に出していた零式水観から報告があった。岡崎沖に敵の大艦隊を発見とのことだった・・・ここまでか。

「大淀、提督はなんと？」

「工廠を破壊の判断はよくやったと。そして無事でいてくれ……だそうです。」

「無理な相談だな。大淀、私はここで別れ、敵の迎撃に移る。」

「長門さん……やっぱり、一緒に逃げませんか……？無理ですよ、一人で艦隊を相手にするなんて……」

「それでも命令だ。やらねばならん。」

「ラバウル周辺からの救援が来るなんて何時間かかるんですか！高速出撃艦を使つたつて半日以上かかるんです……」

「それでも救援は来るじゃないか。それだけで十分だ。」

「わかり……たくありませんが……わかりました……」

「長門さん！私、お料理も上手になつたんですよ！！親子丼、美味しいつて言わせてみますから！だから……」

「……それはいいがなんで私の中華鍋持つてるんだ？」

「これがあればいっぱいお料理作れますから！」

「……長門さん、やっぱり死に急ぐ人だつたんですね。」

「馬鹿野郎明石お前私は勝つぞお前。」

「私は……嫌いです。長門さんのこと。」

「そう言いつつ結構面倒見てくれたじゃないか。」

「それが、仕事なので。私の仕事減らさないでくださいね。」

「わかった。めっちゃめっちゃめんどいのを持って来てやる。」

まったく、私の決意を揺らがせるような事言わないでくれよ。

「……ほら、早くいけ。」

「長門さんも、さつさと倒してくるのよ。いいわね？」

「……みんな千歳で待つてるにゃしい。」

「あの……私、出来れば、御一緒したかったです……」

「……また、肩車してね……」

みんなが背を向けて出発した……と思うと私の横に水を切る音が二つ……はあ……子は親に似るといふのはこういうことか。

「白露型駆逐艦、四番艦夕立……ステキなパーティーするっぽい。」

「翔鶴型装甲空母一番艦翔鶴、お供しますお母様。」

「何をしてる。」

「ママを守るっばい!!!」

「お母様一人にはさせません！私も付いて行きます!!!」

「そうか・・・頼もしい娘達だ・・・」

「ママ・・・!」

「お母様・・・」

そしてわからず屋だ。私は46センチ砲を二人に向けて・・・撃鉄を落とした。

「ほぎやあーっ!?!」

「きやあああつ!?!お、お母、様・・・なにを・・・?」

「五十鈴、聞こえるか。敵の先制攻撃により夕立、翔鶴の二人が大破した・・・曳航を頼む。」

『・・・わかったわ。私と名取で曳航する。すぐにいくわ。』

もちろん撃った砲は空砲だ。しかし至近距離で接射すれば爆風と衝撃で十分な威力になる。すまん・・・私は娘に手を上げる駄目な母親だ。

「お前達はここで五十鈴達がくるのを待て。」

「マ・・・マ・・・や、だあ・・・!」

「お母様・・・いか、行かないでください！お願い、お願いします・・・」

!!お母様・・・!!!」

「・・・。」

私は何も言わず進む。水観からは報告が途切れた・・・撃ち落とされたのだろう。後ろで二人が悲痛な叫びをあげているが聞いてはいけない。・・・聞いてはいけない。

「提督、敵艦隊を確認・・・長門、出撃する。」

『・・・了解。翔鶴と夕立が大破したらしいが長門さんは大丈夫か?』

「心配ない。この程度ではキズ一つつかないよ。」

『頼もしいな・・・長門さん、絶対生きて帰ってこいよ。』

「無茶を言う・・・おおざっぱに敵は基地型1、空母40、戦艦40、巡洋艦70、駆逐艦80以上の大艦隊だぞ。」

『帰って来てもらわないと困るんだよ・・・長門さんには俺の結婚式で

スピーチをやってもらおう予定なんだから。」

「おお！すると相手は大淀か。」

『よ、よくわかったな・・・』

「こう見えても私も女子だからな。」

『大きな娘がいると聞いたが？』

「おい結婚式で暁の水平線まで吹き飛ばしてやろうか？」

『おお、怖い怖い。』

「しかし、めでたいな・・・これでは覚悟が揺らいでしまう。」

『そんなこつたろうと思つたからな・・・手を打たせてもらつた。』

「ふふ・・・お前はいい提督だよ。会つたときは若造だと思つて・・・」

『・・・よせ。』

「おつとコレもダメか。なかなか手強いな」

『油断も隙もない。』

「なあ提督よ。」

『なんだい？』

「翔鶴と夕立、そつちに着いたら暴れると思うから、ちよつと伝言を頼む。」

『・・・ああ。』

「聞き分けの悪い子は嫌いだ、とだけ。」

『・・・確かに、伝える。』

「ありがとう・・・おつと。敵艦見ゆ。なんとまあ・・・待ち構えてるぞ。」

『・・・数は？』

「・・・1、2、3、4、5・・・ああもう！動くなよ！お前さつき数えたぞ！」

『・・・戦艦長門、敵の大艦隊との接触を確認。これより戦闘に入れ。』

「了解。」

『・・・ピーー・・・これ、ザー・・・なが、さガーーーー・・・ブツツ』

「強制的に無線封鎖か。」

「ヒサシブリネ・・・ナガト・・・」

「誰だ。」

「ヒドイワネ、アレホドアツクヤリアツタノニ、ワスレルナンテ。」

巨大な口の艦装に一体化した体、黒い髪に白い肌。特徴的な角……なんだこいつは……

「敵の顔をいちいち覚えてるなんて面倒くさいんでな。」

「アラ、ジャア、コレヲミタラオモイダス？」

そうやって取り出したのは長門型のボロボロの砲、見覚えのある砲だ。長門型なのに取り付けられているのは35.6センチ……間違いない泊地強襲作戦で使った私の艦装!!!

「お前……泊地棲姫か……!!!」

「アナタタチノヨビナナンテ……ナンデモイイノ……デモオモイダシタノネ……!!!」

「ああ……生きていたなんてな……それにしても随分イメチエンしたんじゃないか？」

「ソウネ……アナタヲシズメタクテ、ズーツトカンガエテルウチニイロガカワツチャツタワ……!!!」

「重い女だな。」

「モウイイワ……ハヤクシズミナサイ!!!」

無数のタコヤキが発艦すると同時に敵の艦隊も砲撃を開始した。空が砲撃と艦載機で埋まる。思い出すな……泊地強襲作戦の時もこうだった。ただあの時と違うのは一人なのと、一步も引けないこと。

「モウ……トベナイノ……トベナイノヨ……ワカル?……ネエ」

「知るか!!ぐっおおっ!!!」

砲撃を避けつつも弾を徹甲弾に切り替える。その間にも嵐のように砲弾が降り注ぐ。

全砲撃が集中するとこんな風になるのかとのんきに考えていると肉薄した駆逐口級が水中から現れた。

「グオオオオッ」

「ジャマだっ!」

お得意の大戦艦本気パンチで後ろに続いた重巡り級ごとバラバラに吹き飛ばす。ふむ、結構本気だったけどこの程度か。なまったか



な・・・

「・・・！」

「次は戦艦かつ!!! ってえー!!!」

一門の砲から放った徹甲弾は戦艦夕級の上半身を吹き飛ばし、離れた位置にいた重巡ネ級、戦艦ル級も貫通、空母ヲ級に着弾して爆散した。

「ナガト・・・サスガネ・・・ソナアナタヲシズメタクナル・・・!!!」

「ちよつと平和ほけしたくらいだが・・・」

『ザーーーーー・・・がと・・・ガーーーーー』

「提督か！聞こえるぞ！こちら長門！」

『ザーーーーー・・・これで、聞こえるか!!! 助かった霧島さん!! 長門聞こえるか!!』

「ばつちりだ！現在敵艦隊と交戦中!! 基地型は泊地棲姫の発展形だ!!」

『泊地棲姫って・・・何十年も前の姫級じゃないか!?! どうして!!』

「知らん！だが存外私は深海棲艦にモテるらしい・・・このつ!!!」

通信の途中だが近づいて来たイ級を蹴飛ばして近くにいたハ級にぶつける。おちおち通信もしてられない。それと一緒にタコヤキの機銃と爆撃を避けながらは大変だ。

『なんだそれ・・・』

「交戦して最初に重ーい告白を受けたよ。返事は砲弾でしてやるつもりだな。」

『わ、わかった・・・これより佐渡より発現した基地型深海棲艦を泊地水鬼と呼称する。長門さん、先ほど通信で北海道が見えたと五十鈴から報告を受けた。無事着きそうだ。』

「それは、このツ!! 良かった!! でりやあつ・・・敵艦の掃除も今のところ順調だ。長門の敵ではない。」

『すまない・・・こんな事をまかせてしまつて』

「ヤクニタタナイガラクタドモメ・・・ナガトオ！クライナサイ!!」

「うわああつ!?! くそつ・・・20インチか・・・」

「フフフ・・・ヨソミシナガラジャツラインジヤナイ・・・?」

『長門さん……いまの声は……』

「泊地水鬼だ……ふふ……空に笑いたくなるような数の航空機が見えるよ。」

一斉に爆弾が投下され機銃を撃ちながら近づいてくる艦載機……これは避けられないな……三式弾の換装も間に合わ……

「ダカラ……ナンドキテモ……オナジナノヨ……！シズメナガトオ!!」

「やあ諸君……等と言っている場合ではないが、長門だ。挨拶は大  
事だ。何やら古い文献にさえ書いてあるらしい。横須賀にいた頃、夜  
戦のヤバイやつが言っていた。」

「ナニガアナタヲツキウゴカスノ……?」

「さてな……美味しい物と、楽しい話があればそれで生きていける。」  
かれこれ……どれくらいたったか忘れた。昼頃に出発したのが日  
が傾いてくるくらいまで。辺りは深海棲艦の体液で黒くなった海、煙  
でふさがれた空、目の前のそして白い肌。

「……カナムス、ニンゲン……ドイツモコイツモ、ウミニワタシタ  
チヲステタニクラシイ……」

私の体は所々焦げて艦装も右半分が無くなってしまった……だが  
まだ三番、四番の砲塔が残っている。体も大分不自由になってき  
た……だがもう手負いの深海棲艦と泊地水鬼の下半身に艦装は破壊  
した。……正直、あの数にやれたこと、驚いている。代償もでかかっ  
たが……

「私が聞きたいくらいだよ。その無尽蔵の憎しみはどこからわいてく  
るんだってな。」

「オシエテアゲルワ……アナタチガイルカラヨ……」

「そんなに私達が憎いか……まあその憎しみは私じゃない誰かに払っ  
てもらえ……」

「フン……ジャアアナタヲシズメテモモンダイナイワネ。」

「そうだな。だが最後に立っていたのは私だ泊地水鬼。」

「イマイマシイナマエ……」

「さらばだ……む?」

……右目が見えん、視界がぶれる。左腕で艦装を構えたが陽炎の  
ように揺れて泊地水鬼は笑っていたようだ。

「フ、フフフ……オマエモ、ゲンカイノヨウダナ……! フフフウフ  
フフフフ……」

「むう……ぐ……」

「ウフフフフ．．．キナサイ！ガラクタドモ!!」

「なにを．．．」

「ウゴゴゴ．．．ギギギギギギ!!」

「ギヤギヤギヤギヤ．．．」

「．．．!!!」

「ガリツ．．．ゴリツ．．．」

「ギヤギ．．．ゴ．．．」

驚いた。こいつ、手負いの艦達を食ってる．．．!?冗談だろ．．．キズもふさがってるし散々徹甲弾ぶち込んで破壊した艦装まで．．．ラスボスは第二形態まであるって．．．?そういえば報告に形態変化した水鬼がいたらしいな．．．はは．．．やんなっちゃうなあ．．．「フツ．．．、イタイ．．．イタイワ．．．ウツフフフフフフ．．．!」

「．．．一式徹甲弾、無し。三式弾、無し。通常徹甲弾、残り8。はっはっは．．．」

「ナニヲ、ワラツテイルノ．．．?アナタハコレカラシズムノヨ?コワクナイノ?」

「．．．なに、まだ私がまだ戦えるからだ。」

「タタカエル?カラダノハンブンガヤケコゲテクチテ、ギソウモハンブンナイ。ナニガデキ．．．ゴガツ!」

「．．．かつて私が言っていた。砲が折れれば拳で、拳が潰れれば足で、足が無くなれば噛みついて．．．すごい執念だと思わないか?」

一発の大戦艦本気パンチで泊地水鬼の艦装を木端微塵に吹き飛ばしてやった。だが、飛行甲板が火を噴いて、どこから取り出したのかタコヤキよりも大きい二機の黒い艦載機．．．はっはっはっは「フフフフ．．．ソウデナクテハ!!」

「はっはっはっは．．．はあ．．．ふふ．．．」

「ウフフフフフ!!」

「撃てえーっ!!!」

残った四門が火を噴く。

「次発装填!!!撃てえー!!!」

「．．．ウフ、ナガト、サツキヨリ、イタクナイワヨ．．．?」

「……。」

「アラ……アラアラ……。」

はっはっはっは……空が高いな。弾薬無し、機関停止、竜骨損傷、半身焼失……左舷傾斜、水没……浸水……はっはっはっは、自分の砲撃がトドメになるとは……せめて敵の攻撃で沈みたかったが、贅沢は言えんか。

「ジブンカラシズムナンテユルサナイワア……クライナサイ。」

「……フツ……んがっ！」

「ウワアッ!？」

ぬけぬけと20インチ砲を向けて来たから噛みついて投げ飛ばしてやった。……あのマヌケ面、笑えたな……

「オノレ、ナガト……ウフフフ……ソウヨネ、ハデニヤラナイトネ。ヒトツ、オモシロイモノヲミセテアゲル!!！」

「……ほお……らしくないな、褒美か？」

「ソウネ、ジゴクヘノオミヤゲヨ。」

……なんだ？汚れた海から……？デカイしっぽに黒いパーカーの、深海棲艦？しかし、なんだこいつ!!顔が、無い……!?

「……ナンドツクツテモ、ウマクイカナクテネ？」

「……なん、だ、こ、いつ!!！」

「……。」

「アナタノトコロニアッタ、アレ、ホシカッタナア……。」

「……。」

謎の深海棲艦は尾にある口から魚雷、背に三連装砲、怪しく黄金に光るヒトデ艦載機が

生えてきた……うわあ……気持ち悪いなあ……

「……。」

「つぐ!？」

「アラ、キニイラレタノネ？」

こいつの腕、イカの足じゃないか!?腕なのに足とはこれ如何に!!!イカだけに!!うわ巻き付いてきて……私を持ち上げるなんて力だ。

「……！」

「うわーっ!？」

「アララ……」

投げ飛ばされ、水面に叩きつけられた私は……艤装が弾け、体の中で三式弾の弾けた様な音がした。するとどうだ。視界が闇に染まって、急に音が遠くなった。体も動かない……これは竜骨が完全に折れたか。体と艤装を繋ぐ竜骨……これが折れてしまっってはあ……ははは、もおダメだな……

「ア……ガト……モウ……?」

「……。」

「ダ……ナイ……パリ、ツクリ……スシカ……クライ……サイ！」

「ギギイイイイ……ゴボ……ゴボボボ……」

「……。」

「フフ……コレ……ワタ……ノヨ?」

「……。」

「シズメ。」

はつきりと聞こえた死の宣告。ゴツリと額に何かが触れる感覚。20インチ砲か。まぶたは閉じているのかどうかはわからない。しかし見えてくる。鳳翔の親子丼、カウンターの向こうから優しい笑顔でどんぶりを出してくれた。朝潮の万年筆、持って来てしまったよ……置いてくれば良かったな。不知火、正直、そんな子だとは思わなかった。だが私はいつでもウエルカムだ。ビス子……一緒に初めていったファミレス、たくさんの仲間に囲まれてご飯を食べた。楽しかったなあ。陸奥……お前少しは友達増やす努力をしろ。大淀……結婚、良かったなあ。でも湯飲みに紅茶淹れるのは勘弁な。金剛が泣く。間宮……すまん。親子丼、食べそうにない。夕立、もつといろんな姿を見たかった。強くなった姿も。可愛い姿も……もつと。翔鶴……せつかく会えたのにお前とももつと思いい出を作りたかった。美味しい物も食べたかった。可愛い服を着せたかった。私の友に、紹介したかった。提督……轟沈者を出して、すまなかった。クリーンな

提督にさせてやれなくてすまない。悪気はなかったんだ。

「司令、大湊防衛に出た、長門さんの艀装、反応消えました……ロス  
トです。」

「長門さん……つぐうう!!!」

「……うそっぽい。」

「……お母、様?」

……。

「マダ……ラクタ……!!……マダ!……ウフフ……ワタ……メルノ……」

「……った!?……く……つてええー!」

「なが……!……うこ……!……こう……ざい……!!!」

「……カマ……?ガラク……ズメ!」

「……オオオオオ!!」

「ま……い!!すい……い!……っしや!」

「……アアア!!ゴボ……」

「バケ……かいめ!」

……。

「うわ……しいこうそ……やいわ。」

「どう……がとは……れいになっ……」

「……がは、わた……ずまんよ。」

「ながとさ……さすが……かんね。」

「やくそく……な。」

なんだ……眩しいし、うるさい……おちおち寝かせてもくれないのか。ほんと、戦場は地獄だな。

「長門!!」

「意識が戻った!?おーい明石!速吸!バケツもう一個だ!!」

「はい!」

「長門、いま助けるから!遅くなって、ごめんなさい……」

扶桑……?伊勢……?何もお前たちまで地獄に来ることはないだろうに……情けも慈悲もないとはこのことか。

「第一砲塔、目標敵重巡、第二砲塔、目標敵駆逐2、第三砲塔三式弾切り替え、敵航空機、第四砲塔、敵戦艦。撃てえー!!」

地獄も戦争中なのか……?仏が攻めてきたのか……?まあいい、ただどうるさいんだよなあ……

「バケツ!お待たせしました!」



「長門、ごめんなさい！」

「・・・？わぶわぶわぶ」

私の刑は湯攻めか・・・なんか妙に頭がすつきりしてきた。私は、そうだ泊地水鬼との戦いで！

「ぶはっ!!扶桑おおお!!!溺れさす気か!!!」

「長門！良かったあ・・・戻ってきたのね・・・！」

「戻っ・・・んんん？」

扶桑、伊勢、二人とも艤装もないのに水上にたっているぞ・・・!? どうなっているんだ!? 辺りを見渡せばたくさん艦娘、駆逐艦から戦艦まで、艦種は様々だ。私は確か一人で戦っていたはずだが・・・「私は、確か・・・泊地水鬼に沈められたはず・・・？どうなってるんだ？そ、それに、扶桑！お前艤装はどうした!?こんな戦場のど真ん中に砲も持たずにくるなんて・・・!?」

「ふふ・・・大丈夫よ。」

「ああ、艤装はちゃんとある。」

そういうと扶桑と伊勢の周りに焰のようなものが揺らめくと艤装の形にまとまって・・・う、えええええ!?

「な・・・おま・・・それ、夕立と一緒に・・・!?」

「やっぱりそうなのね。」

「そつか、じゃああの噂の新型艦娘つてのはドロップ艦から開発だったんだな・・・」

「・・・全然話がわからん・・・私は沈んだ筈では・・・」

「大丈夫よ、長門は私が沈ませなかった。」

「明石の泊地修理と新型高速修復材のおかげでな。」

「新型・・・？」

「ああ・・・とまあお話は後だ。まずは一杯食わせてくれたアイツに礼をしなきゃな。」

「ええ・・・私の妹にここまでしてくれたんだから・・・ちゃんとお礼しなきゃね？」

「い、妹だと？お前達には山城と日向という妹が・・・」

「山元三姉妹の妹は、あなたよ、長門？」

「はあ．．．まあ、いい。」

「ほら、病み上がり悪いが、復活してこれから敵を殲滅するって味方を鼓舞してくれ英雄のお姉さん？」

「．．．は、はあ．．．わかった．．．」

いつの間にか直っている艦装．．．おかしいな確か右半分吹き飛んだ筈なのだが．．．体もおかしい所は何もない。むしろ古傷の火傷までキレイになっている。新型高速修復材、恐るべし。

「やあ諸君!!長門だ!!!不覚にも敵の攻撃を受け、大破したがもう心配はいらない!!!諸君らの力を合わせ、悪名高き泊地の名を冠す水鬼をいざ討ち滅ぼそう!!戦艦、前へえー!!!」

ざざと波を切り、伊勢型、扶桑型、長門型と並ぶ。長門は私を会わせ二人、もう一人には見覚えのあるヘアピン．．．まさか。

「もしかして、君は．．．単冠湾の？」

「気づいたか、英雄。」

「か、解体されたんじゃ．．．」

「貴方に救われた。貴方にあの病院を紹介されなければ、こうして再び戦場に立つなど出来なかった．．．そして今ここに集まった艦娘全てが、過去何らかの形で貴方に救われた艦娘ばかりだ。」

「さっぱり．．．実感がわかんない。」

「それより早くしなければ、食い止めている物達も限界はある。」

「ああ．．．目標、泊地水鬼！各艦、全砲門、開けーっ!!!」

「ゴオオオオノオオオオ!!!ガラクタドモオオオオ!!!」

「しまっ．．．」

泊地水鬼が重巡達の攻撃をかいくぐり、やつの20インチ砲が私に向かい牙を剥いた。

復活即大破は悲しすぎやしないか．．．

「オオオオオオオオオオオオ!!!ナガトオオオオオオオオ!!!」

「ハアアアアア!!!」

だが私には20インチだろうが51センチだろうが関係無い。また．．．帰れるのであればわざわざその可能性を捨てる等というバカはあしない!

「フンッ!!!」

鋼と鋼がぶつかり砕けるような甲高い音がして20インチ砲弾を裏拳で弾き飛ばした。

絶好調のようだな。

「良い調子だ。」

「流石だな英雄。」

「それほどでも。」

改めて狙いを定めると泊地水鬼が重巡艦娘や軽巡艦娘に邪魔をされ、獣の雄叫びのような叫びをあげている。そんなに私が憎いか……

「一齐射!!撃てエー……ッ!!!」

爆音と共に鋼鉄の塊が産声を上げて飛んで行く。砲弾は泊地水鬼に吸い込まれるように向かっていき、命中炎上……頭を失った深海棲艦は泥のように溶けて海に帰った……この様な形で大湊防衛線は無事終了した。しかし私にはたくさん謎が残った。扶桑、伊勢の艦装。戦線復帰不可能と言われた長門。文字通り完全修復された私……帰ってお茶でも飲みながら、ゆっくり聞くとするか。

『……こえるか?こちら長門。』

「長門さん!?!」

「ママー!」

「お母様あ!!!」

『……マイクに近いぞ。夕立、翔鶴。大分苦戦したが、援護艦隊が到着。泊地水鬼を撃破し、大湊防衛に成功。これより、千歳に向かう。』

「長門さん?こちら渡辺。援護艦隊とは……」

『替わりました。援護艦隊旗艦の扶桑です。お久しぶりですね、渡辺さん。』

「お久しぶりってことは山元元帥の!」

「わしがどうかしたかの。」

『提督？扶桑です。なんとか、間に合いました。』

「間に合った・・・ということ、あれは成功だったのかの？」

『長門救出と実戦試験を同時だったのですが・・・良好です。問題ありません。』

「わかった・・・」

『・・・山元提督、長門です。今回のこと、私には何がなんだか・・・』

「それもこつちに来てから説明しよう。長門、無事で良かった・・・」

『・・・わかりました。』

「ママああああ!!!」

「お母様・・・あぁっ・・・」

「ちよ・・・翔鶴!?!明石!明石いー!」

「・・・通信終わり。さて・・・さっくり説明してもらおうぞ扶桑。」

「ふふ・・・そうね。長門の驚いた顔も面白いけどそのままだと威厳に  
関わるわね。」

「ふざけている場合ではない！轟沈同然だった私を復活させたことと  
か、戦線復帰不可能と言われた単冠湾の長門、そしてお前達の不思議  
な艦装だつて！なにがなんだかわからんよ・・・」

援護艦隊は結構な大艦隊になるのだが艦装を出したままにしてい  
るのは私だけ。みんな夕立と同じように艦装を出したり消したりし  
ていた。どうなっているんだ本当に。私だけ仲間はずれだ。

「まず・・・長門が知らない間に起きたことね。本営では妖精さんの技  
術を解析することを進めていたんだけど・・・以前はうまくいってな  
かった。ここまでは知ってるわよね？」

「ああ、妖精さんは、教えてくれたこと以上は決して話さなかった。」  
「山元提督が元帥になってからまた妖精さんとのコミュニケーション

が再開して新しいことを教えてくれるようになったの。それが新型艦娘。」

「新型、艦娘?」

「ええ……この新型艦娘の技術は以前私達が生まれた時よりも遥かに上位の技術だった。しかし人間でも再現出来る程度に抑えられた……」

「ふむ、それがどう関係しているんだ?」

「新型は今の艦娘と作りが根本的に違う。その為に建造、改修、入渠、解体全てのシステムが見直されることになったのよ。」

「……ふむ。」

「建造は時間が短縮され、改修は今まで船魂の強化程度にしか行えなかったものを体や艀装までいじることが出来る様になり、入渠も時間短縮、効率化、新型高速修復材の登場。解体は艀装と船魂のつながりを解除し、体を人間にして普通の女の子にすることが出来るようになった……」

「お、多すぎてわからんよ……」

「その、改修、今は近代化改修と言うそう。それを受けると艀装を艦娘の意志で出し入れ出来る様になる。」

「長門……」

「英雄、本当に世話になった。あの時、あの場所で貴方に出会わなければ私は解体されるだけだった……感謝する。」

「その、長門は近代化改修で艀装と体を改修して戦線復帰したと……?」

「ああ、だがやっぱりまだ不確定な技術らしくてな。近代化改修を施したら、見てくれ、屈曲煙突だ。どうやら元の姿通りに、と言うわけにはいかなかったようだ。妖精さんが散々謝ってくれたよ。」

「若返ったのか……!?!」

「そういうことになる。」

「私もーちよつと前まで指一本動かせないくらいの重症で、寝たきりだったんだけどな。近代化改修したら……この通りだ。」

「飛行甲板……!?!伊勢は老けたのか!?!」

「だれがババアだ!!」

「そんなことは言っていない!」

「こんな感じで・・・今この援護艦隊にいる艦娘はみんな横須賀の軍病院で戦線離脱してた子達だったの・・・みんな大侵攻を生き抜いた猛者だけど。」

「・・・へえ。」

横目で皆をみれば確かに眼光が違う。戦士の目だ。頼もしいっただけありやしない。

「それだけじゃない・・・みんな貴方と戦ったことがある艦娘達なのよ?」

「・・・私は昔は戦いばかりになりすぎて、そんなに日常は覚えていないんだが。」

「いいのよ・・・私達が、覚えているもの!」

「・・・ありがとう扶桑。」

「それで近代化改修が終わったところで、舞鶴が強襲されたって連絡がきたんだけど、もう遅くて・・・そうしたら大湊に侵攻中だって聞いたじゃない?みんな、長門を助けに行くって息巻いちやって。大本営書記の権力をちよちよっとして、出撃してきたの。」

津軽海峡を進みながら・・・いろいろ考えをまとめようと・・・だめだ。難しい、要するに・・・

「時代が変わるって事か・・・」

「・・・でも、戦いは続くわ。」

「戦いは終わっても英雄は語られつづけるぞ?」

「こりゃー山元三姉妹の伝記とか出るかね?」

「もう、伊勢・・・誰にかいてもらおうかしら?」

「はっは!誰か文章が書ける奴がいたか?私は無理だ。」

「伊勢と長門には最初から期待していません!」

「なにー!?!」

「なんだと!?!」

「ふふふ・・・艦種は違えど、本当の姉妹のようだ。私はまだ単冠湾で陸奥が建造されていないから羨ましいよ。」

「すぐ会えるわ。きっと。だってこれから時代が変わるもの。」

「お前も長門だろう？しつかりしろ。」

「そうだな、どつしり構えて・・・気長に待つよ。」

「うむとりあえずは・・・だ。帰ろう、提督のもとへ。」

思えば転生してからすごい人生だった。長門として生きてきた時間は波瀾万丈、獅子奮迅だ。海の隅々まで戦いまくった。

「おおおー！」

「提督！おおおーい!!!」

もう元の自分がどうだったか忘れてしまった。忙しすぎて。戦いすぎて。

「長門さんは入渠ドック・・・ってあれ？傷一つ無いな・・・むしろキレイになった・・・？」

「な・・・！提督！貴様大淀という者がいながら!!!」

「ま、待て長門さん！違う！そういう意味じゃなくて！拳！拳！拳！拳！拳！拳！拳！！」

「英雄よ、貴方の提督は面白い人だな！」

「長門？渡辺提督はそういう意味で言ったわけではないのよ？わかる？」

「わかっている。私を単身突撃させたんだ・・・これくらいの冗談許せ。」

「寿命が縮んだ・・・じゃない。長門さんはとりあえずドック！他の援護艦隊の皆さんは補給の後、出撃をお願いします！」

気がついたらどの艦娘ともあんまり仲良くなれてなかった。ぼっちになった。陸奥とさえも会話はあまりない。

「出撃、ですか・・・」

「ああ、AL海域でまだ水鬼が二体と北方棲姫が残っていて・・・連合艦隊の決戦支援艦隊として出て欲しい。」

「わかりました・・・皆さん！聞きましたね！！私達はこれからAL海域に出発します！久しぶりの戦闘ですが・・・なまっている場合ではありません！友を、救いに行きましょう！！」

「！！」「オオオーーーーーッ！！」「！！」

「ありがとう、扶桑さん・・・補給はこっちです！」  
「・・・。」

これはいかん。ちよつと忘れていたがやっぱり転生はいちやいちやしてなんぼだろう。

「・・・？長門さん？長門さんはドックですって。」

「仲間外れは良くないなあ提督。」

「何言ってるんですか！長門さんは轟沈同然だったんですよ！！それを・・・」

「大丈夫だ！」

「!?」

「大丈夫・・・なんてったって、最強の友達と。」

「夕立、準備万端ぽい。」

「翔鶴、いつでも行けます。」

「最強の娘達と一緒にだからな。」

「・・・ビスマルクさんに知られたら俺どうなるんだろう・・・？」

「どうとでもなるさ。」

なので少し、積極的になっていこう。

「戦艦長門、出撃する！」

戦艦長門、出撃する。



—  
完  
—

## epilog 私と艦隊これくしょん

やあ諸君・・・久しぶり、だな。

「司令官！お手紙です！あっ！後、新しい仲間が来たみたいですよ！」  
「ふむ、わかった。新入りの艦種はなんだ？」

「装甲空母が1、練習巡洋艦が2、駆逐艦が1です！」

「ありがとう吹雪。四人は講堂に集めてくれ。すぐ向かう。」

艦娘は変わった。昔の様に大型の艦装を扱う巨大な工廠が必要な  
なくなった。装備は手のひらほどの小さなカードで管理され、艦娘の船  
魂自体もB5程の札で保管される。鎮守府の数も多くなり提督の数  
も昔の倍近くなっている。

「ふむ・・・大鳳に、香取、鹿島・・・秋月か・・・戦力は充分整って  
きたな。南方海域攻略の為の訓練をさせなければ。」

「お母さ・・・提督！」

「翔鶴・・・次、間違えたら。おやつ抜き一週間だからな。」

「そ、そんなあくー！」

「それで？なんのようだ？」

「大型建造で装甲空母が建造されたって聞きました・・・」

「会ってみたい・・・と。」

「はいー！」

「構わん。付いてきなさい。」

「ありがとうございますー！」

この多くの提督が艦娘の船魂や装備を集める様子を見て、誰かが艦  
隊これくしょんと呼んであつといまに広まった。今では艦娘の提督  
を艦これ提督と呼ぶらしい。

「翔鶴、夕立はどうした？」

「お姉様は、今日、潜水艦の訓練に標的艦として参加しています。」

「あとで行く時があればほどほどにしろと言って置いてくれ。」

「はいー！」

建造も長くても十時間もかからず、装備を作るなども一瞬。これく

しよんのし易さは昔と大違い。昔は一隻建造するのに何日、何週間とかかるものだったのに。

「・・・翔鶴、それと・・・」

「ママああああああ!!!」

「ぐはっ!!」

「お、お姉様！ダメですよ！お母様は今は普通の人間なんですから・・・！」

「でもママは夕立のママだから大丈夫だよ？」

「そうだ、私は無敵だ。侮るなよ。」

「ひえく・・・」

「それより夕立、標的艦として訓練に参加したそうだな。どうだった？」

「爆雷投げたらみんなすぐ浮いて来ちゃってつまらないし、訓練不足がにじみ出てるよ。」

「やはりオリヨクルか・・・」

入渠修理などもすごい。例え腕がちぎれようが足をもがれようが入渠ドックのお風呂に入って高速修復材を使えば元通りだ・・・船魂が札に分離してるから体は直しようが効くのか・・・？・・・大昔も大昔、遠い昔の記憶らしきものに、魂を体から宝石に移して怪物と戦うテレビ番組があったような・・・まあそれはいい。

「潜水艦共に三日間の休暇・・・その後再訓練だな・・・」

「ママこれからどこっぽい？」

「提督と呼びなさい。これから新入りと顔合わせだよ。」

「夕立もいくー!」

「・・・仕方の無い奴だ。」

解体もそうだ。艦装と船魂を素体から分離し、人間にする。そうして人間になった艦娘に仕事や学校を斡旋し、何度も鎮守府から送り出してきた。昔は、船魂を体から妖精と人間の手で外科手術で取り出して解体していたのだが・・・この話はよそう・・・

「あ！司令官！夕立さんと翔鶴さんもこんにちは！準備出来ていますよ!!」

「わかった。」

そうそう、私は今、柱島泊地で提督をしている。私はあの日、北方海域奪還作戦が終わると解体を申し出た。このままでは私は再びポロポロになるまで戦うだろう。そうなつてはせつかくの友にまたいらぬ心配をかけさせる・・・と。

「諸君、私がここ柱島泊地の提督、山元長門だ。歓迎しよう。盛大にな。」

「「はっ！」「」」

「出迎え、ありがとうございます。提督…：貴方と機動部隊に勝利を！」

「練習巡洋艦、香取です。よろしくお願いいたします。」

「練習巡洋艦鹿島、着任です。うふふつよろしくお願いします！」

「秋月型防空駆逐艦、一番艦、秋月。ここに推参致しました。」

「うむ。夕食の時にささやかながら歓迎会を開く。期待している。」

「「ありがとうございます！」」」

ともかく、時代もやりかたも大きく変わった。艦装が外部装着の札式になる前の艦娘、旧世代の艦娘もがんばってはいるが、もう大侵攻中建造の艦娘でも稼働年数が百年以下の艦はいない戦う骨董品と化した。しかも強い。しかし時代の波には勝てず、徐々に解体されて普通の生活を送っていると聞く。

「まず、大鳳はこの翔鶴と点検、香取、鹿島、秋月の三人は夕立との艦装の試運転件模擬戦。この二人はうちで最高練度の二人だ。遠慮無く立ち向かってやれ。それが終わったら秘書艦吹雪に施設の案内をしてもらってくれ。」

「大鳳さん！頑張りましょうね！」

「装甲空母なんて、私一人だけかと思いましたが・・・嬉しいです。頑張りましょう！」

「ほーい!!模擬戦！早く演習場行こう？」

「はい！」

「まって秋月さんまだ提督の挨拶、終わってないわ。」

「あっ!?!しまった・・・」

「大丈夫ですよ・・・きっと優しい提督さんです。」

深海棲艦も・・・絶え間無く襲ってきている。しかし北方奪還作戦を後に本土まで攻めてくることは無くなった。逆に怪しいくらいだ。そして、上位深海棲艦が定期的に生まれ落ちているという事実。あれほどの戦いを何度も何度も繰り返さなければならぬというのは・・・恐ろしいものがある。だが妖精謹製の羅針盤がある。これがあれば絶望的な危険から確実に避けられるようになった。安全に(?)戦闘海域を進むことが出来るのは良い。

「君たちから質問がなければ以上で挨拶とする。何かあるか？」

「・・・。」

「無いようだな。吹雪。」

「はい！」

つい先日、私の友、天龍が解体された。これで大侵攻を知る艦娘は一人もいなくなった。艦娘の時代が完全に切り替わったのだ。これからは新しい彼女達が深海棲艦と戦い、人類を勝利に導くのだ。私達が成し得なかったことをやりとげて欲しい。

「以上で司令官の挨拶を終わります！これからは先ほどの指示通り私が後で施設をご案内します！」

「はい！」

「これから私達は深海棲艦と戦います。いつ終わるかもわからない、長い長い戦いです。先代の艦娘から託されたこの思いを胸に秘め、日々を生きて行きます。」

「・・・。」

「今までの戦いで散っていった者の為にも、自分もとは言いません。今を生きるているのは私達だからです。しかしその今を生きる時間を無駄にするのであれば、今を生きる仲間達への裏切りです。今をしっかりと生きること。この言葉を心に刻み、暁の水平線に、勝利を刻みましよう！」

艦隊これくしょん！はじまります！

## 外章 艦隊これくしょん

### file4 ビス子

Guten Tag 私はビスマルク型戦艦のネームシップ、ビスマルク。と、言っても元だけど。艦娘運用システムが一新されてから私は解体を申し出て、退職金をもらって艦娘を引退した。今は呉の港町でそこそこのいいマンションを買った。

「マミー!!!おやつはまだデースカー!」

「こら!!手は洗ったの!?!うがいは!」

「したデース!」

「じゃあ大人しく待ってなさい!今シユトーレン出すから・・・」

「マミーのシユトーレンは大好きネー」

引退した艦娘には新しい名前が与えられる。私は美代子だった。日本語はまだ難しいが、『美』という漢字は『び』とも読めるらしい。元ビスマルクだから『美』という漢字を使い美代子という名前になった。

「はい、どうぞ。紅茶も淹れるから、お湯が沸くまでもう少し待って。」

「いただきマース」

「こら!ちゃんとフォークで切り分けて食べなさい!あーあー食べかすが・・・」

「美味しいネー!」

「・・・そう?良かった。」

このちっさい子は元金剛。名前は可奈子となった。『金』という漢字は『かな』と読めるから・・・と山元提督が言っていた。というか艦娘の新しい名前の命名はだいたい山元提督が付いている。・・・本来、解体されると艦娘の姿が著しく変わるといふのはありえないが、この子は特別だ。新解体システムのテストベッドとなった艦娘だ。私があるとある方法で匿っていた金剛を差し出したのだ。山元提督は渋い顔をしたが・・・どうしても救いたいと言ったら許してくれた。

「ほら、紅茶。ピーチティーよ。可奈子好きでしょ?」

「もぐもぐもぐ!」

「口に入れたまま喋らないの・・・」

テストは半分成功と言った感じ。武装解除には成功、だけど体が幼く記憶も幼子同然になり、私はその金剛を引き取った。今では娘として暮らしている。

「はぁー紅茶美味しいデース。」

「そういえばアツサムの茶葉が切れてたわね。可奈子?おつかい行ってきてくれる?」

「オツケーデース!」

「ほら、ちゃんとコート着なさい!お金、無くさないようにちゃんとカバンに入れるのよ。知らない人に付いていっっちゃダメよ。」

「ハイ!」

「ふう・・・」

他のみんながどうなったかはわからない。基本的に解体された後の情報はプライバシーがどうたらということ教えてはもらえなかった。解体されたことまで知っているのは何人かいるが、どこに行ったかはわからない・・・

「長門・・・扶桑・・・伊勢・・・天龍・・・今どこで何してるのかしら。」

「コート着たヨー!」

「ボタン掛け違えてるじゃないの・・・ほらこっち来なさい。」

「ハイ。」

「・・・はい、いつてらっしゃい。」

「行つてきまーす!」

可奈子が飛び出していく・・・この光景は何度も見た。ってまた開けっ放し!!

「こらー!開けたら閉めなさいって言ってるでしょおー!」

「ソーーーーリーーーー!!」

「まったく・・・」

「うふふ、可奈子ちゃん元気ねえ」

「あ、管理人さん・・・すみません騒がしくて・・・」

「大丈夫よお。これ、あたしの田舎でとれた林檎。お裾分けよ。」

「そんな、申し訳ないです。」

「いいのよおいっばいあるからみんなに配ってるの。美味しいわよ？」

「・・・いただきます。」

「うふ正直な子は好きよお？親一人で大変みただけど、頑張つてね。」

「ありがとうございます。」

「それじゃあね。」

マンションの中でもご近所付き合いなどは良好だ。私が元艦娘でも暖かく迎えてくれた。むしろ英雄のいるマンションとして有名になったと管理人さんが喜んでいた・・・

「林檎・・・いっばいもらっちゃった・・・ふふふ」

テレビでは輸送艦隊が襲撃されたとか、南西で大勝利を収めたとか様々な情報が流れている・・・別なちゃんねるにすれば二人組の警察が暴れるドラマやジェネラルが大暴れするドラマの再放送をしている。もう何度も見た。

「ひまねー・・・」

可奈子は学校だ。小学五年生。転入もさくつと終わった。ちよつと数字以外の勉強は苦手な様だが友達も多くて困ったことは無さそうだ。

「あぁー・・・長門とか扶桑とか・・・今何してるのかしら・・・」

セーターがしわになるのも気にしない。そのままソファーに転がって・・・あぁー・・・

「うーん・・・買い物・・・別に必要なものも無いし・・・」

そういえば私には趣味らしい趣味がない。引退したときもまだ金



剛の記憶が抜けきっていない不安定な可奈子の面倒をみることで精一杯だったから自分のことなんて二の次だった。

「んー．．．いつも暇しているとプリンツがやってきたのは．．．そういうことだったのかんあ．．．」

そんな感じでしたら知らしていると呼び鈴がなって．．．宅急便とか頼んだかしら。それにしてもこの通話モニターって便利よね。

「はーい」

『久しぶりだなビス子』

「え!?!長門!?!」

「久しぶりだなビス子。」

「な、長門!？」

訪ねてきたのは長門だった。白い第二種軍装を着て……つてまだ海軍にいるの!？」

「な、あんた、まだ海軍にいたの……!？」

「ああそうだ。解体された後山元提督の計らいでな……いまは柱島泊地の提督だ。あがつていいか？」

「い、いいわよ?。」

長門がドアをくぐる前に手を払うと私の死角から第一種軍装を着てサングラスを付けた長身の銀髪と少し背の低い金髪が二人、ドアの前で見張るように立った。

「……仰々しいわね。なにかあったの?。」

「ん……いや、特には。あの二人は護衛だとき。絶対付いて行くとうるさくてな……。」

「あつそう……お茶入れるから座って待つてなさいよ。」  
「すまんな。」

長門は急に何しに来たのかしら……今までなんにも連絡寄越さなかったのに……でも軍服で来るつてことはソレ関係なのかしら。護衛までいるし。あの二人艦娘よね?いいのかしら。

「はい。ピーチティーだけど。」

「ずいぶん可愛いものを飲むんだな……待てよ、これは私だけで自分分はビール飲む気だな?。」

「阿呆か!!昼間つから酒なんて飲まないわよ!。」

「むう……昔のお前なら間違いなく飲んでただろ。」

「もう違うのよ。」

「……そうか。」

ほんとなにしに来たのよ。ちやかしに来たわけ?。

「そういえば、他に解体されたみんなは何してるの?扶桑とか伊勢とか。」

「扶桑と伊勢は私と同じ提督だ。扶桑は宿毛湾泊地で。伊勢は佐伯湾泊地にいる。」

「ふーん……そういえば貴方、長門のままなの？名前もらわなかったの？」

「山元提督に解体された後は提督になると言っておいたから名前は変わってないよ。ただし山元性を名乗ってはいるがな。」

「へえーなんか身内びいきみたいね。」

「別に名前くらいどうってことないだろう。」

「それもそうね。」

「マミー……！！！！」

「あ、帰ってきたわね。」

「誰だ？」

「マミー！玄関の前に怖い人いるヨー！マミーにしたの？」

「なんで私が何かした前提なのよ！ほら、外から帰ってきたらどうするの!？」

「ただいまデース！」

「はい、おかえり。それだけじゃないでしょ？」

「ハンドウオツシュネー！！」

「うがいもするのよ！」

「まったく……可奈子はお客さんがいるいない関係無しね……ちやんと教えてあげないと……」

「あのちびっこい金剛は……なるほど。テストベッドの……」

「あら知ってるの？」

「まあ、な。」

「長門がお茶を飲んでいると可奈子が洗面所から飛び出してきて……」

「マミー！おやつが欲しいデース！！」

「はいはい……それより、お客さんがいるでしょ？ご挨拶は？」

「へーい！こーんにーちはー！カーナコデース！よろしくお願ひしマース!!おねーさんはフーアーユー?！」

「私は長門。ビス子……君のお母さんの古い友人さ。ちよつと用事があつて訪ねてきたんだが……」

「用事？それなら早くいいなさいよ。もう一般人の主婦の私に何か出来るとは思わないけど……」

「んー……忘れてしまった。」

「はあ？」

「へーイ？物忘れは老化のはじまりって言うネー。」

「うぐ……確かに生まれた年から数えるともうおばあちゃんだけども……！」

「このバカ！失礼でしょ！」

「うぐう……ソーリー……」

「いいんだ……ま、用事は忘れてしまったし、今日はお茶飲んだら帰るよ。」

「ほんと何しに来たのよ……」

「友の顔を見に来るのに理由なんていらないだろう？」

「……そうね。」

「お茶、美味かったよ。」

「もう帰るの？」

「これでも多忙な身なんだ。」

長門を玄関まで送ると玄関が開いてさっきの二人が長門からカバンを受け取った。荷物持ちがいるなんてブルジョワか。

「意外と……お母さんが似合ってるな。ビス子。安心したよ。」

「余計なお世話よ。長門こそ、ちゃんと母親出来てるの？甘やかすだけじゃダメなんだから。」

「そうですね。最近昔より甘やかされるようになった気がします。」

「このあいだ単独で偵察任務しただけで間宮券十枚もくれたっぽい。えこひいきっぽい。」

「!？」

「へえ……母親としては私が上ね。」

「ぐぬぬ……」

ま、戦場にいるなら……そうよね。

「……また、遊びにくるよ。ちゃんとお土産持ってな。そうだ、鳳翔の店にも行こう。美味いぞ。」

「いいわね。」

「・・・ビス子。」

「ん？なに？」

「・・・いや、何でも無い。それじゃあまたな。」

「・・・ええ。」

玄関が閉じられて部屋に静寂が戻った・・・それも可奈子がすぐぶちこわすんだけど。

「マミー？あのお姉さん、病気かなにかなんですカー？」

「え？どうして？」

「ずーっと辛そうな顔してたデース。」

「・・・大丈夫よ。困ってたらすぐ言うから。あいつは。ほらおやつに

しましょ。今日はバウムクーヘンよ。」

「口の中ぱっさぱさになるネー・・・」

「嫌なら食べなくていいのよ？」

「食べないなんて言ってナイネー!!!」

「・・・お母様、結局、ビス子さんにはお話しなかったんですね。」

「ああ・・・ビス子はもう平和を手に入れている。それを私が崩してはならない。」

「・・・じゃあどうするっぽい？」

「ん・・・久しぶりに渡辺提督にでも聞いて見るよ。今軍学校で教鞭奮ってるらしいからな。良い人材の一人や二人紹介してもらおう。」

「渡辺提督・・・ご愁傷様っぽい。」

「お母様、それでは次は横浜ですか？」

「そうだな。運転頼むぞ翔鶴。」

「はい！任せました！」

特別章 過去編

page 34 私と誕生

やあみんな・・・私は・・・私は誰なんだ？ここはどこだ？薄目を開けて見るが水中であると言うことぐらいしかわからない。確か仕事から帰って来て・・・仕事？なんの仕事だっけ・・・布団に入ったことは覚えてる・・・覚えてるが・・・わからない。何があつて水中にいることになるんだ？

「・・・い・・・れが・・・」

「・・・うだ・・・んの、たか・・・」

話し声がある。うまく聞き取れない。誰かいるのか？いるなら私をここから出してくれ。身動きが取れないんだ。

「・・・けます。・・・ひを・・・」

「・・・ぶだ・・・」

ガゴンツツツと大きな音共に水が抜けていく、ああ出してくれるのか。助かる。

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・

「・・・ふうーふうー」

「おおっ立ったぞ！」

「成功だ！」

私が出て来たのは・・・なんだこのシリンダーは、私はこんなものに入れられていたのか？そしてなんだこいつらは。揃いも揃って白い軍服・・・軍服？なんで軍服ってわかったんだ？ちっこい生き物もいる。ちっこい生き物はわーきゃーと騒がしい。

「よく産まれてきてくれた。私は山元はじめ。君の名前を教えてくださいな

いか？」

私の名前……？思い出せない……いや、そうじゃない。名前と聞かれて頭の中に浮かんでくるものがある。

「私は……私は長門。敵戦艦と殴り合いなら任せておけ。」

「よろしく長門。早速で悪いが君の実力を確かめたい。演習場へと向かってくれないか？」

「わかった……演習をすればいいのだな。」

「そうだ。艦装はこちらにある。すまないがよろしく頼むよ。」

演習……演習をするのだそうだが私は戦ったことがない……一体どうすれば良いのだろう。そんなことを考えつつも案内に身を任せ、艦装とやらを身につけた後、演習場と思われる場所に向かった。

……  
……  
……  
……

天気は快晴。されど波高し。といったところか。

「……動く。なんだこれ。」

身につけた艦装の砲塔をウインウインと動かしながら演習場で待つこと十分。通信らしきものが聞こえ始める。

『あーあー、聞こえているか』

返事をどうしたら良いのか迷っていたが普通に声に出して呼んでみることにした。違ったら考えよう。

「聞こえている。」

『良かった。通信機能も無事付いているようだ。妖精さん様々だな』

妖精さん？妖精というからにはそれらしい見た目のだろうと考えたが、さっきの場所で見たちっこい生き物のことではないかという考えに至り、1人納得していた。

「それで、私はどうしたら良い。」

『海上に標的が見えないか？まずはあれを撃つてみて欲しい。出来る

か?』

「ふっ．．．私を誰だと思っている。」

口を開けばそんなことばかりだが勝手に出ているので何とも言えん。尊大すぎやしないだろうか。

『そりゃあ救国の戦艦長門さ。撃つタイミングは任せる。そっちのペースで始めてくれ。』

「了解。」

ちらつと水平線の方へ見遣ると赤い丸が見える。そこそこ離れて揺れているが私は何故か命中させられるという自信に溢れていた。

「目標確認撃ち方はじめ!」

ウインウインと砲塔が動き出し狙いを定め、固定される。足元の揺れ、波、その他諸々計算し．．．計算し、計算出来てるな。不思議だ。そんなことやったことないのに。

「てーっ!!」

撃鉄が降ろされ爆音と共に砲弾が吐き出される。飛ぶ砲弾は波間を斬り裂き標的へ命中する。

「．．．ふう」

『すごいな。全弾命中だ。これを戦闘中でも出来てくれれば良いが．．．』

「問題無いよ。やってみせよう。」

『頼もしいことだ。次は航行しながらの射砲撃だ。頼む。』

「心得た。」

よし今度は動きながら当てて見せろとのことなので次の標的へと向かい、そのまま撃った。あつ二発撃ち漏らした。くっそー。

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．

演習場から退散すると山元と言っていた人物が待ち構えていた。



この山元、どうやら提督なる人物らしい。私も提督と呼んだ方がしつくり来た為そう呼ぶことにする。

「提督、今日のやることは終いか？」

「そうだ。明日もまた演習だが・・・一週間ほど演習に出てもらったあと海域への出撃となる。」

「出撃が待ち遠しいな。」

「士気が高くて結構。だがしつかりと演習してからだ。」

「わかつてはいる。」

「本当か？大丈夫か・・・」

大丈夫だ、心配するなと付け加えたところで執務室とやらに到着する。ここには先に着任している艦娘とやらがいるらしい。艦娘、その名の通り艦の力を宿した娘達のこと言うらしい。その艦の力で深海棲艦をぶちのめすのが艦娘の役割だという。ここに通される前に話を聞いておいたのと知識として何故か頭の中に放り込まれていた情報を照らし合わせた結果だ。

「戻ったぞ。」

「お帰りなさい、提督。」

執務室の中にいたのは6人。みな初めて見る顔だが名前はすぐに浮かんできた。

「新しい戦艦は長門さんだったんですね！頼もしいです！」

手を合わせて喜ぶのは吹雪。

「へえ・・・これで戦力が拡張されるわね。」

腕を組んで視線をやるのは叢雲。

「おっきい戦艦ですね・・・」

少し引き気味なのが五月雨

「これで海域突破も夢じゃなくなりましたぞ！」

目を輝かせているのが漣。

「これでみんな助けられるのです・・・！」

あわあわしながら感想を述べる電。

「ふふっ・・・これで更なる進撃が可能になりますね。」

最後に立ち振る舞いに美しさのある扶桑。

「はじめまして・・・だな。戦艦長門だ。よろしく頼む。」

よろしくと6人が揃い返事をする。なんだ、なかなか良さそうなところじゃないか。

「早速だが長門の部屋割りだ。長門の寮の部屋は一先ず扶桑と一緒に。扶桑、構わないか？」

「はい、問題ありません。」

「よろしい。姉妹艦などが来た時には部屋割りを再考するからそのつもりで頼む。」

「わかった。」

「それじゃ顔合わせも済んだし解散だ。あ、長門はちよつと残ってくれ、書いてもらいたい書類があるんだ。」

「書類仕事は苦手なんだが・・・」

「大したもんじゃないよ。」

それぞれ吹雪達が出て行き扶桑と3人になる。書類仕事というほどではなく、着任の確認の様な書類だった。私は頭の中に存在する知識を頼りに書き上げ、提出する。

「そういえば扶桑、残りドックの様子はどうだった？」

「はい、提督。妖精さん達によりますと、あと三日ほどで出てこられるとのことですよ。」

「伊勢型戦艦が加われば更に戦力が拡充されるぞ。あとは空母が欲しいところなんだが・・・」

「そうですね・・・ですが建造は妖精さんと運次第ということがありますから・・・」

「考えても仕方ない。資材に余裕があるときに建造していこう。」

「そうですね。」

なるほど、私の他にも建造が行われているのか。伊勢型戦艦と言ったな、確かに戦艦が3隻も入れば戦力拡充は成されるだろう。

「書類はこれだけか？」

「ああ、そうだ。もう戻っていいぞ。扶桑、案内してやってくれ。」

「はい、提督。長門、こつちよ。」

今度は扶桑に連れられ外に出る。艦娘の為の寮は隊舎のすぐ近く

だそうだ。便利で良い。

「・・・扶桑、あの提督は信頼出来る提督か？」

「ええ、私達一人一人を気に掛けてくださる良い提督よ。」

「それはわかる。私が心配なのは・・・指揮の方だ。」

「それは・・・艦娘が現れてからそれほど時間が経ってないし、艦娘の指揮に関してはまだ研究中の面があるわ。」

「そうなのか・・・ならば仕方がないかもしれないが・・・些か不安だな。」

「一応大丈夫だと思うわ。無茶な指揮はしない人だし。慎重だから。」

「そうか・・・」

艦娘の指揮に関しては門外漢なので何も言えん。しかし慎重ならば大丈夫であろう・・・はずだ。私だって無茶な進撃はしたくない。

「ごこよ。」

「そうか。」

扶桑に連れられた部屋は4人部屋だった。今まで扶桑しか使わなかったらしく綺麗に掃除が行き届いている。

「ベッドは好きなどころを使つて。トイレはあつち、おふろは大浴場があるけど部屋にも備え付けであつち。箆笥は一番上は私が使っているから空いている所を好きに使つてちようだいね。」

「わかった。世話になるな。」

「いいのよ。これからは共に戦う仲間なもの。」

「そうか。」

「それじゃあ私は戻るわね。食堂とかは時間になったら迎えにくるか。」

「わかった。」

「じゃ、ごゆつくり。」

「ああ。」

扶桑が退室し、私は備え付けてある椅子に座る。着替え等の注文はさつき執務室の書類でしたし、風呂にも飯にもまだ早い。しかし今日はいろんなことがあった。建造、というか私が生み出され、演習して、みんなと出会って・・・ここまで考えてふと頭に単語が過ぎる。今日の状況を簡潔に説明出来てしまう単語だ。

「あつ。」  
「転生だコレ。」

やあみん・・・諸君。長門型戦艦一番艦、長門だ。私が誕生してからあつという間に一週間が過ぎ、私の演習期間が終わった。途中伊勢も参入し共に演習に明け暮れた。

「さっそく出撃かあーちよつと怖いね。」

「怖いことなどあるか伊勢。出るのは制圧されている海域だ。下手したら会敵しない可能性もある。」

「そーはいつでもさー」

こいつ戦艦のくせにビビりなのか？いや気ままな転生ライフを送ろうと考えた私が言えることではないか。

「ま、深海棲艦をぶちのめすのが仕事だし。いつちよ頑張りますか！」

「2人とも。出撃準備は出来た？」

「あ、扶桑。うん出来てるよ。」

「制圧されている海域とはいえ油断しないように。」

「了解した。もとより油断などしない。」

遅れて扶桑がドックに現れ、準備の有無を聞いてきた。準備は万端だ。初めての戦場で油断などあるはずもない。口ではデカいこと言っているがこれでも緊張はしている。無事に帰ってきたい。

「じゃああとは駆逐艦の子達の準備を待つてちようだい。」

「なに？まだ準備出来ていないのか。」

「提督の指示を聞きに行っているのよ。だからちよつと遅れてるの。」

「そうか・・・」

「私も弾薬のチェックしとこーつと」

伊勢が艀装の元へ向かうと頼まれた妖精さん達が騒がしくなる。私は大丈夫だ、事前にダブルチェックした為必要は無い。手間を増やすだけだ。

「じゃあ編成の確認よ。」

「扶桑を旗艦に私、伊勢、五月雨、漣、電の6人だろう。問題はない。」

「装備の確認は？」

「41センチ連装砲四基八門。水観も積んでいる。問題無いよ。」

「最終確認はこれで終わりね。」

「私たちの初陣だからと気負い過ぎではないか？」

「準備や確認はやりすぎるくらいがちょうどいいのよ。」

元来の性格だろうか。扶桑は入念に準備をしたがる傾向にある。確かに確認しないよりは良いと思うがちよつとやりすぎではないかと思わないいけない。

「すみません！遅れました。」

「ふいーご主人様ったら話が長いんだから。」

「で、でも準備は大切なのです。」

「それほど待つてないよ。さあ行こうか。」

「ええ、行きましょう。伊勢を呼んで。」

「ああ。」

．．．．．  
．．．．．  
．．．．．  
．．．．．

鎮守府正面海域。ここ横須賀鎮守府の正面海域は定期的に吹雪達によつて掃討されており、敵らしい敵はほとんどいなかった。クルーズ気分とまではいかないが大海原を潮風を浴びながら進むのは心地よい。

「水観から報告．．．敵影無し。」

「航路にも問題無し．．．と。」

「ええー全然敵いないじゃーん。」

「この辺りは吹雪ちゃん達と入念に掃討してますから。」

「そうは言つてもさーこれじゃあ拍子抜けだよ。」

「気を抜かないようにつて出撃前に言ったでしょう伊勢。はぐれだつているかもしれないんだから。」

「はーい。」

．．．．．まで敵影は無し。天気も快晴、波も高くない。伊勢の言い分も

わかる。私も初出撃だからと緊張していたが、これでは気も抜けてしまっただろう。私は砲塔の調子を確認しながら進んでいた。ウインウインと動かししていたら五月雨に変な顔で見られてしまったがまあ良い。

『・・・こちら司令、正面海域の様子はどうだ。』

「こちら扶桑。敵影も無く天気も快晴。航路も問題ありません。」

『そうか・・・せっかく戦艦が3人もいるから正面海域の外れまで行つてくれないか。近海の様子も見ておきたい。』

「了解、向かいます。」

「提督はなんだと?」

「正面海域の境界線まで向かって近海の様子を見てきて欲しいですつて。近海から侵入してくる深海棲艦も多いから・・・」

「なるほど、了解した。」

「そっち方面まで行けば敵いるかなあ。」

「もしかしたらいるかもね。」

「で、でも敵さんもない方が助かるのです・・・」

「まあそうだけど・・・」

提督の指示は正面海域の境界線まで行き様子を見てこいとのことだったが・・・何か気になる事でもあるのだろうか。まあ私たちは従う他ないので向かうことにした。

・・・  
・・・  
・・・  
・・・  
・・・

「ここが境界線か・・・」

そこは境界線を示すブイが浮かんでいてだけで静かな海だった。水観で偵察するものの妖精さんからは敵影無しとの報告が入る。

「静かなところだね・・・」

「ええ・・・でもこの先は深海棲艦の領域よ。変色海域もしばらく行つ

たら存在するわ。」

「変色海域？」

伊勢が訪ねるが私も知らなかったので扶桑の声に耳を傾けることにした。

「変色海域・・・上位深海棲艦の占める領域で海が赤く染まっているの。」

「なにそれ・・・」

「詳しいことは分かってないわ・・・でもその海域では生物が存在せず。海流もめちやくちやらしいの。私もまだ突入したことは無いわ・・・」

「でもいつかは突入して突破しなきゃならないんだよね・・・」

「そうね・・・」

「扶桑、境界線には到達したがそこからの指示は来てないのか。」

「様子を見てこいとしか聞いてないわね。」

「そうか、ならば境界線沿いに南下して戻ろう。初陣はそれで終わりだろう。無事に帰れそうで良かった・・・」

言葉を言い終える次の瞬間だった。水観から連絡が入り敵影有りとこの報告が入った。

「皆さん戦闘準備！」

ガチンガチンと砲塔や魚雷発射管を展開する音が響き、敵の襲来に備える。

「敵までの距離は!？」

「東に20km・・・こちらには気がついてない。」

「そう・・・」

「どうする？打って出るか？」

打って出るとの言葉に艦隊に緊張が走る。私もだ。冷や水を浴びせられた気分だ。

「敵の編成は？」

「駆逐2軽巡1空母1だ。」

「空母がいる・・・会敵は避けた方が良さそうね。」

「だな。敵の偵察艦隊だろう。こちらの水観も見つかって無い。」

「司令に繋がります。」



『・・・どうした?』

「敵の偵察艦隊と思わしき艦隊を確認。編成は駆逐2 軽巡1 空母1。こちらはまだ見つかっていません。どうしますか。」

『見つかってないなら無理に戦う必要は無い。見過ごそう。』

「了解。皆さん戦闘準備解除してください。」

戦わないのか・・・まあそれが指示なら仕方がない。変に敵を刺激する必要は無いだろう。そしてここが正面海域の境界線なのだということが感じられる。先ほどまで会敵する気配も無かったのに境界線まで来るとあっさり偵察艦隊と思わしき艦隊に遭遇する。緊張感がなかなか取れない。

「提督は慎重だと言っていたが・・・なるほどな。」

独り言を呟き、展開していた砲を元に戻す。慎重派の提督ならば無茶はするまい。

「さて・・・このまま警戒を続けましょう。こちらに向かってくる艦隊がいるならば迎え撃つことになるでしょうが・・・それまではこのままです。」

扶桑の鶴の一声で再び締め直した我々は境界線沿いに進み、また会敵することなく帰投することになった。

・・・  
・・・  
・・・  
・・・

私達は帰投した後、風呂に入り寮へと戻っていた。伊勢なんかは敵発見の報告から目に見えて緊張していたがやっとなんか解れたのだろう。缶ビールを片手に部屋の椅子でふんぞり返っている。

「やー今日はびっくりしたね。境界線ってあんなとこなんだ・・・」

「扶桑も言っていただろう。あの先は深海棲艦の領域だよ。」

「まあね。でも戦闘にはならなかったなー」

「自慢の砲を披露出来なくて悔しいか?」

「それもあるけど・・・本当は戦わなくて良かったかなって思ってる。」  
「ほお・・・あれほど敵を待ち侘びていたのにか？」

「だって空母がいたし、それに緊張したしきー敵がいるってわかった  
だけであんなことになるのにいざ戦ったらどうなるんだろうって。」

「情けない・・・もつと自信を持て。」

「だって生まれたばかりだしー」

やいのやいのと喋っていると扶桑が戻ってきた。提督への報告が  
終わったのだろう。これから風呂だろうか。

「ふう・・・ちよつと私がないのにもう飲んでるの？」

「いいじゃんかー今日は初陣だったんだし。」

「もう・・・私がお風呂から上がるまで潰れないですよ？」

「そんな飲まないよー」

「扶桑、今日の出撃、提督はなんと言っていた？」

「うーん、戦闘が無かったから2人の戦力が計れなかったのが痛い  
と・・・」

「そうか・・・まあこれから何度も出撃するのだ。戦力を計る機会など  
いくらでも来るだろう。」

「そうよね・・・まあこれぐらいにして私もお風呂入るわ。」

「大浴場に行かないのか？」

「疲れちゃって・・・」

「そうか・・・私たち2人のお守りご苦労さん。」

「ほんとよ・・・」

私達2人の戦力を計るなどこれからいくらでも機会がある。まずは  
初陣が何事も無く終わったことを祝おう。そうして私も缶ビールの  
蓋を開けた。

やあ諸君。長門だ。私たちの初陣から一週間が過ぎた。だがあれから出撃してはいない。演習の日々だ。提督は慎重派だと言うが少々慎重が過ぎやしないか？まあ考えがあつてのことなのだろう。私は粛々と従うのみだ。

「ふっ．．．ふっ．．．」

「今日も精が出るな。伊勢。」

「長門．．あれから出撃がないしねー。こうやって刀振つとかないと鈍っちゃう感じがしてさー。」

「まあダラけているよりはいいだろう．．．」

「それで？長門はどうしたの？」

「いや．．提督に呼ばれていてな。伊勢を探しに来たんだ。」

「わかった。これ片付けたら行くよ。」

「急げよ。」

「うん。」

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．

．

「提督来たよー。」

「ああ待っていたよ伊勢。」

「遅いわよ。」

「そう言わないでよ扶桑。」

「それで？提督、用事とはなんだ。」

執務室には提督と扶桑と私と伊勢しかいない。駆逐艦達は思い思いの日常を過ごしているようで執務室に近づく気配は無い。

「うむ．．そろそろ鎮守府正面海域から近海へと足を伸ばそうかと思つてな。」

「なるほど・・・それで戦艦だけ集めたのか。」

「近海へ出るのか・・・敵が多そうだね。」

「ああ。今まで正面海域しか使っていなかったがこれからは積極的に近海へ出ていく。作戦概要はこれだ。」

「どれどれ・・・九州奪還?」

「そうだ。九州を解放し佐世保鎮守府を置こうという大本営からの作戦だ。」

「ここは横須賀だぞ提督。長旅になるな・・・」

「その点は心配いらぬ。艦娘を派遣する無人高速出撃艇を準備している。これがあれば九州も目と鼻の先だ。」

「そうですね・・・」

「この出撃艇の完成が九州解放の要となっていた。これで近海より遠くの海域への出撃を可能とする。」

「なるほどな。この完成を待っていたというわけか。」

「そうだ。」

なるほどなるほど。足があるのと無いのでは出撃頻度にも関係があるしな。高速出撃艇、いいじゃないか。

「そしてもう一つ。戦艦各艦の改造も念頭にある。」

「私たちの・・・改造?」

「そうだ。艦娘は練度の状況によって改状態へと改造することが出来る。はれてうちの戦艦3人も改へと改造するに足りうる練度を獲得したと言えよう。」

「待て提督・・・練度が到達したと言うが扶桑はともかく私達は生まれてそう経っていないし、ほぼ演習しかしていないんだぞ? 本当なのか?」

「本当だ。妖精さんが言うんだから間違いない。」

「妖精さん・・・」

ちらりと机の上を見ると戯れ合っている妖精さんがいる。3人の妖精さんは視線に気づくと敬礼をして向き直った。

「( ? ? ) ( ? ? ) ( ? ? )」

「そうか・・・妖精さんが言うなら間違いないな。」

「これより3人の艦装を改にする改装に入る。改装が終わるまで出撃は出来ないが二、三日で終わる予定だ。その間正面海域は駆逐艦達に任せることになるが・・・まああの5人ならば改装も済ませているし練度も高い。そう問題になる事は無いだろう。」

「わかった。改装が終わるまで大人しくしていればいいのだな。」

「そう言うことだ。」

「では提督、工場に行つて妖精さん達へ改装の指示へ言つて来ますね。」

「頼んだ。」

「伊勢、私たちも戻ろう。」

「そうだね。じゃあ提督、失礼しましたー」

・・・

・・・

・・・

・・・

・

存外、暇だ。二、三日で終わると言っていたがその二、三日、何もする事がない。提督の手伝いでもすればと思っていたが扶桑に追い出されてしまった。どうにも書類仕事は苦手らしい。仕事を増やすだけになってしまった。ならばと体を鍛えていたが一日中するものでもない。何事も加減が大事だ。

「それで。長門さんは私達の所へ来たんですか？」

「まあ・・・そうなるな。」

「い、電は長門さんが来てくれて嬉しいのです。」

「まあいいけれど・・・」

「すまん。」

私は駆逐艦達の元へ来ていた。もちろんお土産持参である。今日は吹雪、漣、五月雨が出撃中の為叢雲と電しかいなかったが。

「長門さん艦装を改装中なんですって？随分と早いわね。」

「ああ、どうやら演習で上手く立ち回っていたらしい。」

「電も改装までするにはちよつとかかったのです。長門さんはすごいのです。」

「はは、そうでもないよ。」

叢雲はコーヒーを啜り、電はジュースを飲んでいる。個性が出るなあ。ちなみに私は紅茶だ。自分で淹れた。

「それにしても今日はあの3人帰りが遅いわね。午前中の出撃はもう終わりの時間の筈だけど・・・」

「そうなのか？ 帰投の時間など前後するものだと思っていたが・・・」  
「ま、何かあるなんてことは無いでしょう。正面海域は制圧済みだし・・・端まで行かなければ・・・」

叢雲が話している途中急に外が騒がしくなった。フラグを立てた訳だ。妖精さん達が慌ただしくドックへと向かっていく様子が見える。

「電！ 行くわよ！」

「はい！ なのです！」

「私も・・・」

3人でドックへと向かった。

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

「敵、哨戒艦隊と遭遇した？」

ドックへ向かうとそこは妖精さんで溢れていた。皆何かしら作業をしていて野次馬では無いことがわかるが・・・

「五月雨が大破・・・吹雪も中破・・・漣は良く無事だったな。」

「漣は奇襲にうまく対処ができただけ・・・それよりさっちゃんとぶつきーは?!」

「2人とも入渠中だ・・・あれ、は提督。」

「吹雪と五月雨は!?!」

「2人とも入渠中だ。提督は通信していたのではないか？」

「突然戦闘に入ったからな・・・漣も無事で良かった。」

「ご主人様申し訳ねえ・・・もつと偵察をちゃんとしていれば・・・」  
「敵には空母がいたらしいな・・・こちらも航空戦力の拡充をせねばならんか・・・」

敵に空母がいたのか・・・そういえば初陣の時も空母がいたな。敵も指を咥えているだけでは無いと言うことか・・・それにしても五月雨と吹雪が心配だ。後遺症がなければ良いが・・・

「ということは提督、建造はしていないのか？」

「建造はしているんだが・・・空母らしき艦娘は出来ていない。」

「そうか・・・そううまくはいかんか。」

「ああ・・・」

今は五月雨と吹雪の無事を祈ろう。

「空母の艦娘が出来た？」

やあ諸君。長門だ。どうやら空母の艦娘が出来たらしい。工廠に行つて飛行甲板とバルバスバウ確認されたとのこと。新しい仲間が増えるのは良いことだ。これで九州奪還に光明が差したな。

「それで提督。九州の奪還は空母の艦娘が完成してから行うのだな。」  
「そういうことになる。それまでは近海周辺の一掃が主な任務になる。」

「わかりました提督。こちららも準備を整えて、ですね。」

「そのつもりで頼む。」

先日五月雨と吹雪が損傷を負つて帰つてきた。近海に強力な空母が出現したことで鎮守府正面海域への侵攻を抑制する意味もあるんだろう。

「あー敵に空母がいる編成が増えてきたからねえ・・・」

「多少の無茶をしても近海の安全を確保しないと九州への足掛かりになりませんかからね。」

「伊勢と扶桑の言う通りだ。みんな。よろしく頼むぞ。」

「了解！」

.....

海を往く。今回は近海への進出となる。慎重派の提督も積極的に戦闘をすると言っていた。言っていたのだが・・・

「こうも敵に遭遇しないとは・・・」

「あーなんか呆気ないね。」

「で、でも敵と遭遇しない方が良いのです。」

「そうは行かないわよ電。今回の任務は掃討。敵と遭遇しないとイケ



「ナイんだから。」

「はわわ・・・」

「まあ・・・なんだ。叢雲、電。敵と遭遇したら戦艦組が盾になる。そう心配しなくても良い。」

「でも・・・戦艦だつて沈むのです・・・」

「電探に感あり！」

「そら敵さんだ！気を引き締めろ！」

「はいっ！」

水偵を呼び戻し、感のあつた方へと向けた。敵の編成は・・・駆逐2、軽巡3・・・統率の取れた動きから哨戒艦隊だと思う。

「先制攻撃を仕掛けます！戦艦前へ！」

扶桑の掛け声で伊勢と並び41cm砲を向けた。

「撃てえーっ！」

砲口から徹甲弾が吐き出され、敵艦隊へと吸い込まれていく。改 $\square$ となつた艦装は照準性能が上がっている。砲弾は敵艦隊へ全弾命中し撃沈せしめた。

「敵艦隊・・・全隻轟沈確認。お疲れ様でした。」

「ふう・・・」

「流石戦艦ね。この調子で行ければ良いけれど・・・」

「まあざつとこんなもんでしょ。空母いなかつたし。」

「そうだな・・・」

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

それからというものの敵艦隊を見つける度に先制攻撃を仕掛け撃沈し続けたが・・・ふうむ。

「空母がないな・・・」

「へ？それがどうしたの？」

「私達の初陣の時もいた、そしてつい先日五月雨達が損傷した時もあった。だが今日はいない。これはどういうことだ・・・？」

「別な海域に移動したんじゃないのー？」

「たわけ。いないならば良いというものではない。」

「えー・・・」

「扶桑。」

「何かしら？」

「我々五隻だけでは不安が残るがもう少し遠くへいかないか？」

「・・・」

考え込んでしまった・・・戦艦組が揃っているし六隻編成ではないが空母を仕留めきれないというのはいただけでない。提督も不安が残るだろう。扶桑ならばその辺りわかってくれそうではあるが・・・  
「わかったわ。もう少し、先に進みましょう。」

「了解した。」

「皆さんも、いいですね？」

「いいわ。」

「なのです。」

「あたしも。」

「よし。ならば行きましょう。」

「水偵から敵艦発見の報！」

「戦闘準備！」

「はい!!」

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

近海深部へと進んで行く。段々と敵艦との遭遇が多くなり、疲弊していくが空母撃破とはならなかった。いったいどういことだ・・・

？

「・・・ふう。皆さん弾薬燃料を報告してください。」

「長門、損傷無し。燃料はまだある。弾薬もあと二、三戦するくらいには大丈夫だ。」

「伊勢、同様です。」

「電、燃料弾薬ともに十分あるのです。先制攻撃で倒せてたから・・・叢雲、同じく余裕があります。」

「そう・・・空母は撃破出来なかったけれど今日はこの辺で帰投しようかしら・・・」

「そうだな。帰りも余裕を持つておきたい。空母撃破とはならんかったが提督も文句は言わんだろう。」

「そうね・・・それじゃあ帰投しま・・・」

「敵航空機!!!」

「ツ・・・!!対空砲火!!!」

装備はしていないが艤装備え付けの対空砲で弾幕を張る。電や叢雲も高角砲で応戦しているが・・・!

「敵機直上!」

「!いかん電!」

「ふえっ!?!」

電を引つ掴んで直撃コースから退ける。代わりに私の体を滑り込ませたが敵航空機から爆弾が吐き出された・・・

「ぐっ・・・おおお!?!」

爆発が身を包み、有毒ガスから身を守る為に目を瞑り口を閉じる。感覚からすると・・・微損にもなっていないな。大丈夫だ。

「長門さん!?!」

「長門!!」

「・・・大丈夫だ!対空砲火を続けろ!!」

「敵はどこから来ているの!?!」

「水偵は潰される!電探は!!」

「感無し!!」

完全にアウトレンジからということか・・・空母の本領発揮というわけか。これ程までに完璧に奇襲を仕掛けられるとたまったもので

はない。

「あたしが航空機が来た方向に出る！電探で掴んでくるよ！」

「わかったわ！」

伊勢が離れて行く。航空機が集中しないよう駆逐艦を守りつつ対空砲火を多くしていく。伊勢間に合わせてくれよ……！

「きやあつ！」

「叢雲！！」

「大丈夫……機銃で撃たただけっ！！」

「このままではジリ貧だ……伊勢まだか！」

「至近弾が増えていく……！」

『敵艦！見つけたよ！！』

「でかした伊勢！扶桑！」

「ええ！打って出ます！」

敵航空機を交わしながら伊勢のいる方向へと向かう。大丈夫だ。いつも通りにやればいい！

私たちは敵空母へと呐喊した。